聖魔戦記　前奏曲

金城　ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖魔戦記　前奏曲

【Ｎコード】
Ｎ０４２２Ｄ

【作者名】
金城　ユウ

【あらすじ】
金眼の魔王は蒼の聖女と出会い、勇者と呼ばれた青年は魔族の乙女と出会う。このふたつの出会いが歴史を加速させる。戦乱の王国に訪れる運命は？剣と魔法のファンタジー戦記が幕を開ける。※不定期連載になると思います。第２章に突入しました。

ＦＩＬＥ００：プロローグ（前書き）

ヴァンパイアハンター日誌だけでも手一杯なのに、連載始めてしまいました。不定期連載になると思うのですがよろしくお願いします。

FILE00：プロローグ

市でにぎわう街の路上で、子供たちが集まっている。
いや、子供たちだけでなく大人の姿も見られる。その中心にいるのは1人の年老いた吟遊詩人だ。
吟遊詩人は演奏していたハープの手を止め、子供たちに問う。
「さあ、どんな物語をお望みかな。勇ましいドラゴンスレイヤーの物語？　魔法を使って不思議な旅をする青年の物語？　それとも、美しい姫君と騎士の恋物語かな？」
吟遊詩人に聞かれた男の子は、周りの友達とひそひそ話をした後に大きな声で答えた。
「聖魔戦記！」
それは、２００年前にあった聖魔戦争の物語。この国の子供が繰り返し、親から聞かされ親から子へ、子から孫へ語り継がれる物語。
「聖魔戦記。幸せな物語ではないが……　坊やはこの物語が好きかい？」
「うん！」
少年は大きく頷き、それを見た吟遊詩人は子供の頭をなで微笑んだ。
「では、語ろう。金眼の魔王と蒼の聖女の出会いを！　歌おう。勇者と呼ばれた心優しき青年と魔族の乙女の出会いを！　紡ごう。それに続く、魔王と勇者の悲しき運命を！」
再びハープの演奏が始まり、そのしらべを聞いた人たちがさらにあつまってくる。
こうして、物語の幕は開かれた。

次回予告

戦場の野戦病院。
傷ついた兵たちを治療するために彼女はそこにいた。
自軍の敗北。
その時、彼女は決断を下す。

次回　蒼(あお)の聖女

風があなたに物語を運ぶ。

第1章　FILE01：蒼の聖女

戦場の外れに張られたテントの中で、蒼い修道服に身を包んだ女性達が怪我人達の手当てに追われている。
傷の軽い者には応急処置を施し、重傷者には神の奇跡、神聖魔法で使い傷をふさいでいく。
彼女達は天地創造の神ガイアを信仰する女性たちで、ある程度修行を積み神聖魔法を修めた者たちだ。青い修道服と首から掛けられた世界樹と呼ばれる木をデザインしたホーリーシンボルがそのことを示している。
しかし戦闘が長引くに連れ負傷兵は増え、死者も増えていく。魔法も万能ではなく、魔法を使える人間も無限に使用することはできない。
「司祭様！」
テントに飛び込んできた若い兵士が一人の女性を呼ぶ。
司祭と呼ばれたがまだ二十歳前の若い女性だ。他の者とは違い修道服の上から蒼いブレストアーマーと呼ばれる部分鎧を装着し、腰には二本のショートソードを下げている。布教のための知識だけでなく戦う術をも身につけた神官戦士だ。
この大陸では珍しい艶やかな黒髪に黒檀のような双眸、そして透き通るような白い肌がその戦装束とマッチして硬質の冷たい凛々しさを醸し出すが、慈悲に満ちた表情が見るものに安らぎを与える。
「司祭様お逃げください。戦は我軍の……　我軍の敗北です。ここにもすぐに敵が押し寄せてきます」
兵士の報告に、司祭と呼ばれた女性は静かに頷く。
「わかりました。貴方達には引続き護衛を頼みたいのですがよろしいですか？」
「ええ、よろこんで」

頭を下げ、若い兵士はテントを出て行く。
「ルナ侍祭(じさい)、貴女が皆さんを率いてお逃げなさい。動かせない者は置いていきます。急ぎなさい」
矢継ぎ早に修道士達にいくつかの指示をだす。
「ルノア司祭様は、いかがなさるのですか？」
「私は残ります。動けない者を見る人間も必要です」
「司祭様いけません。貴女にこそ無事でいてもらわないと」
「ごめんなさい、ルナ」
そう言って司祭、ルノアと呼ばれた女性はルナを抱きしめた。
「あなたには迷惑をかけてばっかりだけど引き受けてちょうだい。ごめんなさい、私の我儘(わがまま)を許して」
ルナを放したルノアはいつものように微笑んだ。その微笑を見たルナはルノアの決意が揺るがないことを思い知る。こうなるとこの人は頑固(がんこ)だ。
「さあ、皆さんも急いで。時間がありません」
ルノアは負傷兵達に声をかける。一人でも多くの命を助けるために。

「貴方達に、慈悲深きガイアの加護があらんことを」
ある者は歩いて、ある者は荷馬車に詰め込まれ逃げて行く者達にルノアは祈りをささげた。
何人か「残る」と訴えた者もいたが、ルノアは一人ずつ根気よく説得した。ここから先は命の保障などありはしない。
取り残された重傷者の何人かがルノアにも逃げるように訴えるが、ルノアはただ首を横に振り微笑む。その笑みを見て持祭のルナと同じように、彼らはルノアの決意が硬いことを知り、そして自分たちが見捨てられたわけではないと思う。ルノアに助けられた兵達が彼

女を慕(した)い『蒼(あお)の聖女』と呼ぶのも無理はない。
「さあ、もう休んでください。傷に障ります」
その時、一人の男がテントに入ってきた。右手に持った大剣(グレートソード)は血に濡れ、全身返り血で汚れているがどうやら傷を負っているようだ。彼はテント内を一瞥(いちべつ)し、ルノアたちに向かい大剣を構えるがそのまま倒れた。
「魔族……」
負傷兵の一人がつぶやく。
男の指先には獣のように鋭い爪が生えており、腕は金色の毛におおわれ、顔は狼のようだ。その異形の姿はこの男が魔族であることを示す。
だが、人間と魔族の間にはそれほどの違いはない。
体の一部が異形で頭に角が生えていたり、犬や猫のような耳や、瞳をしていたり、眼前(がんぜん)で倒れてる男のように狼男みたいな例もあるし、姿は人間とまったく変わらない場合もある。個人によって姿かたちは違うが、共通点は総じて魔力が高いということだ。
そして数は少ないが人間と魔族の間で子供を成した例もある。
ルノアは男の下へ駆け寄ると傷の箇所を調べる。頭部と腹部に負った傷が深い、血液もだいぶ失ったようだ。このままでは半時(はんとき)を待たずに天に召されるだろう。
ルノアは男の傷に手を当て、深く深呼吸すると呪文と唱える。
「慈悲深きガイアよ。傷つき倒れたこの者に癒しの奇跡を」
魔法(ルーン)の言葉(ワード)と共にルノアの手が光を放ち男の傷がふさがっていくが、魔法とて万能な力ではない、傷は外見上消えてしまったが血液を失いすぎている。後は男の生命力次第だろう。
ルノアは負傷兵たちが男に向ける憎悪の視線を無視して、男をベッドまで運んだ。

次回予告

負傷者を守るため剣を抜くルノア。
その場に現れた黒衣の騎士。
金眼の魔王と蒼の聖女。
この出会いは偶然か？　運命か？

次回　戦場の出会い

風があなたへ物語を運ぶ。

第１章　ＦＩＬＥ０１：蒼の聖女（後書き）

第１話、お付き合いありがとうございました。

剣と魔法のファンタジーものは最近少ないですね。私が学生の頃は主流だったのですが……

あえて時代の流れに逆行して執筆して行こうと思います。

第1章　ＦＩＬＥ０２：戦場の出会い

「司祭様……　魔族を救う必要があるのですか。こいつらは俺達の仲間を」

負傷者の一人が言う。他にも頷いている者もいる。

「貴方達の気持ちは分かりますが、私には目の前で苦しんでいる人を、見捨てることは出来ません。たとえ敵であっても……　ですからこの中ではケンカや、殺し合いは禁止です。分かりましたね？」

そして、一人一人の目を見つめる。見つめられた男達は皆、視線を地面に落とす。なぜだか心の奥底まで見透かされそうな気がしたからだ。

「少し、外の空気を吸ってきます。おとなしくしていて下さい」

ルノアはそう言い残し、魔族の男の剣を持ってテントの外に出る。そして入口近くに剣をつき立てた。動くこともままならないとはいえ、先ほどまで敵対していた男達が同じテントにいるのだ。武器を彼らの目の前に置いて置きたくない。

ため息をついて周りを見回すが、敵軍どころか人影さえ見えない。負けたとはいえ指揮官がよかったのか、総崩れにはならなかったのだろう。それでも、ここが発見されるまでそれほど時間の猶予があるとは思えない。

突然、ズドンと４ｍほど手前の地面が爆発する。

カタパルトからの投石？　いや、ファイヤーボールの魔法。そう判断したルノアは両腕で顔をガードし、爆風に耐えながら魔法の呪文（ルーンワード）を唱えた。

「ガイアよ。我に不可視の盾を」

魔法が発動すると同時に2回目の爆音。が、ルノアは平然と立っている。魔法の発動がもう一呼吸遅ければ怪我どころか跡形もなくなっていただろう。

「いきなりとは、失礼ではありませんか？」

不可視の魔法で隠れていたのだろうか。ルノアの声に5人の男が姿を現す。血と泥で汚れた硬皮鎧を身に着け、片手で扱う剣と盾を持っている。血に酔っているのか目が血走っていてとても話を聞いてくれる状態にない。ルノアは説得を諦め腰のショートソードを抜いた。

連携もなくただ剣を振り回す男達をすれ違いざまに2人切り伏せる。それを見て男達が距離を取った。と同時に爆音。

まだ1人隠れている。それも魔法使いが。

しかし、魔法の護りがあるルノアには影響しない。逆にその爆炎にまぎれて距離を詰め、また1人切り伏せた。

「引きなさい。3人とも急所は外しています。早めに手当てすれば助かります」

剣を構えたまま男達に警告する。が、男達は引く気はないようだ、恐怖の色を顔に張り付かせたまま突っ込んでくる。ルノアは舌打ちしつつも迎え撃つ。

しかし、剣を合わした瞬間ドスッという重い音と共に男との間に棒状のものが割り込む。男とルノアの剣が宙を舞い、男とルノアの間には3メートルほどの騎士達が馬上で使う騎上槍(ランス)が地面から生えていた。

騎上槍(ランス)が飛んできた方向に視線を送ると、黒い板金鎧(プレイトメイル)に身を包んだ5騎の騎兵が進んでくるのが見えた。

ルノアは反射的に腰に残ったショートソードに手を伸ばすが、抜くのはあきらめた。襲い掛かってきた兵士達も呆然と近づいてくる騎士達を見ている。

重量のある騎上槍を40メートル近くはなれて戦う人と人の間につき立てた技量(うで)に加勢が4騎。それに対してこちらの武器はショートソード一本のみ。魔法を使えることを差し引いてもとてもかなう相手ではない。

騎上槍を投擲した騎士がルノアの前にくると馬から下りた。背はそれほど高くない。ルノアより10センチほど高い170センチく

らいか。
騎士が兜を取ると長い銀髪が流れる。そして金色の瞳。特徴からすると金眼の魔王その人だが、とてもそうは見えない。どこかの貴族のお坊ちゃんという感じだ。
「おとなしく降伏してくれないかな。君の命の保障はしよう」
「金眼の魔王の言葉とは思えないけど……」
金眼の青年は肩をすくめ笑った。その笑顔はまるで子供のように無邪気だった。
「俺が金眼の魔王と呼ばれているのは事実だ。君が俺のことをどう聞いているか分からないが、助かる命をむざむざ失いたくない」
「では、私が傷つけたその怪我人達をテントの中に運ぶので手伝ってください。それとテントにいる人達の命の保障。これを条件に降伏いたしましょう」
金眼の青年は愉快そうに、声を立てて笑った。
「蒼い聖女殿、君の勝ちだ。その条件を飲もう」
時に聖神暦（せいしんれき）１２４年４月２０日のことであった。

次回予告

捕虜となったルノアは、その後も魔王軍に残った。

そして、ガイア教団より魔王軍の従軍神官として正式に任命される。

次回　従軍神官

風があなたに物語を運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ０２：戦場の出会い（後書き）

第２話をお届けしました。
今回も読んでいただきありがとうございます。

魔王と蒼い聖女の出会いでした。
ドラマティックな展開ではありませんけど（笑

それでは、またお会いしましょう。

第1章　ＦＩＬＥ０３：従軍神官

フィロス砦は魔族が築いたものであったが、そこに住む女子供を含む非戦闘員まで皆殺しにして王国軍側が手に入れたのが半年前。そして、砦は魔王軍側に完全包囲され半年前と逆の状態に陥っている。

「3万の兵に囲まれて2週間……　よく持つ」

銀髪金眼の青年が砦を眺めながら呟く。傍には黒い甲冑に身を包んだ4人の騎士が控えている。

そこに、身長3メートルはある大男が近づいてきた。

「レイバ様、敵増援部隊を退けてきましたぞ」

自慢げに報告する大男に、レイバは不愉快そうに言った。

「ラスター、俺は補給部隊を叩けと命令したはずだが？」

「無論。補給部隊は叩いて、物資も鹵獲しております」

「その後、勝手に兵を動かした……　か。ラスター。今回は大目に見てやる、次に命令違反を犯したら、たとえ功を立てても指揮官から外す。覚えておけ」

ラスターを追い返すとレイバはため息をついた。ここのところ勝戦が続いたせいか命令違反を犯すものが出てきた。勝てば良いという悪い考えだ。

「ジェニス。今後の命令違反、軍規違反は厳罰を持って処理する旨、全軍に再通達しろ。良いか俺に二言は無いぞ。あと、ルノア司祭はどうしている？」

ジェニスと呼ばれた黒騎士が答える。燃えるような紅い髪をして左腕が無い隻腕の騎士だ。その背中には2メートル近い、通常の人間では到底振り回せないほどの大剣を背負っている。

「今の時間でしたら兵達に説法をしている頃です。この2ヶ月でガイア教の信者が2倍以上になりましたから」

「ルノア司祭の力も大きいが、彼の宗教は魔族の存在も認めている

からな」
「しかし、司祭殿が我が軍に残られるとは思いませんでした。何故でしょう？」
ジェニスの問いに、レイバは軽く首を振る
「さぁな、従軍神官もいない我々を憐れんだ、だけかも知れぬ」
従軍神官とは敵軍との外交交渉を行う役職だ。
戦時中は敵軍に送った使者が殺害されることは日常茶飯事だ。それを防ぐために第三者である宗教団体の者から使者を選んだのが始まりとなった役職で、教団からの出向という形になっている。
無論、信仰に対する強い思いだけでなく、軍事的な戦略眼、知識も必要とされまさにエリートといっても良い。
所属する軍のために最善の道を探る従軍神官自信が、軍内部もしくは国家内部で力を持つことも珍しくなく、軍師のような地位にいるものも珍しくない。そして、それがその国に対する各宗教団体の影響力にもなるため、各宗教団体から複数人送られているのが現状だ。
場合によってはリューム王国の側室レティシア妃のように、従軍神官が王族に見初められ輿入れし教団との関係が強化されることもある。
「でも司祭殿を見ているとそんな感じはしませんね」
「ああ、そうだな。それで話は変わるがルノア司祭を呼んで来てくれ」
「それには及びません」
良く通る澄んだ声にレイバ達が振り返ると、ルノアが立っていた。
この大陸では珍しい黒い髪が風になびいている。その後ろには魔族の青年が付き従っている。２ヶ月前の戦いでルノアに助けられて以来ルノアに心酔している。名前はグロウという、純粋な戦闘力だけを比べるなら黒騎士達にも引けを取らない戦士だ。　護衛役としては適任ということでレイバも同行を認めている。
「良いタイミングだな。司祭の話から聞こうか」

「はい、お願いがあって参りました。医薬品が不足しています。調達してはいただけませんでしょうか？」
　ルノアは単刀直入に切り出す。
「良いだろう。リストをジェニスに渡してくれ。他には？」
「ガイア教団より、私が魔王軍の従軍神官として正式に任命されました。いくらか、人手も送ってくれるそうですが余り期待しないで下さい。あくまで志願で決まりますから」
「教団が、よく許したな」
「いえ、以前から従軍神官を派遣する話はあったのですが……」
「志願者がいなかったということか」
「はい、私もリューム国での任期が残っていましたので……」
「いや、司祭が気に病むことではない。貴女が来てくれたおかげで、どんなに助かっているか。これからもよろしく頼む」
　ルノアは、レイバが差し出した右手を握った。
「それでだ、早速ではあるが従軍神官として初仕事を頼みたい。私の天幕まで来て欲しいのだが」
　ルノアは笑みを浮かべて一礼した。

次回予告

少女は砦に対しての総攻撃を主張する。
それに反対するルノア。

次回　魔王軍の軍師

風があなたに物語を運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ０３：従軍神官（後書き）

今回もお付き合いありがとうございます。

今回は従軍神官の説明が入りました。
次回から少しストーリーが動き始めますよ。

昨日、外伝1を最後まで更新しました。良かったらこちらもお読みください。
過去のルノアの活躍が読めます。

第1章　ＦＩＬＥ０４：魔王軍の軍師

天幕には先客がいた。白磁の肌とフワフワの金髪、フリルとリボンのついたワンピースを着て胸に子犬を抱いている。一見するとお人形のようだが、その美しさより生気に満ちた瞳が印象に残る。そんな少女だ。

「お持ちしておりました」

少女がレイバに頭を下げる。

「待たせてすまなかったパンドラ。さて軍師殿と従軍神官殿に集まってもらったのは、フィロス砦の攻略についてなのだが……」

レイバの言葉の途中で少女が挙手した。左手では蜂蜜茶の入ったカップを弄んでいる。

「パンドラ、何かあるのか？」

「レイバ様の口ぶりからするとお心はお決まりと思いますが、軍師として意見を申し上げてよろしいでしょうか？」

レイバは頷く。

「では、フィロス砦の守備兵３０００。殲滅すべきです。それも、できるだけ惨たらしく。敵軍の頼みであった補給部隊と増援は既に叩いてあります。この情報を流せば敵は打って出るしかありません。そうなれば数で潰せます。それに、後々の戦いでも我々に対する恐怖を植付け有利に進めることが出来ると存じます」

初夏の風のような涼やかな声で、天気の話でもするように敵兵を皆殺しすべきだと話す少女。

「私は反対です」

テーブルの反対側に座っていたルノアが立ち上が、発言する。

「あら、どうしてかしら？　半年前にあなたの同胞である人族が私たちを相手にやったことよ。あのときは非戦闘員の女性や子供達も犠牲になった。今回、非戦闘員は非難した後だから犠牲になるのは

軍人だけ。戦って死ぬことも軍人の仕事のうちよ」
　パンドラはそう言って、ルノアの視線を真正面から受け止める。
「それであなた達は戦争を止めましたか？　恐怖より憎しみにとらわれませんでしたか？　身内が殺されれば力なき者でも剣をその手に取りましょう。追い詰められれば窮鼠と化します。そのような連鎖はどこかで断ち切らねば、戦争は泥沼になります」
　ルノアも真っ直ぐパンドラの視線を受け止める。先に視線を外したのはパンドラだ。
「それでは、ルノアさんはどうすればよいとお考え？」
「降伏勧告を……　必ずまとめて見せます」
「無理ね！」
　パンドラが即答し続ける。
「彼等が何故これほど粘れるのか考えたことありますか？　彼らは自分たちが犯した影におびえているのです。半年前に自分たちがやったことと、同じことを我々がするのではないかと恐怖におびえ、それが背水の陣となっているのです」
　パンドラの言うことはルノアにもわかっていた。しかし、それでも無駄に血が流れるのを嫌った。すでに勝敗は決している。これ以上の流血は敵味方共に無用なものだ。
「今のフィロス砦の守備隊長は、ヴァネッサ＝クロウリー上級千騎長です。彼女は純粋な武人であり話もわかる人物です。交渉さえさせてもらえば必ず」
パンドラは、カップに残った蜂蜜茶を飲み干すと、ルノアのほうを見る。
「仮に敵が降伏したとして……　失礼ですけど我が軍の台所事情はご存知？　３０００もの捕虜をどうやって食べさせろと言うの？　そんな余裕ないわ。武装解除して開放？　冗談じゃない！　後の禍根を残してどうするの？　戦術的に予備兵力３０００、あるのとないのでは大違いよ」
　部屋に沈黙が流れる。パンドラの言うことは正しい。捕虜を食わ

すことが出来なければ、殺すか解放するしかない。開放するとなれば戦場であいまみえるのは確実だ。
今まで2人の発言に口を開かなかったレイバが、沈黙を裂いて発言する。
「軍師殿には悪いが今回は降伏勧告を出すつもりだ。無血開城できるならそれに越したことは無い。捕虜は取らず武装解除の上開放する。ただし、砦の指揮官及び主だった部隊長には、ルノア司祭に束縛の魔法をかけてもらった上で解放する。こんなところでどうだろうか？　パンドラ」
「御意。そこまでお考えでしたら私の出る幕はありませんわ」
パンドラは、新たに注いだカップの蜂蜜茶を飲み、幸せそうな顔をする。
「ルノア司祭、聞いての通りだ。書状は準備してある。後は頼む」
はい、お任せください。必ずや成功させます」
書状を受け取り天幕から出て行こうとするルノアに、パンドラが声をかける。
「従軍神官殿、お帰りになられたら一緒にお茶でもいかが？」
「そうね。戦闘にならなければ時間取れると思うわ」
「では、ちゃんとまとめてきて下さいね」
軍師パンドラは、蜂蜜茶の入ったカップを頭上に掲げて、ルノアを送り出した。

次回予告

降伏勧告のためにフェロスとりでに赴くルノア。
その頃フィロスとりでは。

次回　フィロス砦

風があなたに物語を運ぶ

第１章　ＦＩＬＥ０４：魔王軍の軍師（後書き）

王国軍の階級についてですが、簡単に説明すると上からこういう並びになります。

上級将軍（軍の最高司令官）

将軍（１万以上の兵を率いることが出来る実戦部隊の長）

上級千騎長（１万以下の兵を統率。砦の指令官や地方の治安維持部隊長、後方支援部隊の長など）

千騎長（１千以下の兵を統率）

百騎長（１００人程度の部隊を統率）

十騎長（１０人程度の部隊を統率）

その他質問などがあればメッセージか感想をください。あとがきなどで対応いたします。

第1章　FILE05：フィロス砦

「増援は、まだこないか」
声の主は亜麻色のショートカットに黒い瞳をしたまだ若い女性だ。おそらく20歳前だろう。
城壁からは、十重二十重（とえはたえ）に取り囲む敵軍の姿しか見えない。食料などはいくらかの余裕もあるが、昼夜問わず行われる魔法や少数部隊による攻撃が精神を削ぎ落としていく。このままでは内部から瓦解しかねない。
「強行突破するか……」
「ちょっと、ヴァネッサ。落ち着いてください」
口をはさんだのは、ひょろっとした背の高い銀髪碧眼の男だ。蒼い色のガイア教の神官服を着て胸には世界中のホーリーシンボルを下げている。従軍神官だ。
「うるさい、軟弱男。おまえも従軍神官なら勝利に導け」
イライラとした様子で、八つ当たりするヴァネッサ。このようなやり取りは日常的なのか周りの兵たちは、また始まったと苦笑を浮かべながら眺めている。
「無理を言わないで下さいよ。貴女と比べたら、大半の男は軟弱と言うことになりますよ」
「お前も、魔王と同じ銀髪だろ。目は青いが……　さあ行け！　行って魔王と一騎打ちでもして倒して来い！」
従軍神官に魔王を倒してこいと無茶を言うヴァネッサだが、もちろん本気で言っているわけではない。
「そんな事、言わずに降伏してみるというのは……」
「ええい、却下だ、却下。我が軍が半年前なにをしたか忘れたか。こっちにその気があっても向こうが拒否するに決まっている」
ヴァネッサがため息をつく。半年前の虐殺さえなければ、降伏と

いう選択肢も選べたのだろうが……　魔王軍も決して許しはしないだろう。その場にいなかったとはいえそのことを知ったときには、ヴァネッサも激しい憤りを感じたのだ。
　ガイア教の従軍神官、ハット＝レプスリーはこのフィロス砦の司令官であるヴァネッサ＝クロウリーを見つめる。ショートカットの亜麻色の髪が風に揺れ、愁いを秘めた黒檀のような瞳が美しい。ここ2週間、ろくに休んでいないはずだが少なくとも部下の前では疲れた様子を見せない。強い人だと思う。
「ヴァネッサ、敵の攻撃も無いことだし少し休んだらどうだい」
「ああ、そうだな。そうさせてもらう」
　いつもの彼女なら否定の怒声が響くところだが、やはり疲れているのだろう、おとなしく頷く。
　ヴァネッサは副官に指示を出し私室の方に歩いていく。その後ろを従卒の少女がついて行く。
「ハット殿、先ほどこのような書状が届きました」
　ヴァネッサと入れ違いに入ってきた兵士が差し出した書状には、ガイア教のシンボルである世界樹の紋章がついている。ガイア教団本部からの連絡書だ。中にはルノア＝ティア司祭が魔族側の従軍神官に任命されたことが記されていた。それを読んだハットの口元に笑みが浮かぶ。
　彼女なら無駄な戦闘は避けようとするだろう。
「こうなると、援軍の到着は遅れた方が好都合なのだが」
「ハット殿！　すみません。すぐ来てください。怪我人が、飛び込んできまして……　我々では……」
　突然飛び込んできた兵士に、腕を引かれ引きずられていくハット。城壁には見張りの兵士だけが残された。

次回予告

フィロス砦にたどり着いた兵士のもたらした情報は、砦の選択肢を定める。
その選択肢を前にヴァネッサは？

次回　凶報

風があなたに物語を運ぶ

第1章　ＦＩＬＥ０５：フィロス砦（後書き）

更新遅れました。お待たせしましたＦＩＬＥ０５をお届けします。

考えて見れば、外伝の２話と本編含めてガイア教の男性神官が登場したのってハット君が初めてです（笑

ちゃんと男性もいますよ。

設定上ガイア様は女性神なので、その神官たちも女性のほうが目立つのですかね？

（読者に聞いてどうするよ（笑　）

第1章　ＦＩＬＥ０６：凶報

城門では血だらけで倒れている男の周りに、幾人かの兵士が集まっていた。
ハットはとりあえず男の脈を取る。診るまでもなく手遅れだ。たとえ魔法を使っても苦痛を長引かせることになる。
「何か、言い残したい事はあるか？」
男に訊ねる。荒い息の下男が必死に言葉を紡ぐ。
「…ぞ…増援ぶ……たい…は……ぜんめ…つ」
男の体から力が抜けた。
ハットは男の瞳を閉じ、手を胸の前で組んでやる。そして、ガイアに祈った。
「ガイアよ。傷つき力尽きしこの者を楽園へと導きたまえ」
「ハット」
いつの間にかヴァネッサが背後に立っていた。
ハットは困ったような顔をして、頬を掻きながら向き直る。
「ヴァネッサ。いい話と悪い話がある。どっちから聞きたい？」
ハットの言葉を聞いて憮然とした表情をするヴァネッサ。
「悪いことからにしてくれ」
「増援部隊が全滅したらしい。おそらく補給もパーだ。兵を５０００しか出さないからこうなる。増援より敵の部隊のほうが、数が多いのだからこうなるのも当たり前だ。よほどの軍師が付いていたら、結果は変わっただろうけど」
ハットの言葉を聞いても、ヴァネッサは表面上は平静を保っている。
「それで、いい話とは」
「魔族側の従軍神官に、ルノア＝ティア司祭が正式に任命された。つまり、降伏の可能性も出てきた。もしかしたら降伏勧告がくるか

も知れない。これで選択肢が増えたわけだ」
　ヴァネッサは頷き、目でハットに続きを促す。
「ひとつ目が、全滅するまで立て篭もる。が、長くは持たん。陥落も時間の問題だ。ふたつ目は、敵の包囲網を強行突破する。可能性は無くも無いが増援の援護も得られない今、全滅の可能性のほうが高い。みっつ目は、降伏。こいつの結果は分からない。でも部下の命を最優先するならこちらがお奨めだね」
「相手がルノア司祭なら、なおさらみっつ目の選択肢が現実的というわけか」
　ヴァネッサもルノア司祭とは面識がある。この戦、勝敗はすでに決している。次の増援が来る前に砦は落ちるだろう。だが……
　ハットはヴァネッサの黒い瞳を見つめる。それに気が付いたヴァネッサがハットから視線を外した。まだ迷いがあるようだ。だが次の瞬間彼女は力強い声で従卒の少女に指示を出す。
「ハットも会議室にきてくれ皆の意見が聞きたい」。
「いいのか、本当は戦いたいのだろう？」
「その言葉、神官の言う言葉には聞こえんな……　すまない。武人としては戦って死にたい。と言うのが本音だが、私にはその自己満足の為に３０００人もの兵を犠牲にはできない」
　ハットの顔に笑みが浮かぶ。そんな貴女だから自分は従うことが出来るのだと。
「貴女はいい指揮官ですよ。でも僕は貴女には他人を犠牲にしてでも生き残って欲しい。他人を犠牲にしてでも生き残れなんて、それこそ神官にあるまじき言葉ですがね。僕も人間ですから好意を抱いた相手には幸せになってもらいたいですし、その横に僕がいたら完璧なのですけどね」
　その言葉を聞いた、ヴァネッサの顔が真っ赤になる。うつむいたヴァネッサは、小さな声で呟いた。
「ばか」

次回予告

フィロス砦の近くでグロウと別れ単身フィロス砦に向かうルノア。
グロウとの別れ際に、ルノアはホーリーシンボルを渡す。

次回　世界樹のシンボル

風が物語を貴方に運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ０６：凶報（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

ヴァネッサとハットのコンビいかがだったでしょうか？
実は脇役の２人なんですが、２話にわたりメインを張っちゃってます（笑
次回は、メインのルノア司祭に場面が戻ります。

今頃になってですが、ガイア教の神官位階は以下の通りです。

教皇（きょうこう）
司教（しきょう）
高司祭（こうしさい）
司祭（しさい）　ルノアは今ここです。
助祭（じょさい）
侍祭（じさい）　ＦＩＬＥ０１に登場したルナはここ。
修士（しゅうし）　ハット君はここ。外伝のフェンリアもここ。
見習い

フェンリアは実績から評価すると、司祭の地位にあってもおかしくはありませんが、本人が叙階（じょかい）を拒否しているため修士（しゅうし）のままです。
（叙階（じょかい）とは聖職者を任命する儀式のこと）

第1章　FILE07：世界樹のシンボル

「グロウ、ここでいいわ」
ルノアはフィロス砦の前まで護衛をしてくれた魔族の青年に言った。
「俺、ルノアの為に、働きたい。心配。連れて行ってくれ」
そんなグロウにルノアは穏やかな笑みを向ける。
「大丈夫よ、グロウ。このような話し合いの為に私達従軍神官がいるの。魔族である貴方が行ったら大変なことになるわ」
「ルノア、俺、邪魔か？」
しょんぼりと呟く青年に、ルノアはクスリと笑う。
「まさか、貴方には感謝している。私やガイア教がこんなに早く皆に受け入れられたのは、貴方のおかげよ。貴方のせいじゃなくて私達、人族が狭量なのよ」
「きょ、きょうりょう？」
グロウは考え込んでしまった。それを見つめるルノアの眼差しはとても優しい。
グロウはずっと戦士として生きてきたのだが、ルノアに助けられて以来、人が変わったと周りから言われている。
ガイア教の教えを守り、怪我人の世話をして過ごすようになった。彼のいた部隊からは貴重な戦力を腑抜けにしたと、わざわざ部隊長が抗議にきたくらいだ。
「難しい言葉を使ったわね。私たち人族は、自分と違う姿や、力を持った人を恐れるのよ。たとえそれが同族でも……　そして、それを排除しようとするの。私にも強い魔力があるから、ガイア教の神官にならなければ魔族として殺されていたかもしれないわね」
「ルノア……」
そう悲しげに語るルノアに心配そうな顔をするグロウ。
「貴方は優しいわね。グロウ、私が無事に砦に着いたことをレイバ

様に伝えて頂戴」
「ここで、待っている」
首を横に振るグロウ。
「そんなこと言わないで、お願い」
「わかった。行って、きてから、ここで、待っている」
ルノアは胸に下げた世界樹をデザインしたホーリーシンボルを外し、グロウの太い腕に巻きつける。
「いい、もし人族が近づいてきたらこれを見せて、従軍神官ルノア＝ティアの従者だというのよ。もし襲ってきたら真っ直ぐ逃げなさい。いいわね」
グロウの身体能力なら、先制攻撃を受けても逃げることなど簡単だろう。
「わかった。それじゃあ、レイバの所へ行ってくる」
走り出したグロウの姿が、どんどん小さくなっていく。
この分では、半時と待たずに戻ってくるだろう。
ルノアは緊張をほぐす為に、深呼吸を2、3回すると砦に向かい歩き出した。

次回予告

降伏勧告を携えてフィロス砦を訪れるルノア。

ヴァネッサは、降伏勧告を受け入れるのか？

次回　降伏勧告

風が物語を貴方に運ぶ。

第1章　FILE07：世界樹のシンボル（後書き）

今回も読んでくださり、ありがとうございます。

外伝2　隻腕（せきわん）の騎士が終了したにもかかわらず、ノロノロ更新の本編です。

ごめんなさい。仕事が終わると、ばたんきゅ～状態なので（汗

デスマーチ状態からいつ抜け出せるだろう……

さて今回は、それほど大きな動きも無く、このパートだけなら「つまらない」と言われそう（笑

でもグロウ君とルノアのシーンを書いておきたかったので短いながら（普段の3分の2程度）、入れさせていただきました。次々回辺りから新展開になる予定です。

第1章　ＦＩＬＥ０８：降伏勧告

ルノアが通された部屋には、十騎長以上の部隊指揮官たちがあつまっていた。一番奥の席に亜麻色の髪をショートカットにした女性が座っている。

「ルノア司祭、２ヶ月ぶりだな。あの時は同じ陣営にいたが、今は敵か」

「はい、ヴァネッサ様。捕虜となった者達と拘束されている間に、この国での任期が終了しましたのでそのまま残りました」

「そうか、残念なことだ」

ヴァネッサはルノアから書状を受け取り、目を通す。そして、降伏条件を読み上げる。

一．一般兵士は、武装解除の上、速やかに砦より撤退すること。

一．十騎長以上の者はルノア司祭による束縛の魔法を受けた上での解放か、捕虜になること。

一．砦は現状維持のまま引き渡すこと。破壊工作等が行われた場合、降伏勧告を無視したものと見なす。

「なお、この降伏勧告を拒否した場合。総攻撃を開始する。以上だ」

書状をハットに渡す。書状を読んだハットがルノアに問う。

「２番目の条件ですが、あの魔法は本来、罪人に罰を与える為の魔法ではないですか？」

「はい。しかし、無条件での解放は出来ません。レイバ様が出した条件は戦場の忌避（きひ）、解除するまで戦場には立てないでしょう」

会議室内が、ざわめきにつつまれる。

「ハット。束縛の魔法について説明してくれ」

「ヴァネッサ様。束縛の魔法とは、本来、罪人が再び罪を犯さぬようにする魔法です。たとえば、盗みを禁じられた者が盗みを犯そうとすると、立つことも出来ないほどの頭痛に襲われます。解除自体は、それ程難しくはありませんが決められた期間内の解除は難しいと思われます」
「何故だ」
「解除には各教団の許可が要ります。特に今回のように降伏条件に、なっていますと解除の許可は降りません。無断で解除すると犯罪人として教団から追われます」
ハットの説明を聞いて、ヴァネッサはルノアに視線を向ける。
「ルノア司祭、期間はどれほど考えている」
「はい、1年間です」
「長いな。しかし、捕虜になればいつ解放されるか、わからないか」
沈黙が会議室を包む。しばらくしてヴァネッサが発言する。
「ルノア司祭、条件はすべて飲む。私は捕虜となるが、解放を望む者にはそのように取計らってくれ。引渡しは明朝9時。では、皆そのように準備を頼む」
男たちが部屋を出て行く。ルノアはヴァネッサに話し掛ける。
「御決断、ありがとうございます」
頭を下げる。
「いや、礼を言わねばならないのは私だ。おかげで兵たちを家族の元に帰してやれる。司祭がいなければ全滅するまで戦っていただろう。ハット、お前はどうする？」
ヴァネッサが隣に立つハットを一瞥(いちべつ)して問う。
「貴女と一緒にいますよ。私たちは国ではなく、教団と自分が認めた者に仕えるのです。私は貴方の傍にいたい」
「好きにしろ」
ヴァネッサが、少しだけ頬を紅くして言った。
聖神暦124年6月23日。フィロス砦は無血開城した。

次回予告

フィロス砦の無血開城が実現した。

だがその時に事件は起こった。

次回　暗殺

風が物語を貴方に運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ０８：降伏勧告（後書き）

はじめて目を通していただいた方、ありがとうございます。
毎回読んでいただいている方、いつもありがとうございます。

戦記と銘打っておいて、戦闘シーンなしです（笑
タイトルに偽りありですが、まあそのうちにやります。たぶん2章あたりで（笑

構成ですが、1章が魔王というかルノア中心、2章が国王軍中心、3章で両軍の激突となる予定です。

第1章　ＦＩＬＥ０９：暗殺

最終的に、捕虜になることを選んだのは百騎長以上の者３６名の内１７名になった。魔法でその身を拘束されるのを嫌った者もいるが、そのほとんどが司令官を置いて帰ることはできないと自分の意思で残った。十騎長はその全てが残存部隊を統率するために解放されることが決まった。

そして、兵達が撤退した後の砦に魔王レイバ率いる魔王軍が半年ぶりの入城を果たした。

「レイバ様。只今、砦内部の調査を行っております。しばらくお待ちください」

レイバに軍師のパンドラが報告をしている。そして、レイバの周りには４人の黒騎士達が、いつものように控えている。

「ルノア司祭」

捕虜となった者達と共に、広場の隅に立っていたルノアを見つけレイバが歩み寄る。

「司祭のおかげで、無血開城できた。礼を言う」

「いえ、ヴァネッサ上級千騎長の御決断のおかげです。私は手助けをしたに過ぎません」

レイバは、真っ直ぐ自分を睨み付けている。亜麻色の髪の女性を見る。

「貴女がヴァネッサ殿か。ルノア殿がした約定はすべて守らせてもらう」

そんなことを、やっている横でハットがルノアに小声で話し掛ける。

「本当に、この方が金眼の魔王ですか。実は影武者としか……　どう見てもどこか貴族のボンボンにしか見えないのですが……」

ハットの言葉に、ルノアが笑みをこぼした。

「私も、初めはそのように感じました。それでいて、したたかな面

もありますから、あのルックスも罠のひとつです。甘く見ると……」
ハットと話をしていたルノアが、目の前にいたレイバを突然突き飛ばす。不意をつかれたレイバはしりもちをついた。
ルノアの突然の行動に、４人の黒騎士達は己の武器に手をかけ、パンドラ、ヴァネッサ、ハットにグロウ、そして、その場にいたすべての者達の視線がルノアに集まる。しかし、彼らが目撃した光景は、右胸から矢を生やしゆっくりと崩れ落ちるルノアの姿であった。
「ルノア司祭！」
すばやく立ち上がったレイバが、地面に倒れる前にルノアを抱きとめる。
「お怪我はありませんか。レイバ様」
ルノアが微笑む。
「バカなことを言うな。怪我をしているのは司祭だ」
ハットが駆け寄り、矢を引き抜くと同時に治療魔法で傷を塞ぐ。引き抜いた矢にはルノアの血液と緑色のドロリとした液体が付着している。
「毒矢！　レイバ殿、配下に浄化の魔法を使えるものはいますか」
「私の知る限り、いませんわ」
レイバではなく、パンドラが即答する。
「ヒューガー、ジェニス、暗殺者を早急に捕らえろ。手足の一本、もいでもかまわんが、生かして捕らえろ。そして、毒の種類をはかせろ」
怒気を堪えて指示を出すレイバに「御意」と言葉を残し、ヒューガーとジェニスと呼ばれた黒騎士が各々の部隊を率いて暗殺者の追跡にうつる。
「ヴァネッサ殿、そなた達もこのまま拘束させてもらう。それなりの待遇は約束するが、そなた達の中にこの件に関与している者がいた場合は覚悟してもらう。ディーヴァ、追撃部隊を編成しておけ、場合によっては殲滅戦もある」
矢継ぎ早に指示を出すレイバの手を、ルノアが握る。

「レイバ様、い、いけません。む、無駄に血を流すことはしないでください」
荒い息の下で必死に訴える。その思いを伝えようと、力いっぱいレイバの手を握る。
「お願いです。レイバ様」
「わかった。わかった約束する。だから、しゃべるな。毒の回りが速くなる」
微笑を浮かべて頷くルノア。だが少しずつ意識が遠のいていくのを感じる。
レイバとルノアの元に、パンドラとなにやら話していたハットが、深刻な顔をしてやって来た。
「ルノア司祭、聞こえますか？　やはり手持ちの薬では対応できない。薬師も毒の種類がわからなければお手上げだ。残された手段はルノア司祭に自分で浄化の魔法をかけてもらうしかない。魔導式の構築はできますか？」
頷くとルノアは魔法を発動させる魔導式を構築する。が、薄れていく意識では、構築するそばから崩れていく。それでもルノアは無理やり魔法を発動させた。
「ガイアよ。浄化の…奇跡を我に…」
しかし、ルノアの意識は急激に大きくなった闇に飲み込まれた。
どこか、遠くの方で自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

次回予告

意識を失ったルノアは過去の情景を見る。
その悪夢から覚めたルノアがいた場所は……

次回　夢現（ゆめうつつ）　前編

風が貴方に物語を運ぶ

第1章　ＦＩＬＥ０９：暗殺（後書き）

ここまで読んでいただいた方に感謝。

ルノア、どうなるのでしょうか。
まあ、死んでもらっちゃ困るのですが。
しかし、新しい魔法が出たと思ったら、また回復系魔法です。
そういえば登場人物も戦士系ばっかりですね。
設定上はレイバと黒騎士のヒューガー、ジェニスは通常イメージできる方の魔法戦士なんですけどね。黒騎士の残り2人は身体強化系の魔法を使う魔法戦士。
魔法使いと言うイメージに近い設定の登場人物は、軍師のパンドラぐらいのものでしょうか、外伝2のミレイちゃん（1章後半で登場予定）も魔法使いですけどこの娘はどちらかと言うと文官系ですし。
その辺は少し考えて見ましょう（笑

第1章　FILE10：夢現（ゆめうつつ）　前編

幼い女の子が泣いている。年のころ7、8歳くらいか。
「とうさま、かあさま」
女の子の前には血溜りの中に倒れている、一組の男女の姿があった。既に事切れているのだろう、ピクリとも動かない。
「おやおや、かわいそうになぁ。でも、すぐに会えるぜ。その前に、俺と遊んでもらうけどな。お嬢ちゃん」
少女を捕まえているヒゲ面の男が下卑た薄笑いを浮かべる。
「おいおい、やめておけ。今日、用があるのは食料と金だ。くだらん抵抗しやがって、返り血で汚れちまった。おい、お前ら、食料と金を集めて来い。抵抗するヤツは殺せ！」
「なぁ、アニキ。少しくらい、いいじゃねぇか」
「だめだ！　こいつらのおかげで時間を喰った。お楽しみは今度にしろ」
「ちぇっ、しょうがねぇか」
男の手が緩んだのを、少女は見逃さなかった。男の手から逃れ両親の亡骸（なきがら）にすがりつく。
「とうさま、かあさま」
「アニキ、やっぱり連れて行く。これほどの器量良し、ちょっといねぇ。黒い髪と瞳がそそるぜ」
「もう何も言わん。好きにしろ、変態（ロリコン）が……」
ヒゲ面の男が少女に手を伸ばす。泣いていた少女が振り向きざまその手を払った。男が手を抑えて悲鳴を上げる。
「手が、手が、イテェ」
いつの間にか少女の右手に、刃渡り30センチ程のナイフが握られている。両親の亡骸から拾ったのだろう。両手で構えアニキと呼ばれた男に向ける。
「ほう、いい目をする。後10年もしたらいい女になっただろうが

……」
男が動いた。少女の目では追いきれない。背中に灼熱感が走り気が付くと地面に倒れていた。手を動かそうとすると全身に激痛が走る。指一本動かすことが出来ない。
両親も死んだ。このまま死んだ方が幸せな気がした。少女の意識はそのまま闇に飲み込まれていった。
「とうさま……　かあさま……」

「ここは?」
ルノアは闇の中に立っていた。周りを見回すが一面の闇だ。
フィロス砦で矢を受けたのは覚えていた。その後、今までの人生でもっとも見たくない場面を見た。
走馬灯というものが、あれならばガイアに「意地悪」と言いたくなる。
「もう、10年も昔のことだというのに……」
当時の情景の細部まで、覚えていたことに驚いた。背中の古傷が熱くなった気がする。
すると、どこからか子供の泣き声が聞こえてきた。声のするほうに歩いていくと急に周りが明るくなり、森の中に立っていた。目の前に幼い少年が男にすがり付いて泣いていた。
「父ちゃん、父ちゃん」
少年の姿に10年前の自分の姿がダブる。
「どうしたのですか?」
少年に声をかける。
「神官様。父ちゃんが……　父ちゃんが……　助けて」
ルノアは少年に頷くと、男の傷を見る。明らかに剣で切られた傷だ、傷は深いが今、治療を施せば助かる。しかし、男の顔を見たルノアの動きが止まった。

忘れるはずもない。１０年前、両親を殺した男だ。ルノアの中で悪魔が囁(ささや)いた。
チャンスじゃないか。手を汚すことなく仇(あだ)を討(う)てる。放っておくだけでよい。
両親の死の情景を見たばかりのルノアには、その囁きがとても甘美なものに感じられた。

次回予告

親の敵(かたき)を目の前にしたルノア。

彼女は決断を迫られる。

次回　夢現(ゆめうつつ)　後編

風が貴方に物語を運ぶ。

第1章　FILE10：夢現（ゆめうつつ）　前編（後書き）

ちょっとだけ更新ペースを上げている今日この頃ですが、皆さんどうお過ごしでしょうか（笑

訳のわからない場面に放り込まれているルノアですが、あと3、4話ほど後にどういうことか明かされると思います。（説明しなくても予想がつくでしょうが……）

ルノアの過去については簡単に『外伝1　神官姉妹と王子様』で（すごく）簡単に書いたのですが、今回はもう少し具体的に書いてみました。

では、『夢現（ゆめうつつ）　後編』でお会いしましょう

第1章　FILE11：夢現（ゆめうつつ）　後編

ルノアは頭を振る。私は復讐を望んでいない。そう言い聞かせる。
確かに復讐を望んでいた頃もあったが、たくさんの人との出会いがルノアを変えた。だから、戦争で孤児となる子供たちを少しでも減らしたいと従軍神官になった。
深呼吸して気持ちを落ち着かせると、意識を集中し魔導式を構築する。
「慈悲深きガイアよ。傷つき倒れたこの者に、癒しの奇跡を」
しかし、何も起きない。あわててもう一度唱えるが何も起きない。
「魔法が使えない。何故？」
「神官様……」
少年がすがるような目で、ルノアを見つめる。
「応急処置を施して、近くの村に運びましょう。案内して」
少年が頷く。
ルノアは神官服のすそを裂くと、包帯の代わりに男の傷口にきつく巻きつける。
「少し我慢してください。村まで運びますから」
痛みを訴える男にそう言って、ルノアは男を肩に担いで歩き始めた。

2時間ほど山道を歩いただろうか。まだ村は見えてこない。ルノアもさすがに体力の限界にきていた。
「神官様、下ろしてくれ」
男が言う。ルノアは男を木の根元に下ろした。
「父ちゃん」
少年が男にすがりつく。

「神官様、１０年前にロスタの村で会っているよな？」
言葉を発しようとするルノアを男が手で制す。
「黒い髪に黒い瞳、この大陸じゃとても珍しい。それに、その目だ、強い意思のこもった目。本当にいい女になったな」
男が咳き込み、血の塊を吐く。
「しゃべらないで下さい。村に運んで医薬品さえあれば」
「無駄だよ。あと2時間はかかる。何故、助けた？　あのまま放っておけば、とっくにくたばっていた。あんたにはそうしていいだけの理由があるだろ？　俺があんたの両親を殺したんだ」
「それ以上言わないで下さい。本当に置いていきたくなります。でも、この子には親が必要でしょう？」
少年の頭を撫でながら言う。
「俺が死んだら、こいつを頼みたい。どこかの孤児院にでも入れてくれたらいい」
「嫌です。貴方は保護者の責任を放棄するつもりですか。ご自分で育てなさい」
ルノアは即答するが、口調こそしっかりしているが、男の声もだんだん小さくなっていく。顔色も土気色だ、これ以上は持たない。
「父ちゃん、嫌だよ、死なないで……　嫌だよ……」
父親にすがって泣く少年の姿が、また１０年前の自分の姿とダブった。ルノアは心の中でガイアに祈りをささげる。
ガイアよ。無力な私に力をお貸しください。お願いです、この親子を救う力をお貸しください。
精神を集中し、深く深呼吸する。そして癒しの魔法の魔導式を構築する。その魔導式はいつもの癒しの魔法と異なるものだった。
自分が構築しようとしたものと異なる魔道式が勝手に構築されていく。魔道式の形からすると召喚系の魔道式。そして、ルノアも初めて知る魔法の呪文（ルーン）（ワード）が自然と口から漏れる。
「慈悲深きガイアよ。我、依代（よりしろ）足（た）る者。その力の代行者。その死者すら甦らす力の代行者なり」

ルノアが淡い蒼の光に包まれる。ルノアが男に触れると、傷が塞がり顔色がよくなる。そして荒かった呼吸が穏やかになる。

「天使さま……」

少年にはルノアの背中に蒼く耀く12枚の翼が見えた。そしてルノアの姿は蒼い光とともに空に消えた。

次回予告

空に消えたルノア。

彼女が次に現れた場所は……

次回　ガイア神

風が物語を運ぶ。

第１章　ＦＩＬＥ１１：夢現（ゆめうつつ）　後編（後書き）

おはようございます。久しぶり（１１日ぶり）の休みなので、昨夜に続いて更新しました。
今日中にもう１話ぐらい更新したいですね。感想が無くても、アクセス数が少なくてもがんばりますよ（笑

今回の新魔法は召喚系の魔法です。次回、本文中で少しだけ説明します。

第1章　ＦＩＬＥ１２：ガイア神

気が付くとルノアは宮殿の中にいた。華美な装飾は無いが、落ち着いた感じのする宮殿だ。そして、とても広い。そう、端と端が見えないほどに。

「ガイア様の宮殿？」

聖典が伝えるガイア神殿に酷似した宮殿を眺めながら呟く。こうも広いと歩き回る気も失せた。

とりあえず、することもないのでガイア神に祈りを捧げる。

「ルノア様、ルノア＝ティア様」

祈りを捧げていると白い甲冑に身を包んだ女性が声を掛けてきた。右手にはやはり白い槍を持っている。

アイスブルーの瞳に、透き通るような金髪、同姓のルノアすら見入ってしまう美貌。聖典の通りなら、ガイア神を守る１２人の戦乙女の１人だろう。

「はい」

「我らが母、ガイア様がお会いになるそうです。こちらへ」

戦乙女の後について１０分ほど歩いた後、大きな扉の前に案内された。扉の両端には案内してくれた戦乙女と同じ顔をした戦乙女が立っている。ふと、見分け付くのかしら？　と関係の無いことを考えてみる。

部屋の中に入ると大きな机に書類を山積みにし、見た感じ２０歳くらいの女性がなにやらサインをしている。彼女が部屋の主、ガイア神らしい。

「おう、来たか。ちょっとそこに座って待っていてくれ」

「ガイア様！」

やたらフレンドリーな口調のガイア神に、傍にいた戦乙女がとがめるように言う。やはり案内をしてくれた戦乙女と同じ顔をしてい

る。
　ルノアはそばにあったソファにちょこんと座った。そして、執事の格好をした全長５０センチ程の二足歩行する羊が書類の束を運んでいくのを眺める。
「待たせたな。私がガイアだ。ああ、堅苦しい挨拶はいらない」
　立ち上がって頭を下げようとしたルノアを、ガイアが制した。
「ルノアと言ったな。実はそなたを現世に戻そうと考えている。そなたがどうやって、　信者を獲得したか分からぬが、そなたを助けてくれと昼夜問わず祈っている者達の声がうるさくて、正直かなわん」
「そうなのですか？」
　ルノアの額に汗が浮かぶ。
「そうなのだ。あの魔王レイバが、そなたが助かったら、入信してもよいとさ。それで、試練を与えたのだが、まさか、『神下ろし』をやるとは思わなかった。私の一部とはいえ、召喚してのけるとはびっくりだ。二度と使うな。生身でやったら魂すら消滅するぞ。他に質問は？」
「いいのですか？そんなことして」
「いいの、いいの。所詮、神の力との強さとは信者たちの信心に比例するわけだ。それに、そなたはまだ死すべき運命にない。今回はイレギュラーをいうやつだ」
　ガイアの後ろに控えていた、戦乙女が咳払いをした。
「時間が無いことぐらい分かっている。ちょっと、黙っていろ」
　戦乙女を邪険に追い払う。
「あいつら、同じ顔で同じことを言いやがる」
　ルノアはその様子を見たガイアのことは、心の中に封印することにした。実際、ルノアはガイアについて聖典に書かれていること以上の話を一生涯することは無かった。
「そうだ。帰る前にこれをやろう」
　と、蒼い宝石を投げてよこした。宝石の中にはガイアのシンボル

が薄く浮かび上がっている。
「これを下さるのですか」
「ああ、お守り代わりに持っていろ。効果は秘密だ」
「ありがとうございます」
「いいって、それじゃ、そろそろ行こうか」
ルノアが、淡い光の包まれて少しずつ消えていく。頭を下げるルノアに向かいガイアが、笑いながら言った。
「せっかく帰してやるのだ。しばらくは、こっちにくるなよ」

次回予告

ガイアと再開の後、現世に返されたルノア。

目覚めた彼女が見たものは。

次回　魔王と蒼の聖女

風が物語を貴方に運ぶ。

第1章　FILE12：ガイア神（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。
本日2度目の更新です。

やたら軽い本作の地母神ガイアですが、本来はギリシャ神話に出てくる始まりの女神（大地の女神）です。
あの浮気大魔王ゼウスの祖母になります。

複線のような、ガイアがルノアに渡した蒼い石ですが、忘れてもらってかまいません。『前奏曲』では使われないので（笑
使われるのは『前奏曲』の後の物語になります。

さてではまた次回。

第1章　FILE13：魔王と蒼い聖女

目を開くと見慣れない石作りの天井が見えた。
少しだけ考えて、ああ、そうかと納得する。暗殺者の矢を受けたことその後の事が鮮明に思い出せた。夢かとも思ったが右手の中にひんやりとした感触があり、見てみるとガイアがくれた蒼い宝石だった。
部屋の中を見るとベッドの隣のイスに、レイバが腕を組んだまま寝息をたてていた。他に人の気配はない。
レイバを起こさないようにゆっくりと上半身を起こすと、身につけているのは下着だけだった。慌てて毛布と一緒にかけられていたシーツを身体に巻きつけた。
そっとベッドから降り窓辺へと向かう。窓辺に向かいながら痛みはないかバランス感覚が狂っていないか、その他何箇所かチェックをいれる。
「うん、異常なし」
ふらつきもないし体調はいいようだ。
窓からは心地よい風が入ってくる。窓からは、砦の外まで良く見えた。まだ、朝早い時間なのだが、たくさんの人が動き回っている。
「ルノア」
レイバの声がした。
「ごめんなさい。起こしてしまいましたか」
レイバはルノアに近づくと力いっぱい抱きしめた。
「よかった。本当によかった。司祭は三日も意識が無かったのだ。心配したのだぞ。本当によかった」
ルノアは自分の顔が紅潮するのがわかった。こうやって、異性に力いっぱい抱きしめられたのは初めてだった。
「そんなに力を込められては、苦しいですわ」

レイバが力を緩めた。
「まだ、無理をしないで休め」
と、言うとルノアをひょいと抱き上げる。俗に言うお姫様だっこと言うヤツだ。ルノアの顔がますます赤くなる。
「皆にも知らせてやらねばな。グロウなどは昼夜問わずガイアに祈っている」
ルノアをそっとベッドに下ろす。
「レイバ様。暗殺者はどうなされまして？」
レイバが不機嫌そうな表情をする。
「地下牢だ。自殺防止の見張りをつけてある」
「ヴァネッサ様達は？」
「彼女たちは当初の予定通り西の塔に軟禁している。ハット神官に手伝ってもらっているが、彼には彼の思惑があろう」
「よかった。暗殺しようとした者を赦免してはもらえませんか？彼もまた自国のために動いたのです」
レイバがルノアの顔を覗き込む。顔には信じられないと言う表情を浮かんでいる。
「それは出来ない。彼はその場で斬られてもしかたなかったのだ。それに彼の方でも望むまい。彼の処罰は軍議にて定める。司祭の参加も許可しよう」
しかし、ルノアは引かなかった。
「レイバ様、お願いします」
レイバがルノアをベッドの上に押し倒す。レイバの金色の瞳がルノアの目の前にあった。
「ルノア。何故、貴女は他人のことばかり優先するのだ？　今ぐらいは自分のことを優先してもいいのではないか？　貴女は命の恩人だし……　正直に言おう、俺は貴女のことが好きだ、惚れている。貴女の願いは叶えてやりたいが、できる事とできない事がある。そんなことに貴女が気に病むことはない」
ルノアの両手がレイバの背中にまわった。

「ごめんなさい。でも私はそんな生き方しか出来ない女です。それでも、貴女は私のことを好きだと言ってくれますか？」
　レイバは何も言わずにルノアと唇を重ねた。と、ドアがノックされ、ハットが入ってきた。慌ててレイバがルノアから離れる。
「あ、ルノア殿、気づかれましたか。レイバ様も早く知らせてくれば代わりの人をよこしましたのに」
　そう言って、水差しをベッドの横に置く。
「うん、お二人とも顔が赤いようですが、なにか？」
　レイバとルノアは同時に「なんでもない」と否定する。
「それなら、いいのですけど」
　レイバは内心この男わざとじゃないかと、思ったりしたが、ハットはいたって真面目であった。

次回予告

意識を取り戻したルノアの元には見舞いのための人影があった。

その人影とは？

次回　見舞客　前編

風が貴方に物語を運ぶ

第1章　ＦＩＬＥ１３：魔王と蒼い聖女（後書き）

読んでくれている方がいるかわかりませんが、今回も読んでた抱きありがとうございます（笑

さてはて、ルノア生還です。でもってレイバさんがルノアに対して気持ちを吐露していたりもします。しかし、それ以上は進みません（笑

まあ、そのうちにその辺も進んでいくでしょう。

次回は前編後編に分けて、メインキャラをまとめてみようということです。

一応、年内で見舞い客の前編後編は更新する予定です。

では次回で。

第1章　FILE14：見舞客　前編

「ルノア、起きたのか」
血相を変えたグロウが、部屋に飛び込んできた。
「ええ、もう大丈夫よ」
微笑むルノア。
その姿を見てグロウが号泣する。
「俺、たくさん、ガイア様にお祈りした。よかった。よかった」
余りの騒がしさに、ハットが退室を命じるがグロウは頑として聞き入れない。
「やだ、ルノアの側にいる」
ハットとにらみ合う。今にでも取っ組み合いになりそうだ。
「グロウ。教会にいる。子供達の世話をお願いね」
教会にいる子供たちは、全員が戦災孤児だ。魔族の子供もいれば人族の子供もいる。手空きの者が交代で世話をしているが、グロウは子供受けがいい。
「わかった。俺に、任せろ」
そう言ってうれしそうに部屋を出て行く。尻尾があったら、思いっきり左右に振っていそうな勢いである。
「やれやれ、単純と言うか……」
「違いますよ。ハット殿。彼は純粋ですよ。教えたことも砂が水を吸うように覚えますし」
ため息をはくハットに、ルノアは微笑んで言った。

「失礼する」
そう言って部屋に入ってきたのは、いつもはレイバの側に控えている。黒騎士達だ。

黒騎士の筆頭でその容赦ない戦闘スタイルから『殲滅者（エクスターミネーター）』という異名を持つダストレス＝ヒューガーを先頭に、隻腕で自分の身長ほどの大剣「天羽々斬（あめのはばきり）」を振るう『隻腕の騎士』ジェニス＝ハス、その拳で完全武装の騎士でさえなぎ倒す『剛拳』のディーバ＝ショット、紅一点、2本の長剣を巧みに使い敵を斬り伏せる『二剣（にけん）』のフレイア＝セレス、皆が一騎当千の強者たちだ。

ルノアやハットが何事かと見守る中、一斉に左膝を床につく、携帯していた己の武器を目の前に置き頭を下げる。普通、騎士達が主君に忠誠を誓う時の礼のとり方だ。

騎士が仕えるべき主君以外にこのような礼を取ることは無い。慌てたのはルノアのほうだった。

「か、顔を上げてください」

「ルノア殿、貴女に敬意をあらわしたい。レイバ様を良く守ってくれた。本来は我々が盾にならねばならなかったのだが、遅れをとった」

そう言って更に頭を下げる。

ルノアが慌てて手をパタパタと手を振り、何度も頭を上げるよう頼むが、彼らが礼を崩そうとしない。

「おい、ルノア司祭が困っているぞ」

部屋の入り口に、いつの間にか笑みを浮かべたレイバが立っていた。どうやら最初から事の次第を見ていたらしい。

「ジェニス、主だった者を会議室に集めてくれ。軍議を開く。司祭、迷惑をかけたが、こいつらの偽りない気持ちだ、わかってやってくれ」

ルノアはレイバに頷き、黒騎士たちに礼を言った。

ヒューガーたちを連れて部屋を出て行くレイバの背中を見送り、ルノアは「はぁ」とため息をつく。

「魔族の人達って、性格が直線の人が多いのですね」

部屋の隅で一部始終を見ていたハットが、ぽつりと呟いた。

次回予告

ルノアの元を訪れる軍師パンドラと囚われの身のヴァネッサ。

そしてもう1人、ルノアにとってはうれしい再会。

次回　見舞客　後編

風が貴方に物語を運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ１４：見舞客　前編（後書き）

今回も読んでいただいた方に感謝。
聖魔戦記第１章も残るは数話。どうにか年内には終了して年明けから２章の勇者側の話に突入できそうな予感です。
と言いつつ明日明後日は、更新どころかここをのぞく暇も無いのですが（汗

ちょこっと補足

グロウ
魔王軍の戦士。ルノアに助けられたのを機にガイア教へ入信。
ルノア役に立ちたいという想いから、ルノアの後をついてまわっている。体中に獣のような体毛と鋭い爪を持つ。魔法は使えない。
ルノアさんの下僕と化してます。純粋な戦闘力なら結構強いのに（笑
そういや、グロウのふたつ名を考えて無かったです。
今の状態からすると『犬』ですかねぇ（笑

ダストレス＝ヒューガー
黒騎士筆頭、外見年齢３２歳ほど、灰色の短髪でブルーの瞳、がっしりとした体格をしている。漆黒の鎧に刀身まで黒い剣を持つ、身長は、１９０ｃｍ弱。魔王に忠実に使え、右腕として信頼されている。その戦いぶりから「殲滅者（エクスターミネーター）」の異名をとる。

ジェニス＝ハス
魔王を守る、黒騎士の一人。
炎のような灼眼に紅い髪を持つ人族と魔族のハーフ。
左腕を失っているが、強靭な腕力で２メートル近い大剣『天羽々斬（あめのはばきり）』を振るう。

詳しくは『外伝２　隻腕の騎士』参照。

ディーヴァ＝ショット
魔王に仕える黒騎士の一人。獅子のような頭をもつ純潔の魔族。武器を嫌い、その肉体のみで戦う。その握力は鉄をも握りつぶす。

フレイア＝セレイ
黒騎士の紅一点。
２本の長剣を自在に使いこなすことから、二剣のフレイアとの異名をとる。
紅い髪と瞳を持ち、兵士たちに隠れファンが多い。
現在の悩みは胸が小さいこと。
ヒューガー様ラヴ（笑

黒騎士と、ひとくくりにされていた人たちです（笑
１章では大規模な戦闘シーン無かったで活躍の場が無かったのですが、３章では活躍の予定（笑

第１章　ＦＩＬＥ１５：見舞客　後編

「お邪魔してよろしいかしら」
食欲のないルノアが昼食として出された野菜スープと格闘していると、パンドラが入ってきた。ペットの子犬が後ろをチョロチョロついて歩いている。更にその後から、金髪の少年がティーポットの乗ったワゴンを押して部屋にはいってくる。
はじめて見る顔だ。整った顔立ちに青と黒のオッドアイ、そしてきらきら光る金髪に、そして頭に黒い猫耳が……　よく見ると黒い尻尾もしっかり付いている。
このような魔族は、特殊な能力を持つ者が少ないということもあり、好事家の貴族たちに高く売れる為、奴隷商人達に狙われることが多い。少女なら普通の奴隷の２０倍以上の値で取引されるという。
「この子可愛いでしょう？　上げませんわよ」
少年を見るルノアにそんなことをのたまうパンドラ。
「いえ、そうではなくて……」
「身寄りがないというので、私的に雇いましたの」
「そうですか」
もしかして、この子を見せにきたとか？　ルノアはそんなことを考えた。
「ルノアさんとは、お茶の約束がありましたわね」
「あ、はい」
ルノアの意外そうな顔を見たパンドラは、くすりと笑った。
「あの場での冗談だと思いまして？　私は冗談など言いませんわよ」
そして、入り口に向かい声を掛ける。
「ヴァネッサさん、いいかげん入ってきたらどうですか」
すると、やたら緊張したようなヴァネッサがゆっくりと入ってきた。そしてベッドのそばまでくると思いっきり頭を下げた。
「ルノア殿。申し訳ない。私のミスだ。部下を掌握できなかったせ

いで貴女に怪我を負わせてしまった」
「か、顔を上げてください。ヴァネッサ様」
あわてるルノア。先ほどの黒騎士たちといい、真面目な人たちが多すぎる。
「そうですわ、ヴァネッサさん。みんなルノアさんの自業自得です」
猫耳の少年が用意した、ジンジャークッキーを齧りながらパンドラが言う。
「ルノアさん。感情で行動するのはやめくださいませんか。あの時も貴女がレイバ様の盾となる必要はなかったはずです。レイバ様は完全武装していましたから、致命傷には至らなかったはずですし、毒についても貴女が無事ならどうとでもなったでしょう？」
少し怒ったような表情でパンドラがルノアに言う。
「あの時は、考えるより身体が動いてしまいました」
パンドラの言うとおりだ、鎧を装着していなかったルノアが盾にならずとも、レイバが深手を負うことは無かっただろう。
「過ぎてしまったことはいいでしょう。でも貴女は自分の影響力というものを考えた方がよろしくてよ。もし貴女が死んでいたら、ヴァネッサさん達は処刑され解放した兵士達にも追撃部隊が送られたでしょう。気を失う前に貴女が止めなければ、レイバ様は言葉の通り実行していたはずです。あとグロウや信者の人達も暴発していたかもしれないわね」
反論のしようがない。持祭のルナからも似たようなことを何度も言われた覚えがある。
「貴女の言う通りね。忠告は心に留めておきます」
「そうね。これ以上お茶が不味くなる話を続ける事もないでしょう。ヴァネッサさんもどうぞ」
パンドラが人形のような愛らしい顔で微笑む。先ほどとは別人のようだ。
そのお茶はパンドラの「とてもよい、葉が手に入りましたのよ」と言う言葉の通りとてもおいしかった。

「ルノア様！」
暇をもてあましたルノアが聖典を読んでいると、ガイア教の蒼い修道服を着た女性が入ってきた。年の頃２５、６で金色の髪をポニーテールにしている。
「ルナ、どうして？」
ルノアの呟きにルナが答える。
「もちろん、志願してきたのですよ。志願がする者が多すぎて選考が大変だったのですよ」
後で知ったことだが、ルノアが教団に従軍神官の任地変更届を提出した直後から派遣志願者が殺到したそうだ。教団本部としてはルノアの従軍神官の任を解き、本部での仕事に従事させたいと考えていたらしいが結局はルノアの希望を優先した。
ルナがルノアの手を握り涙を流す。
「別れた時はもう合えないのかと思っていました。よく、よくご無事で……」
ルノアがそんなルナを見て微笑を浮かべた。
「ルナ。貴女も物好きね。また苦労をかけるわよ。私は我儘だから」
「ええ、覚悟は出来ています。でも今回は私も言いたいことは言わせて貰います。この前のように１人で戦場に残るマネはさせませんからね」
２人は手を取り合ったまま笑った。

次回予告

レイバはルノアに現状の魔王軍の詳細を告げる。

それはこれからの方針を決めるためであった。

次回　その夜のこと

風が貴方に物語を運ぶ

第1章　ＦＩＬＥ１５：見舞客　後編（後書き）

今回はパンドラ、ヴァネッサ、ルナの３人。はからずも３人とも女性です。

パンドラ＝フィス
魔王軍の軍師。
フワフワの金髪、白磁のような肌、天使の笑みと鈴の音のような声を持つ人形のような少女。しかし、悪魔のような献策をすることもしばしば。
好きなものは蜂蜜茶に賛美歌、ペットの子犬。魔法の腕は一流だが、切り札の為めったに使うことは無い。

ヴァネッサ＝クロウリー
小さい頃から剣術を学び、１９歳にして上級千騎長の地位にある。
茶色のショートカットに、黒い瞳の美しい女性。
男らしい面も多々あるが、女性らしい気遣いもできる可愛い人（笑
ハットのことが好きだが、素直になれない。

ルナ＝ハーフムーン
ガイア教の侍際。金髪をポニーテールにしている。瞳はダークグリーン。
ルノアに心酔している。ルノアのレイバに対する気持ちを短時間で見抜き、成就して欲しいと思っている。

とまあ設定集からの抜粋ですけどこんな感じです。
実際にはもっと詳しい設定をしてますよ。全部載せると大変のことになるのでこの程度ですけど。

年内はあと何回こうしんできるかなぁ。

第1章　FILE16：その夜のこと

「今日は客が多かったようだな」
書類の束をルノアに手渡しながら、レイバが訊ねた。
「ええ、とっても」
手渡された書類には、現在の魔王軍の詳細が書かれている。構成人員だけでなく物資の備蓄までこれ以上ないぐらいに細かく。
「よろしいのですか？　従軍神官といえ、他組織の人間にここまで詳しい情報を与えてしまって」
「司祭のことは信頼している。3日後の軍議でこれからの方針を決める」
「これからの方針ですか？」
「仕掛けられた戦だからな。失地回復という当初の目的は達した。すぐにでも和平交渉を行うか。交渉を有利に導く為にいくつかの都市を落とすか。相手が白旗揚げるまで戦い続けるか。ほかに選択肢はあるのか。司祭は和平交渉を押すのだろうが、我が軍師殿は2番目か3番目を押すだろう」
「よく分かってらっしゃるのですね」
レイバの言葉を聞いたルノアが、くすくすと笑う。
「笑い事ではない。実際問題として、リューム国王が捕虜返還の条件で和平交渉に応じるとは思えん。彼等の方が仕掛けてきた戦だしな」
「ええ、でも和平交渉の申し出くらいはなさってもよろしいのではありませんか？　長く続く平和ではないかもしれませんが、民にとっては貴重な時間になると思います」
そこにルナが戻ってきた。
「せっかく2人きりにして上げましたのに、もう少し艶っぽい話は出来ないのですか？」
ルナがあきれたように言い、ルノアにカップを渡す。

「私の家に伝わる薬湯です。少し苦いかもしれないですが全部飲んでください。レイバ様もどうぞ」
ついと、カップを差し出され思わず受け取ったレイバ。
カップの中ではダークグリーンの液体が湯気を立てている。食欲をそそる色ではない。匂いもなんと表現してよいかわからないほど複雑だ。
「全部、飲まないとだめ」
「全部、飲まないとだめか」
思わず、声がハモる。
「ええ、時間かけてもいいですから、全部飲んでください」
ルナは自分のカップを取るとおいしそうに飲む。
ルノアとレイバは少しだけ目を合わせて同時に口に含む。次の瞬間2人は慌てて手で口を塞ぐ。どうにか飲み込むとレイバが水差しに手を伸ばす。レイバはグラスに水を注ぎルノアに手渡すと、自分は水差しから直接、水を飲む。
「ルナ。少しどころじゃない。すごく苦い」
「お二人の分は、薄くしたのですけど……　まあ、良薬は口に苦しともいいますから全部飲んでくださいね」
ルナはけろっとした顔で言った。

次回予告

ルノアとパンドラ、ぶつかる意見。

そこに飛び込んできた報告にレイバは。

次回　軍議

風が貴方に物語を運ぶ

第1章　FILE16：その夜のこと（後書き）

ええっとまだ紹介してない人たちがいたので、ここで補足。しかも肝心の人が（汗

ルノア＝ティア
この大陸では非常に珍しい黒瞳黒髪（どちらか一方がと言うのは割合多い）。背中には幼い頃につけられた刀傷がある。
天地創造の神ガイア神を祭るガイア教団の司祭。神官としてだけでなく、戦士としての実力もある神官戦士。
従軍神官の職務の傍ら負傷者達の治療にあたる。兵たちからは『蒼い聖女』と呼ばれた。
魔王レイバと出会い魔族側の従軍神官になる。

レイバ＝レスト
魔族を率いる魔王。別名、金眼の魔王。
魔剣、ソウルイーターを持つ。魔法にも長けているがその資質は剣のほうにあった。
金眼、銀髪で中肉中背。貴族の坊ちゃまのような優男で一目見て魔王と判る者はいなかった。

ハット＝レプスリー
銀髪、蒼眼、ひょろっとした男。
ガイア教リューム国従軍神官。戦いは好まないがその剣技は、その辺の傭兵ぐらいなら簡単に打ち倒すほどの腕の持ち主
好きな者は辛いものとヴァネッサ（笑

次回、外伝2で登場したあの人が出てきます。ずいぶん久しぶりな気もするなぁ。

第1章　FILE17：軍議

軍議は大方の予想通り2つに割れた。
軍師パンドラの、和平交渉を行うにしてもフィロス砦の周囲にある都市や砦は落とすべき。と言う主張には軍部が支持し、従軍神官ルノアの早急に戦乱を収め、人材、物資の消耗を押さえ軍事力の回復と富国に力を注ぐべき。と言う主張は文官達が支持をした。
「今述べたようにこれらの小都市はリューム王国軍がフィロス砦の攻略を計画する際に、橋頭堡として利用される恐れがあります。現段階で各都市の守備兵は千を超えていません。現兵力の3分の1、1万もお貸しいただければ戦果をあげて見せます」
ルノアが静かに挙手する。それを見たパンドラがルノアを指名する。
「ルノアさん、何かありまして？」
「落とした都市はどうするつもりですか？　近隣にある都市、砦は5つ。それを維持するために兵力を分けるとなると各個撃破されるのがオチです。いずれ取り返されるものなら、ここで兵力分散の愚を犯すべきではないのではないですか？」
ルノアの言葉を聞いて、パンドラの瞳がスーと細くなる。
「そうね。敵兵ごと焼き払うのが一番いいのだけど、貴女は反対するのでしょう？」
「当たり前です。貴女は、まだそのようなことを」
「何か勘違いをなさってません？　貴女の仕事は命を救うことかもしれませんが、私の仕事は兵士を効率よく殺すことですのよ。味方が1人死ねば、敵を2人。味方が千人死ねば、敵を2千人殺すように策を立てるのが、私の仕事……　貴女は否定するでしょうけど、戦は外交手段の1つに過ぎないわ。善も悪もない。戦闘で失われる命も、最初から折込済みですわ」

２人が睨み合う。周りの武官、文官もその迫力に圧倒され、沈黙を守っている。
「貴女は文官達をまとめる立場にあるのでしょう？　彼らの進言にも耳を傾けたらどうですか？」
「聞いているわよ。その上で、今、落とすべきだと判断したのですわ。知っての通り、わが軍は、これ以上の戦力の増強が難しいのに対し、リューム国軍には可能です。ならば、敵兵力は削れる時に削るべきよ」
「彼らは、今の段階で敵に攻勢に出られたら、支えきれないと言っているのです。古来、飢えて勝利を収めた軍はありません。和平交渉がまとまらなくても、短かいながらも、時間を稼ぐことができます」
２人の舌戦が途切れたタイミングを見て、若い女性文官が挙手して立ち上がる。大きなまるいとんぼめがねが幼い顔をさらに幼く見せているが、その胸の盛り上がりが奇妙なバランスで魅力となっている。ルノアが彼女がよく黒騎士の１人、ジェニスと一緒にいることが多いのを思い出した。
「ミレイ＝アレスです。ルノア従軍神官の発言について、補足させてもらいたいのですがよろしいでしょうか？」
レイバが黙って頷く。
「物資についてですが、我が軍だけで消費するのであれば３ヶ月ゆうに持ちます。しかし、今までの方針通り非戦闘員等の保護を続けるのであれば、これから落とす都市の規模を考えれば、２ヶ月持たないたかと思われます」
レイバがミレイに問い掛ける。
「ミレイと言ったな。では、充分な物資の補給にどれほどかかる？」
「２ヶ月……　人員をさいてもらえれば１ヶ月」
「わかった。他に意見のある者は？」
その時、荒々しく扉が開かれ兵士が飛び込んできた。
「アリア砦に、敵軍接近中！　至急、来援を請う！」

レイバがパンドラに向き直る。
「アリア砦に居るのは誰だ？」
「バロス殿の配下の２千と、ガウロ殿の配下４千が駐留しています」
「彼らは篭城策をとると思うか？」
レイバの問いにパンドラは首を横に振って答えた。
「バロス殿だけならば……」
レイバはため息をついた。
「俺のミスだな。フレイア。７千の兵を預ける、救援に向かえ。但し、到着前に砦が落ちた場合は敗残兵をまとめて戻れ。その他の判断は任せる」
「御意。兵七千を率いアリア砦に向かいます」
フレイアが颯爽と会議室から出て行く。
「ミレイ＝アレス。補給に関する全権限を与える。必要なスタッフをパンドラに申請しろ。パンドラ、人事に関しては優先してやれ」
「わ、わ、私ですか？」
ミレイが目を白黒させる。
「そうだ。不満か？」
「わ、私は、まだ若輩の身で……」
「ない経験は、周りの者に補ってもらえ。人を使うことも必要だ。パンドラ、ルノア、そして他の者も、頼まれた時は協力してやってくれ」
「他の事はアリア砦の件が片付いてからにする。いいな？」
レイバが会議室を見回し、最後にパンドラとルノアを見る。
『御意』
二人の声が重なった。

次回予告

会議終了後レイバはパンドラを呼び出す。

その話の内容とは？

次回　レイバの決断

風が貴方に物語を運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ１７：軍議（後書き）

美玲ちゃんの登場です。と言っても1章での出番はこれだけですが（笑

ミレイ＝アレス
魔王軍の文官。金髪に深緑色の瞳、童顔に大きなトンボめがねがチャームポイント。
童顔にめがねっ娘、小柄な体躯に巨乳な人。
隻腕の騎士ジェニスとは恋仲。
女性キャラ結構いますが、設定で巨乳と書かれているのはこの娘だけだったりします（笑

実は第1章は次回で終了です。で、次回の更新が終われば2章に突入です。
年内に2章の更新に行けるかな？

第1章　FILE18：レイバの決断

誰も居なくなった会議室で、レイバが難しい顔をして座っている。その背後には、黒騎士ジェニスが影のように控えていた。
「ジェニス。何故、アリア砦なのだろうな？」
質問の意図を、掴みかねてジェニスが怪訝そうな顔をするが、レイバはかまわずに続ける。
「あの砦は戦略的にたいした価値は無い。四方を山に囲まれ、守るにはともかく打って出るには不向きだ。ガウロの隊が駐留していたのだって訓練の為だ。相手の意図がわからない」
レイバの意図を理解したジェニスが答える。
「アリア砦の近くには金鉱脈があったはずですそれが目的では？そもそもこの戦の発端自体がガリアの金鉱を譲り渡せ。というものですから」
「弱いな。あの金鉱脈は産出量も少ないし、質もそれ程良いわけでもない。だから、捨て置いたのだが」
そのとき、会議室の扉が開き、パンドラが入ってきた。子犬と猫耳の少年がパンドラの後ろについている。
「お呼びでしょうか。レイバ様」
「大事な話なのだがな」
レイバが、猫耳の少年に視線を向けた。
「この者のことは、お気になさらぬようお願いします」
「アリア砦進軍中の部隊に密偵を送り込んで欲しい。敵の意図を知りたい。王国側としてもアリア砦よりフィロス砦のほうが戦略的には重要拠点のはずだ。だがフィロス砦への増援の数を減らしてまでアリア砦を攻略している」
「行意。早速手配いたします」
会議室から退室するパンドラを呼び止める。

「パンドラ。今回の救援、恐らくは間に合わない」
「私もそう思います」
パンドラの返答にレイバが頷いた
「補給物資と補給ライン確立の時間稼ぎの為に和平交渉を行なう。だが、敵の動きを考えると成立はしないだろう。そこでだ、交渉決裂と同時にフィロス砦周辺、５つの拠点を同時攻略する。その準備をしておいてくれ」
「このことは、従軍神官には？」
「まだ話していない。この作戦は奇襲になる魔術師たちをうまく使え。短時間で落とさねばならん」
「では、指揮官の人選はこちらで行います。それでは失礼します」
パンドラが退室した後、再び沈黙が訪れる。
「さて、ルノア司祭の所に行くぞ、ジェニス」
「必要なら呼びに行かせますが」
「いや、必要ない。こんな所に居ると気が滅入ってしまう。しかし、また仕事の話になるな。ルナ侍祭の呆れ顔が目に浮かぶ」
ジェニスが笑みを浮かべる。
「でもそれは、レイバ様を司祭の相手として認めているからではありませんか？」
「だと言いがな」
会話を交わしながら2人は会議室から出て行った。

1章　完

次章予告

昨日まで下級騎士だった青年は、初陣で英雄と呼ばれるようになる。

青年の元に集う人々。

そして、魔族の少女との邂逅。

それは、どのような未来を生むのか。

聖魔戦記前奏曲。第2章、『勇者と魔族の少女』

風が新たな物語を運ぶ。

第1章　ＦＩＬＥ１８：レイバの決断（後書き）

今年最後の更新でした。読んでいただきありがとうございました。

年明けから第2章に突入です。

まずはアリア砦の攻防戦で、勇者と呼ばれるようになる青年のお話から。

第２章　ＦＩＬＥ０１：先陣（前書き）

今年もよろしくお願いします。
聖魔戦記、第２章突入です。

第2章　FILE01：先陣

「でや！」
裂帛の気合と共に漆黒の板金鎧に身を包んだ大男が地に臥す。残っているのは、白銀の板金鎧を着て大きく肩で息をしている細身の青年が一人。
部屋の中には四つばかり死体が転がっている。状況から見て青年が倒したのだろう。
青年はゆっくりと部屋の中を見回し、他に人影がないのを確認してから壁を背にしてズッズズと座り込むと大きなため息をつく。その剣を握る手はブルブルと小刻みに震えていた。
どうしてこんな事になったのか。昨日までは叙勲されたばかりの下級騎士だったのに、それが勇者だの英雄だのと呼ばれ、少ないながらも部下もいる。
それもこれも、昨日乗っていた馬のせいだ。あの時、暴走しなければ……
青年は、もう一度ため息をついた。

「誰か、先陣をきる者はおらぬか？」
千騎長であるグエン卿が声を張り上げるが、皆無視している。
親が大臣というだけで千騎長になった者の言うことを、素直に聞く者はいない。自分で先陣をきるだけの勇気があれば、話はかわるのだろうが。
「あのボンクラ千騎長の部隊なら、最前線はないと思っていたのだがどうしたものかな」
十騎長のシャリアールが部下たちに言う。

部下の全員が初陣（ういじん）の下級騎士達だ。何人、生きて帰れることか。
その部下たちは全員青い顔をしいて、引きつった笑みを浮かべる。
「なんだ、緊張しているのか？　なに、戦が始まったら俺の後ろをついてこい。大丈夫だ」
自分でも、半分しか信じていない言葉を部下に言う。上官のつらい所だ
前方ではグエン卿の演説が続いている。他の部隊では、先陣争いは苛烈を極めるのに、我が部隊は臆病者（おくびょうもの）だけしかおらんのかだの、先陣をきるのは武人（ぶじん）の誉（ほま）れだ、とか言っているが聞いている者の大半はだったらお前が真っ先に突撃しろと思っていた。
グエン卿が苦虫を噛み潰したような表情でさらに声を張り上げようとしたその時、馬のいななきと共に敵陣に向かって飛び出していく一騎の騎馬。それを見た数騎が彼の後に続いた。
そしてグエン卿の顔にも喜色が浮かぶ。
「あの者に続け！　全軍突撃！」
そのグエン卿の命令に騎馬隊全体が突撃を開始する。
「くそ！　お前ら、ちゃんとついて来い」
シャリアールが部下達に声をかける。最初に飛び出していった騎士は、自分の部下達と同じ叙勲されたばかりの下級騎士だ。
「気にいらねぇ。一騎駆けとはな。それだけの実力があるのか、ただのボンクラか見極めてやる」
シャリアールは険しい顔のまま槍を構えなおした。

次回予告

自分の意思とは無関係なところで先陣を切ることになった青年。
青年は他人事のように自分の不運を嘆いていた。

次回　暴走

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０１：先陣（後書き）

主人公はまだ名前の出ていない青年の方です（笑
シャリアールもメインキャラですが。
今年１回目の更新も無事終了しました。
次回の更新までたぶん２，３日は空くと思います。ちょっとお疲れモードなので（笑

第2章　FILE02：暴走

それは唐突に起こった。騎乗していた馬が、いなないたかと思うと、敵陣に向かって走り出した。必死に馬を止めようとするが止まらない。それどころか、どんどんスピードをあげて敵陣に向かっていく。

馬上の若い騎士は、ため息をひとつ吐き馬上槍（ばじょうやり）を正面に構えた。ふと、俺はここで死ぬのだろうか。という考えが浮かぶ。貴族とは名ばかりの貧乏な家に生まれ、両親を無くし、食う為に騎士見習になったのが4年前。

やっと、騎士に叙勲（じょくん）されて10日足らずで初陣。しかも、その初陣で馬が暴走して、先陣をきることになった。不運続きの人生だ、生きて帰ることが出来たらそれこそ奇跡だろう。

そんなことを考えているうちに、敵陣に突入していた。不運な兵士達が槍で衝かれ、馬で踏み潰される。夢中で槍を突き出し近くにいる兵士を倒していく。

騎士達が敵陣にあけた穴に、歩兵達が突撃して傷口を広げていく。いつの間にか混戦状態で敵味方入り乱れている。

6人ほど倒した時、再び馬が暴走した。その弾みで槍が手から離れる。馬から振り落とされないようにしがみ付きながら、馬に括り付けてあった長騎剣（ちょうきけん）と呼ばれる、刃渡りが2メートルほどもある大剣を引き抜く。

怖くても、訓練通りに身体は動くものだな。と他人事のように考える。

その間も、馬は兵士達を蹴散らしていた。運悪く逃げ送れた者は踏みつけられ、蹴り飛ばされ、さらに運の悪い者は長騎剣により首をはねられた。

敵の前衛部隊を突破する。

周りを見回すと味方が5騎ついてきている。古株のベテラン騎士達だ。鎧についた古傷と、汚れがそれを物語っている。
6騎が一塊になって、一気に敵の本陣に向け突撃する。
途中で2騎が弓矢により落とされたが、かまわずに敵の本陣に突入する。
騎士達が、次々と敵兵士達を切り伏せていく。青年、真新しい鎧に身を包んだ若い騎士、アイオリアは一際立派な鎧を着た騎士に向かって剣を構えると馬ごと突撃した。

「まさか、敵の大将を討ち取るとは……」
あの後のことは、良く覚えていない。
敵軍が敗走した後、総大将のデフロット将軍から、十騎長(じゅうきちょう)に任じられ、更に白銀に輝く鎧まで賜った。それから、全軍の前で若き英雄だの勇者だのと紹介された。はずだ……
今、思い出しても赤面ものだ。
自分は何もしていない。馬が暴走して、落馬しないように敵の攻撃をうけないようにしていただけなのだが、勇者だの英雄だのと呼ばれている……　人生何が起こるかわからないものだ。
しばらく休んでいると、腕の震えも止まった。部屋の外から聞こえてくる剣戟(けんげき)の音も、落ち着いてきたようだ。
砦に突入した時にはぐれてしまった部下達と合流しないと。ふと、そう思い剣を杖代わりにして立ち上がる。
「アイオリア十騎長」
名前を呼ばれ、部屋の入り口を見ると、革鎧を来た１０代前半の少年が立っている。今朝自分の部下になった少年だ。今回の戦いのために徴兵されたと言っていた少年で、名前はリュエルと言う名前だったはずである。
「他の者はどうした？」

本当ならば自分で統率すべきなのだが、気が付いたら1人だったのだ、いまさらながら部下達のことが気になった。
「は、はい。みんな無事です。十騎長もご無事でよかったです。砦はほとんど制圧しましたが、指揮官のバロスが見つかっていません」
「そうか。よし、みんなと合流しよう」
そう言ってアイオリアは部屋の入り口に向かう。
「十騎長！待ってください」
敵兵の死体を見た、リュエルが慌てた声で呼び止める。
アイオリアが、振り返るとリュエルが興奮で震えた声で言った。
「アイオリア十騎長が倒されたのですか？」
「ああ、それがどうかしたのか？」
リュエルは敵兵の1人を指差して答える。
「バロスです」
「へっ？」
アイオリアは間の抜けた声を漏らした。

次回予告

武勲を挙げたアイオリアは1人杯をかたむける。

そこにベテラン騎士が訪れて。

次回　酒盛り

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０２：暴走（後書き）

運だけで出世する主人公です（笑
ちゃんと剣で敵将を討っているあたり、それなりの実力はありますけど、その実力が表に出るのはいつになるだろう（笑

第2章　ＦＩＬＥ０３：酒盛り

アリア砦攻略は成功に終わった。
敵を深追いした部隊が敵の援軍に殲滅されたという被害はでたが、当初の目的は達成された。
「アイオリア十騎長殿に乾杯！」
「勇者アイオリアに乾杯！」
大きな焚き火を囲み、酒を振舞われた兵士達が騒いでいる。
アイオリアが「褒美は何がよい」と言う問いに、「酒を下さい」と答えたことから、全軍に普段飲めないような上等な酒が振舞われた。アイオリアとしては飲まなきゃやっていられない心境だったのである。
そして、アイオリアの部隊には特別に王族や将軍達しか飲めないような上等なワインが一樽下賜された。
アイオリアは皆から離れた所で、チビリチビリと杯を重ねている。その横には酒瓶を持ったリュエルが尊敬の眼差しでアイオリアを見ていた。
「なに、暗い顔しているんだ？」
声と同時に背中を思いっきり叩かれ、口に含んだ酒を噴き出した。
「シャリアール殿、一体何を？」
「うまい酒をだな。そんな顔して飲むな」
シャリアールは持ってきた酒瓶を置き、アイオリアの隣に座る。
「昨日、見たときは目立ちたがりやの、大馬鹿野郎だと思ったのだが少し違うようだな。見たぜ、敵を深追いしようとした部下を止めている姿をな。深追いしていたら、今頃全滅だ」
シャリアールの言葉にアイオリアは首を横に振る。
「とんでもない。偶然が重なっただけですよ。昨日だって馬にしがみ付いていただけですし、今日も、気がついたら……　て、やつで

す」
　実際に深追いを止めたのは、敵の援軍が来ることを予期していたからというわけではない。勝敗がすでに付いていたため、これ以上の流血沙汰を嫌っただけだ。
「それでもたいしたものさ。何もしなくても勝てる。そこまでの強運なら、てめーに命を預けてもいいぜ」
　アイオリアは慌てて言い返す。
「そんな、たいしたものじゃありませんよ」
「そうか？　でも、お前さんが部下を止めなかったら、他にも深追いした部隊も出ていたはずだぜ。まあ、今日はそんな話は止めだ。せっかくの酒が不味くなる」
　シャリアールは、アイオリアの杯に溢れるほど酒をそそぐ。
「それじゃ、今日も生きぬいたことに。そして、また美味い酒が飲めるように。乾杯！」
　シャリアールの声が響いた。

「明日から、百騎長だ」
　デフロット将軍に呼び出されてそう告げられたのは、王都に帰還して3日後のことだった。
「明日からは、十騎長が十人に、兵百十人が貴様の直属となる。普通なら7年かかるところを、騎士任命1ヶ月で百騎長だ。戸惑うこともあるだろうが期待させてもらう」
　その言葉を聞いた、アイオリア心中は複雑なものだったが、デフロット将軍はアイオリアの肩をバンバンと叩き上機嫌だ。
「百騎長は、カーライル国王が任命し武具一式が下賜される。式典用だから実戦では使えないが、国の式典に出席するときには着用しろ。それから、任命式典は明日の午後だから、今日中に鎧のサイズ合わせをしておけ」

無言のアイオリアを了承と受け取ったのだろう。デフロット将軍は力いっぱい肩を叩いて部屋から送り出した。

「はあ…」

ため息と共に体中から力が抜ける。出世すると給料も上がるし、嬉しいのだが部下に対する責任も生まれる。それを考えると嬉しさより不安のほうが大きい。

デフロット将軍の執務室のある建物の入り口までくると、アイオリア付きの騎士見習いになったリュエルが待っていた。

「どのようなお話でした、アイオリア様」

「百騎長に昇進だ」

「それは、おめでとうございます」

リュエルの本心から喜んでくれる笑顔が、今のアイオリアには重い。それが表情に出たのだろう。

「どうかなさいましたか？」

リュエルが不安げに、アイオリアを見上げる。

「いや、なんでもない。ちょっと仕事が増えるな。と思っただけだ」

リュエルに預けておいた剣を受け取り、ちょっと笑って見せた。

翌日、真新しい鎧を着て式典の間中、見世物（みせもの）にされたアイオリアは、うんざりしたような顔で軍部が用意した館に帰ってきた。

館で何が待っているかも知らずに……

次回予告

アイオリアの出世を祝っての大騒ぎの中、騎士見習いになりたいと訪ねてきた少女。

その少女の正体は？

次回　魔族の少女

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０３：酒盛り（後書き）

最近、『天駆ける戦乙女の翼』にかかりきりだったので、久しぶりの更新です。
あちらも落ち着いたので、あちらで読者の大きな反響がない限りは、こちらメインでいけると思います。
反響がないならないで、悲しいですが（笑

第2章　ＦＩＬＥ０４：魔族の少女

床の上には酔いつぶれた男たちが幾人も、浜に打ち上げられた魚のように転がっている。
ここは百騎長（ひゃくきちょう）になったアイオリアの為に、軍部が用意した屋敷だ。アイオリアと使用人の幾人かが住むには、少しばかり広い気がしないでもない。
アイオリアが百騎長に任命された式典から帰ってきたら、部下になった十騎長達や友人達が酒宴を始めていた……　後に聞いた話では、首謀者はシャリアールだったらしい。
今はその大騒ぎも収束し、リュエルとメイド服を着た娘二人が男たちに毛布を掛けて回っている。
そんな中、アイオリアとシャリアールはまだ杯を交わしていた。
「シャリアール殿、これからも宜しくお願いする」
アイオリアが頭を下げる。
「おいおい、こんな時にかたい話はやめようぜ。俺はお前さんのことは気に入っているんだ。ちゃんと補佐するさ。他の十騎長達も軍歴が長くてクセのあるやつらだが、腕は確かな連中だ。お前さんは堂々としていればいい」
そして、口元に笑みを浮かべる。
「それに酒も強いしな。俺とここまで飲めるやつも珍しい」
そう言ってゴブレットにワインを注ぐ。そこにリュエルがやって来た。困ったような顔をしている。
「リュエル。どうかしたのか？」
「あ、あの、アイオリア様。騎士見習いになりたいという者が……明日にするように言ったのですが、会ってくれるまでここで待つと。門の前に……」
先の戦の活躍で、騎士見習いとして使えたい。という者は後を絶

たない。だが、アイオリアが自分付きの騎士見習いとしたのは、今の所はリュエルだけである。
通常、百騎長クラスで3人から4人の騎士見習いが仕えるのが普通だ、雑務をこなす為の人員でもあるし、それだけの給料も貰っているのだ。
アイオリアは少しだけ考えて、その者を執務室に通すように言った。

執務室に通されてきたのは、ボロキレを身に纏った少年に見えた。
衛兵に浮浪者として、王都からつまみ出されても仕方ないような格好だ。
「私を貴方に仕えさせて欲しい」
春風に揺れる鈴のような声……　この一言で、アイオリアは自分の間違いに気づいた。目の前にいるのは少年ではなく少女だという事に。よく見ると、幼いながら胸の膨らみも確認できるし、身体つきも男としては細いリュエルよりもさらに華奢(きゃしゃ)だ。
「何故、私なのだ？」
アイオリアは静かな声で聞いた。
「貴方が、私の父様、ガウロ＝アルフォンスを討ったから……」
少女は、まるで天気の話しでもするような調子で言った。

次回予告

騎士見習いとして仕えたいと訪ねて来た少女。

少女はアイオリアが討った敵将の娘だった。

次回　ヒルト＝アルフォンス

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０４：魔族の少女（後書き）

ようやく2章のヒロイン登場。
引っ張ったつもりはないのですが、砦攻略戦の戦場に少女を出すわけにもいかなく。出すとしたら騎士見習いという事で完全に、アイオリアと敵対関係になってしまい、後のストーリーと整合性が取れないので、この形になりました。

途中の時間経過が省かれていますが、アリア砦攻略から王都に帰還するまで3週間近く流れています。

第2章　FILE05：ヒルト＝アルフォンス

「貴方が、私の父様を討ったから……」
少女はまるで天気の話しでもするように言った。その言葉にリュエルが反応した。腰の小剣を抜き少女に向けかまえる。
「貴様！　魔族か！」
少女は顔色ひとつ変えずに、リュエルの構える小剣の切っ先を見つめていた。
「リュエル。剣を引け」
アイオリアの言葉にリュエルが首を振る。
「いいえ。武器を持っていなくても、魔法があります。魔族が使う魔法は我々が使う魔法より強力です。しかも、アイオリア様を、親の仇とはっきりと言いました」
少女は剣を向けられても冷静だった。先ほどと変わらない落ち着いた声で淡々と話す。
「父様（とうさま）は武人（ぶじん）だった。戦場で討たれたのなら本望でしょう。その事で仇を討つつもりはないわ。アイオリア様が父様より強かっただけ。それに……」
そう言うと、少女は身に纏（まと）った布を脱いだ。
薄暗い部屋の中に白い裸身が浮かぶ。まだ幼い胸の膨らみも、淡い茂みも隠さず、ただ正面にいるアイオリアとリュエルを見据える。
「貴方たちと魔族、何が違うというの？」
リュエルはあまりの出来事に硬直している。
少女は硬直しているリュエルとアイオリアを交互に見つめるともう一度、問う。
「貴方たちと私たち、何が違うの？」
アイオリアは少女に近づくと、自分のしていたマントで少女の裸身を覆ってやる。
「名前は？」

「ヒルト……　ヒルト＝アルフォンス」
「ヒルトか。いい名前だね。私は多分、君が思っているような人物ではないが、それでもよければ、私に忠誠を誓ってくれるか？」
ヒルトは頷いた。
「リュエル、聞いての通りだ。ヒルトに部屋を用意してくれ。そうだな、コティに怪我の手当てを頼んでくれ」
アイオリアはメイドの1人にヒルトを任せる事にした。
「わ、わかりました」
リュエルが我に返り返答する。ヒルトの突飛な行動に毒気を抜かれたようだ。
「そんな顔をするな、リュエル。彼女は嘘を言ってはいない。彼女に裏切られたとしたら、僕に人を見る目が無かったと言う事さ」
「いえ、アイオリア様が決められた事ですから」
そう言いながらも、不満気な表情を消す事が出来ないのは若さ故だろう。
リュエルが部屋を出て行き、アイオリアとヒルトが残される。
アイオリアは頭を掻くと、ヒルトにイスに座るように勧めた。

次回予告

周りの期待が重いアイオリア。

しかし今の彼には何も出来るはずもなく。

次回　アイオリア＝ロウ

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０５：ヒルト＝アルフォンス（後書き）

やっとヒルトの名前が出てきました。（2章のヒロインなのに）
でもって無事に騎士見習いとなりました。

ヒルトは外見的特徴は人間と変わらないです。魔力が多いだけの人間といった感じで、魔法も契約していないので使えませんし、彼女の特殊能力（魔力を力に変え身体能力を上昇させる）も使いきれてなく大したことありません。
彼女の今の武器は、父親に叩き込まれた剣技だけです。

第2章　FILE06：アイオリア＝ロウ

「そうだね。細かい事は明日にしよう。お腹はすいていいないかい？」
ヒルトはフルフルと首を横に振ったが、次の瞬間、クーとお腹が鳴った。
「はは、遠慮することは無い。コティが来たら準備させよう」
アイオリアはやさしい微笑を浮かべた。その微笑を見れば彼が武勲を上げた騎士だとは信じられない。
「……本当にアイオリア様ですよね？ごめんなさい。あ、あのイメージと全然違うので……」
「そうか。ヒルトには僕がどのように見える？」
「ええっと……　学者や文官のように見えます」
言いづらそうなヒルトを見て、アイオリアは声を立てて笑った。
「そうだろうね。今日は皆からそう言われたよ。駆け出しの学者のようだとね」
コン、コンと扉をノックしてメイド服の少女が入ってきた。
「お呼びでしょうか？　ご主人様」
「コティ。彼女はヒルト＝アルフォンス。騎士見習として迎える事にした。部屋はリュエルが準備しているので、湯浴みと怪我の手当て、それから食事を頼む」
「はい。承りました」
コティは、アルフォンスに頭を下げた。
「それではヒルト様。こちらへ」
コティがヒルトを部屋から連れ出した。
1人、部屋に残ったアイオリアは、机の引き出しから酒のボトルを取り出す。アイラという土地で作られるウイスキーで、結構高価なものだ。そのウイスキーをボトルから直接あおった。強いアルコールが喉を焼く。

この間、いや、つい1ヶ月前までは考えられない状況にいる。周りから向けられる期待や憧れ……　だがアイオリアは自分がただの殺人者だと思っている。
「人殺しと罵られた方がましだな……」
ヒルトの言葉通り、彼女の瞳には憎しみの色は無かった。だがその事がアイオリアには辛い。
「いや、糾弾されたがっているのは僕自身か」
アイオリアは自虐的な笑みを浮かべまたウイスキーをあおった。

「おう、ようやく戻ってきたな」
戻ってきたアイオリアにシャリアールは杯を揚げて見せた。空になった酒瓶が2本ほど増えている。
「1人、見習を取ることにしました」
「そうか。坊主も少しは楽できていいじゃないか」
アイオリアは苦笑した。
「そんなことを聞いたら怒りますよ、彼」
シャリアールは、ガハハと豪快に笑う。
「お前さんも、坊主も真面目すぎる。少し柔らかくなったほうがいい。ほら飲め！」
結局2人は、空が明るくなるまで飲んだ。

次回予告

アイオリアは軍を統括する上級将軍に呼び出された。

そこでであった人物とは？

次回　カーライン王子

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０６：アイオリア＝ロウ（後書き）

アイオリア……　アル中になってしまいそうです。
そんな感じで飲まれると、酒がかわいそうだからやめような。

アイオリアの基本的な考えはこんな感じです。
英雄、勇者と祭り上げられていますが、人殺しが嫌いで軍人（騎士）である自分すら容認できていません。
人が死ぬことを嫌うルノアすら、ある程度受け入れていますから、この作品の中でアイオリアが一番人が死ぬことを嫌っているでしょう。
でも彼は軍人ですから職業として人を殺します。地位が上がればなおさらですね。このことが物語にどう影響してくるのでしょうか？
では次回は今週中かなぁ。（たぶん）

第2章　FILE07：カーライン王子

「アイオリア様。グリード将軍がお呼びです。城の執務室に出頭するようにとのことです」
　屋敷の中庭でリュエルを相手に剣の稽古をしていたアイオリアに声をかけたのは、金髪の髪をショートにした碧眼（へきがん）の少女。ヒルト＝アルフォンス、1週間前にアイオリアの騎士見習になった少女だ。
「わかった。リュエル、剣を片付けておいてくれ。ヒルト、着替える。その後は供（とも）を頼む」

「ヒルト。ここで待っていてくれ」
　グリード将軍の執務室の前でアイオリアはヒルトに剣を預けた。城内での帯剣（たいけん）は認められているが、室内への持込は禁止されている。必然的に部屋の前に立つ衛兵か、伴った者に預けることになる。ヒルトは剣を受け取り一礼する。
「アイオリア百騎長、入ります」
　部屋に入ると執務室の机には、グリード将軍ではなく整った顔の金髪碧眼の青年が座っていた。貴公子然とした細身の青年だが、その体が鍛え上げられたものであることは福の上からでも分かった。どこかで見たような顔、そしてその青年の素性を思い出したアイオリアは慌てて片膝を突き、頭を下げた。
「失礼いたしました。カーライン王子」
「いや、不意打ちするような事をしたのはこちらだ。すまなかった。噂の勇者様に会って見たくてな」
　カーラインはいたずらっ子のような笑みを浮かべる。
「顔をあげよ、アイオリア百騎長。そなたには新設される私の軍団で力を貸して欲しいのだ。王位継承権を放棄した私に付くのは、ハ

ズレくじかもしれないがな」
　カーライン王子は、先日、王位継承権を放棄した。理由は公表されていないが、これで王位継承権1位は正室のナルディア妃の生んだカディス王子に移り、本人たちを置き去りにしたお家騒動は一応の決着を見た。
　カーライル王子には領地と公爵の爵位、将軍の地位が与えられることが決まり、領地は拝領してないが、爵位と将軍の地位はすでに得ている。
　そして将軍の地位の者に許される、自分の軍団を設立するためのスカウトだとアイオリアは察した。
「私の後継人であるグリードから、そなたのことを聞いてな。私に力を貸してはくれないか？」
　カーラインはアイオリア手を握り、頭を垂れた。
「カーライン王子。私のような者に頭を下げるなど」
「私の為に力を貸してくれる者のためになら幾らでも頭を下げよう。それに頼んでいるのは私だ」
　カーラインはそう言って頭を上げようとしない。
　カーライン王子は、庶子というだけで門閥貴族達には嫌われているが、若い文官、貴族以外の兵達から王位をと期待されていた。それも、彼の人柄と庶民のための政策を次々と打ち出す政治手腕ゆえだ。
　王位を放棄したものを惜しむ声もいまだ多く、喜んだのは門閥貴族達くらいだ。
　頭を上げようとしないどころか、額を地面に押し付けかねないカーラインの姿を見ながらアイオリアは困り果ててしまった。
　確かに剣を捧げる相手としては申し分ない。王位継承権を放棄したとはいえ出世も望めるだろう。しかしできるだけ平凡に暮らしたいと思うアイオリアの理想からはどんどん放れていく。
　しかしカーラインの言葉には惹かれるものがあった。名君の資質もある。

その彼が力になって欲しいと頭を下げている。それに答えたいという思いもあった。
アイオリアはしばらくカーラインを見つめた後に口を開いた。
「カーライン王子。私の剣と忠誠を貴方の為に」
カーラインは頭を上げ、アイオリアの手を握りなおした。
「すまない。アイオリア百騎長。そなたには苦労をかけるだろう。だが、私も出来うる限りそなたに報いよう」
カーラインのうれしそうな顔を見て、アイオリアの表情も緩む。アイオリアは自分の全てを捧げても後悔しない主を見つけた気がした。

次回予告

カーラインは、魔王軍の使者として訪れた女性と再会した。

そこで交わされた会話は？

次回　再会

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　FILE07：カーライン王子（後書き）

外伝1に登場したカイン王子の登場です。王位継承権は放棄してしまっていますが。

ルノアとカインの出会いが書かれている『聖魔戦記外伝1　神官姉妹と王子様』もよろしくお願いします。（次回はあの娘も登場しますことですし）

カインのイメージとしては、文武に秀でた好青年です（笑

次回はアイオリアではなくカインが主役です。

第2章　FILE08：再会

「カインです。入りますよ」
ドアをノックして部屋に入ってきたのは、カーライン王子だ。部屋の中には黒髪の女性がいた。蒼いガイア教の神官服を着た美しい女性だ。
しかし、カーラインは知っていた、美しさだけでなくその女性の辛い過去も、その過去を乗り越えた心の強さも……　5年前に出会った時に、この人のように強くなりたいと願った。今でも憧れの女(ひと)だ。
「ルノアさん。ミシェイルも私も心配したのですよ。戦場に残るなんて……」
ルノアと呼ばれた女性は、静かに微笑んだ。
「手紙で伝えた通りよ。元気にやっているわ」
ルノアはミシェイルと育った孤児院の園長には、近況を知らせる手紙を出していた。
「ルナさんから話を聞いた時は、ミシェイルが取り乱して大変だったのですから」
「でも、カインがちゃんと支えているのでしょう？」
カーラインが顔を赤くした。
「5年前の約束もありますから……」
カーラインは懐かしそうな顔をする。その約束をした時は、もう1人の女性がいたのだが、今は、音信不通になっている。ルノアにとっては姉ともいえる人だが、ルノアもカインも心配はしていない。そのうちに何事もなかったようにひょいと顔を出すだろうと思っている。
懐かしそうな顔で微笑むカーラインに、ルノアは真剣な顔をして頭を下げた。

「ル、ルノアさん？　一体何を……」
「ごめんなさい。王位継承権を放棄したのは、あの娘（こ）の為でしょう」
カーライルは笑顔を向けた。
「顔を上げてください。もちろん、ミシェイルの為と言うのもありますけど、正直、自分の為ですよ。王位よりミシェイルを選んだだけです」
だが、ルノアの表情は曇ったままだ。
「それで、よかったの？　弱い人たちを守れる王になりたいと言っていたでしょう？」
カーラインは「あははっ」と笑った。
「王でなくとも、政治は出来ます。それにミシェイルを側室にするつもりはありませんよ。今のこの国では、庶民の女性を正室に迎えられませんからね。私の妻になる女性は1人でいい。ガラにも無い事を言っていますね」
ルノアは首を横に振った。
「ミシェイルを、お願いねカイン」
「言われなくても。それに僕の方が彼女を必要としていますから。ところで、肝心の和平交渉はどうなっています？」
必要となれば、幾らでもポーカーフェイスで各国の王や将軍達と渡り合う女性なのに、今日の彼女は考えている事がすぐ表情に出た。カーラインは、それだけで彼女の苦労の程が見て取れた。
「難しいわね。カーライル王は、「フィロス砦と金山を明け渡せ」の一点張りだし。レイバ様も捕虜釈放のカードしか切ってくれないから……　レイバ様は、カーライル王の方から和平を求めない限り、本気で戦を終わらせる気は無いでしょうね。今回は時間稼ぎ、カーライル王も多分同じね。負け戦が続いたから軍を再編する時間が欲しいのよ」
「それでは、戦は？」
ルノアがカーラインの言葉を継ぐ。
「終わらないわね。お二方には、力の無い民のことを考えて欲しい

のだけど……　でも、努力はしてみるわ。諦めたらそれで終わりだもの」
「ルノアさんは変わらないね。僕も努力はしてみる。僕も平和な方がいい」
カーラインは笑って言った。そのときドアがノックされ、金髪で杖を突いた女性が部屋に入ってきた。
「ルノア姉さん」
「ミシェイル。目は大丈夫なの？」
ミシェイルの目は2年前に事故で失明しかかった。今でも人影や光の強弱はわかるらしいのだが、はっきりと見えているわけではない。
「姉さんのばか！」
ミシェイルがルノアに飛び込んできた、そのアメジストのような瞳には涙が浮いていた。
「ごめん。ごめんね、ミシェイル」
ルノアはミシェイルをギュッと抱きしめた。

次回予告

ルノアにお茶に誘われたヒルト。

時間は穏やかに流れ。

次回　ティータイム　前編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ０８：再会（後書き）

今回と次回、次々回の話はストーリーの大筋にはほとんど関係ありません。

今回の話は、１章の最後にあった和平交渉のためにルノアがリューム国に訪れているということを示すためです。
まともに相手されなく、暇なため次話ではゆっくりお茶を飲んでいたりします（笑
ミシェイルもカインも今回は顔見せだし。

サブタイトル、ティータイムの前後編以降から物語りがまた動き出します。タイトルの戦記にあるように戦争シーンですよ。

第2章　FILE09：ティータイム　前編

「ヒルトさん。お茶を付き合ってもらえないかしら？」
ルノアは扉のそばに立っているヒルトに声を掛けた。
「いえ、私は護衛のためにいるので」
ヒルトはそっけなく断った。ドアの外にはシャリアールたちが交代で護衛についている。女性の護衛という事でヒルトがルノアに張り付いていた。
「そんな所に立たれると、軟禁されているみたいだわ」
「いいえ。そんな事は……」
ルノアは、くすっと笑った。
「カインの命令なのだろうけど、しゃちほこばって護衛しなくても大丈夫よ。今の所、私を殺して得をするような人間はこの国には居ないわ。カーライル王が本気で和平を考えているのなら、事情は変わるかもしれないけどね」
ルノアは、ヒルトの背中をイスの前まで押していき座らせる。
「市場に出た時に、いい葉を見つけたのよ。あと、美味しそうなクッキーもね」
ルノアはなれた手つきで紅茶を注ぐと、ヒルトの前にクッキーと共に置いた。
「カインも心配性になってしまって、自分の身ぐらい守れるわ。あ、ごめんなさいね。冷めないうちに飲んで」
ヒルトはおずおずと口をつける。
「美味しい」
ヒルトが感嘆（かんたん）の声を漏らす。よい葉を使っていることもあるのだが淹れ方が良いので葉の美味しさを残さず抽出したという感じだ。
「そうでしょう。グレタ産のセカンドフラッシュ。パンドラさんが居たらきっと買い占めていたでしょうね」
ルノアは苦笑して見せた後、ヒルトを見つめる。

「それでね。ヒルトさんに聞いておきたい事があるのだけどいいかしら？」
「はい。何でしょうか」
ルノアは紅茶を一口飲んでから口を開いた。
「理由を教えてもらえないかしら？」
「理由？」
「ええ、魔族の貴方がここに居る理由。もし、周りに知れたら大騒ぎよ。お父様の復讐？」
ヒルトは首を横に振った。
「アイオリア様を憎いとは思っていません。親不孝かもしれませんが……　何故だか、自分でも分からないのですが、今はアイオリア様の側に居たいと思います。ルノアさま、私を覚えていたのですか？」
ルノアは頷いた。
「ヒルトさんの怪我を治療した事がありましたね。まだ、半年も経っていないでしょう？」
ルノアが魔王軍に身を置くことになって1週間も経たない頃だ、訓練中の事故で瀕死の重傷を負ったヒルトが、ルノアの元に運びこまれたのだ。応急処置が的確だったこと早めにルノアの下に連れてこられたこともあって、怪我の深さのわりには傷跡すら残らなかった。
「はい。アイオリア様が、置いてくれるならですが……」
「そうなの。でも、気をつけるのですよ。魔族という事だけは、知られないようにね」
「ええ、気をつけます」
窓からは、暖かな日差しが差し込んでいた。

次回予告

勇者と呼ばれる青年と、蒼い聖女。

その邂逅は穏やかで

次回　ティータイム　後編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　FILE09：ティータイム　前編（後書き）

グダグダとストーリーが進まなくてごめんなさい。
ルノアとヒルトの関係を少し書いておきたかったもので、しかも生かされるとしたら本作『前奏曲（プレリュード）』の次のお話、『恋歌（マドリガル）』でのことになりますねぇ（笑

元々、『恋歌』の設定と物語があって、『前奏曲』の物語が出来たので『恋歌』への伏線ぽいのが多いです。
ちなみに、ミシュエルの目やヒルトの怪我の件はキャラを作ったときに、そのキャラの過去のこととして設定されているのもです。
この作品では、特にこのような事項が多いので説明不足になってしまった場合はごめんなさいです。

第2章　FILE10：ティータイム　後編

「遅れて申し訳ありません」
ノックと共に、アイオリアが部屋に飛び込んできた。
「いいえ、こちらこそお忙しいところをお呼びして。それに、ヒルトさんにお相手を願いましたから」
ルノアはアイオリアに席を勧めカップに紅茶を注ぐ。
「いただきます」
「アイオリア様とも、ゆっくりお話してみたかったのですけど、なかなか時間が取れなくて……」
「私とですか？」
ルノアは微笑みながら頷いた。
「ええ、兵士達から『勇者』と呼ばれている方に、興味がありますわ」
「そんな、貴女こそ『蒼い聖女』と呼ばれて兵士達から尊敬を得ている。それも敵味方無く」
アイオリアは少し照れた様子で紅茶を一口飲むと、「良い葉を使っていますね」と微笑んだ。
「おかわりならありますよ」
立ち上がろうとしたルノアをヒルトが制止して立ち上がる。
「ルノア様、私がやります」
「それでは、ヒルトさんお願いします」
「でも、ルノア司祭はがっかりなされたのではありませんか？」
確かに勇者という感じの風貌ではない。アイオリアには剣を持ち戦場に立つイメージよりも、学者か教師というような印象を受ける。穏やかな感じから聖職者も似合うかもしれない。魔王レイバとは違った意味で戦士に見えない。
「どうしてです？　アイオリア様の人となりは好ましく思います。

それに、そうでなければリュエルさんやヒルトさんが、ここまで献身的に仕えないと考えます」
アイオリアは照れくさそうに笑った。
「2人には、苦労をかけていますよ」
「そんな事はありません！」
アイオリアの言葉に過敏に反応して、叫ぶように言ったヒルトをルノアとアイオリアが見つめる。その視線に気がついたヒルトは、顔を真っ赤にして「ご、ごめんなさい」と囁くように言って小さくなった。
「ふふ、慕われていますね。アイオリア様」
「ありがとう、ヒルト」
ヒルトは更に顔を赤く染めうつむいた。
コンコン。
扉がノックされ、リュエルが入ってきた。
「失礼します。アイオリア様、カーライン公爵がお呼びです」
「わかった。ルノア司祭、すまないがこれで失礼します」
「残念ですね。ヒルトさんはお借りできまして？」
「ええ、カーライン様の所にはリュエルを供につけますから」
ルノアは微笑んでアイオリアとリュエルを送り出す。そしてヒルトに向き直り。
「さて、今度はアザム産の紅茶を入れましょう。こちらも美味しいですよ」
このあとヒルトが、ルノアの紅茶講座をみっちり聞かされ美味しい紅茶の入れ方をマスターしたことは、また別の話である。

次回予告

それは些細なことが原因だった。

しかし、それが引き起こしたものは深刻で。

次回　内乱０１　事の起こり

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ１０：ティータイム　後編（後書き）

とまぁ、そんなこんなで次回より内乱編です。

第2章　FILE11：内乱01　事の起こり

門閥貴族フーリレイ＝ニス侯爵が死去した事に端を発した内乱は、当初、短期間で鎮圧されると思われていたが、派遣されたリクトール上級千騎長率いる兵3000騎が全滅したとの報告に軍上層部は蜂の巣をつついたようなありさまである。

「たかが2000の戦力に敗れたというのか」

「賊軍に魔族が居たとの報告もあるが……」

「リクトールのヤツも、情けない」

「相手は、たかが2000足らず、一軍（兵力10000）をもって当たればよい」

「2000の敵に10000も投入したら、いい笑いものだ」

「兵力の基本は、敵より大群をそろえることにある。名よりも実を取るべきだ」

「魔族への備えはどうする。和平どころか一時停戦も拒否したのだぞ。こちらから、頭を下げる事などできん」

しばらく結論はでそうにない。その会議室の隅へ、カーラインはアイオリアを呼び出した。

「カーライン様、フーリレイ侯爵が叛乱を起こしたなど初耳ですが？」

「ルノア司祭が滞在しているからな、緘口令が出ていた。フーリレイ＝ニス侯爵が亡くなったのは知っているな？　彼は公金を着服していて役人連中が口を出せないことをいいことに私服を肥やしていたのだが、侯爵が病により急死。せこい事に役人どもは息子のロレイ＝ニスに、親の着服した公金の返還を求めたわけだ」

「せこいと言うより、情けないですね。それで、ロレイ侯は返還を拒否したわけですね」

アイオリアがあきれたようにいうと、カーラインは頷いた。

「その通りだ。そして、リクトール上級千騎長が派遣されたが全滅。

本人も全治1ヶ月、兵も帰ってきたのは５００足らずだ。リクトールも無能ではないのだがな」
そこまで言うと、カーラインはアイオリアに意味ありげな視線を向けた。
「私にやれと？」
カーラインは頷きつつアイオリアの肩をポンポンと叩いた。
「無理ですよ。我々の軍団は編成中で戦場に出せるのは２０００ほどです。それに指揮官が居ません」
「大丈夫。アイオリア千騎長」
「私は百騎長ですよ。カーライン公爵」
「褒美の先渡しだ。父上、いや、カーライル王には話を通してある。それに、リクトール配下の生き残りもつけてやるし、上手く鎮圧できたら上級千騎長だ」
アイオリアはため息をついた。
「それでも、千騎長が指揮できる兵力は１０００ですよ」
カーライルは苦笑して答える。
「俺には将軍の権限が与えられている。反則気味だがその指揮権を一部貸し与えるということで問題ない」
それは反則気味ではなくて、反則だとアイオリアは思った。実際の戦場で上官が指揮を取れなくなった場合に、部下が指揮権限より多くの部下を統率しなければならない羽目になることがある。指揮権の『一部譲渡』または『貸し与え』というのは、その矛盾をごまかすための緊急回避的な処置に過ぎない。
だが実際問題として現場レベルではよく行われていることである。これは階級の設定ミスだとカーラインは考えており、千騎長と上級千騎長の間に新たな階級を新設する必要があると軍上層部に何度も訴えている。
「その状況では、拒否権は無いじゃないですか」
「やれるか？　アイオリア」
「やらなければならないでしょう。カーライン様、御考えのままに」

「すまぬな。苦労をかける」
アイオリアは頭を振った。
「それは、カーライン様に剣と忠誠を捧げた時に、覚悟をしております」
「そうであったな。では、戻って部隊の編成を頼む。俺は頭の固い爺様どもを、黙らしてくる」
２人は拳の甲をコツンとぶつけ合うと、それぞれのするべき事を遂行する為に別れた。

次回予告

アイオリアたちの前に立ちふさがった敵軍は、平民の寄せ集めだった。

しかし、無視するわけにはいかないアイオリアは。

次回　内乱０２　緒戦

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ１１：内乱０１　事の起こり（後書き）

以前、以下の階級説明をしましたが。

上級将軍（軍の最高司令官）
将軍（１万以上の兵を率いることが出来る実戦部隊の長）
上級千騎長（１万以下の兵を統率。砦の指令官や地方の治安維持部隊長、後方支援部隊の長など）
千騎長（１千以下の兵を統率）
百騎長（１００人程度の部隊を統率）
十騎長（１０人程度の部隊を統率）

階級に関しては私の設定ミスですね。千騎長と上級千騎長の統率できる兵力数に差がありすぎです。

カーライル王子は王族であるため、将軍待遇が与えられています。

上級将軍に関しては通常は国王のことです。
他に引退した将軍に与えられる『名誉階級』でもあります。

第2章　FILE12：内乱02　緒戦

シャリアールが、アイオリアの側に馬をつけた。その表情は険しい。
「アイオリア千騎長」
「千騎長は要りませんよ。シャリアール百騎長」
シャリアールは、苦笑いを浮かべたが目は笑ってない。
「部下の前だ、けじめはつける。それでなあの敵部隊は平民の寄せ集めだ。指揮官は騎士だが……」
「ロス侯爵の評判を聞く限り、民衆が協力するとは思えないが、どう思う？」
「無理矢理、集めたのだろう。だが、４０００の兵力は厄介だな」
アイオリアはため息を吐く。
「精鋭とはいえ、我が方は３０００。無駄な戦闘は避けたいところだが」
「戦闘を避けたいのは同感だが、正面から降伏勧告出しても承知しないぞ」
アイオリアはなにやら考え込む。
「シャリアール。敵の指揮官は、騎士階級で間違いないな？」
「ああ、間違いない。金ぴかの鎧を着て偉そうにふんぞり返っていやがる」
アイオリアは何か思いついたようだ。
「騎兵２００を私の直接指揮下に、それに別働隊で騎兵を１００準備してくれ。基本戦術として重装歩兵を主力とした力押しで攻める。指揮はシャリアールお前に任せる。ただ、武器を捨てた者、降伏の意思を示す者は殺すな。徹底させろ」
シャリアールは敬礼すると目線を下に下ろし、硬皮鎧を着た少年と少女に声をかけた。

「リュエル、ヒルト、アイオリアの後(うしろ)から離れるなよ。そこが一番安全だからな」
２人はコクリと頷いた。

前衛に配置されたフルプレートメイル（全身を覆う板金鎧）を着込んだ騎士達が、両手持ちの大剣で軽装の敵兵を次々なぎ倒していく。転倒して起き上がれなくなり討ち取られた者もいるが、戦の流れはアイオリア率いる正規軍側にあった。
反乱軍の無理やりに徴兵された兵の持つ粗末(そまつ)な武器では、フルプレートメイルの重装歩兵(じゅうそうほへい)に対して決定的なダメージを与えることが出来ず、戦場は凄惨さを増していく。
「アイオリア様……」
リュエルが呟くようにアイオリアを呼んだ。
「ああ、一方的だな。このままでも勝てるが戦死者が増えすぎる。敵と味方の被害を少なくする為、急ぐぞ」
アイオリアは直接指揮を取る騎馬隊に向き直る。
「今から敵左翼より突撃する。無理して敵兵を倒す必要は無い。一気に右翼へと駆け抜けろ」
アイオリアは剣を敵陣に向ける。
「全軍突撃！　我に続け！」
アイオリアは猛然と敵陣に突撃した。
前衛で崩れかけている所に、左翼から騎兵が突撃した事によって、反乱軍は総崩れになる。
仲間を掻き分け、踏み潰し、中には背中から味方を斬捨てて逃走する者もいる。
指揮官とおぼしき騎士達が、瓦解を止めようと見せしめに幾人か逃げ出した兵を斬るが混乱に拍車をかけるだけだ。
その混乱の中に、時間差を置いて１００騎余りの騎兵隊が突撃し

てきた。しかし、彼らは武器を振り回したりせずに大声で勧告を行う。

「騎士1人の首で、２００人の兵卒の命を助ける。降伏しろ！　降伏せぬ場合は殲滅する」

反乱軍の騎士達は顔を青くして逃げ出そうとするが遅かった。今まで支配していた兵たちに囲まれ、1人、また1人と馬から引きずり下ろされ討たれていく。

開戦わずか2時間で勝敗は決した。

次回予告

緒戦に勝利した王国軍。しかしアイオリアの表情は曇ったままで。

アイオリアの様子がおかしいことに気が付いたヒルトは。

次回　内乱０３　ぬくもり

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ１２：内乱０２　緒戦（後書き）

すみません。集団戦闘のシーンって難しい。
戦略図にできるといいのですけどねぇ。
集団戦闘は第３章でも何度か出てくるシーンですし、何かいい感じに参考に出来る小説ないかなぁ？

第2章　FILE13：内乱03　ぬくもり

「投降者2，321人。討ち取った騎士が28人。後は、まんまと逃げ延びたか戦死者だ。ちなみに、暗くなるまでに確認できた戦死者は954人。我が方の被害は戦死者2人、重軽傷者26人、行方不明2人だ。負傷者と投降者は後方へ移送済みだ」

天幕の中で、アイオリアはシャリアールの報告を聞いていた。

「兵達はやはり平民か？」

「ああ、無理矢理どころか、女房子供を人質にとられた例もある」

「そうか……」

アイオリアは俯いた。シャリアールの位置からは表情が読みと取れなくなる。

「アイオリア。あまり気に病むな。剣を向けた相手はどのような理由があろうと、敵だと割りきれ。そうでないと身が持たないぞ」

シャリアールの言うことは間違っていない。戦場で躊躇（ちゅうちょ）したら血溜まりに沈むのは自分のほうだ。

「頭ではわかっているが、やはりな……」

「戦はまだ続く。リュエルにでもメシの用意をさせるから、食ったら休め。残りの雑務はやっておく」

そう言うと、シャリアールは天幕から出て行こうとするが、入り口で立ち止まった。

「アイオリア。お前のそういうところは甘いとは思うが、嫌いじゃない」

シャリアールはそれだけ言うと天幕を後にした。

「アイオリア様？」

ヒルトは夕食の食器を下げに来たのだが、夕食にはほとんど手を

つけられていなかった。そして、アイオリアの様子がおかしなことに気がついた。
アイオリアは広げられた地図の前で、震える両手を見つめていた。
「アイオリア様、いかがなされました？」
少し声の大きさを上げ、肩に触れると、ビクッとアイオリアが身体を震わせた。
「ヒルトか。少し考え事を……」
「嘘です！」
無理に笑顔を作ろうとするアイオリアの返答を最後まで聞かずに、ヒルトは否定した。
アイオリアは、ヒルトから視線をそらし、まだ震えている両手を見つめ苦笑を浮かべた。
「手が、血に濡れているんだ。気がついたら真っ赤に……　それなのに僕はまだ人を殺す事を考えている。僕は……」
言葉の通り、地図の上には敵味方の部隊を示す駒が、配置されている。
ヒルトはいきなりアイオリアの頭をその胸にかき抱いた。
「ヒ、ヒルト？」
「大丈夫……　大丈夫です」
ヒルトは左手でアイオリアの頭を抱え、右手で背中をポンポンとたたきながら、母親が幼子を諭すようにやさしく呟く。
ヒルトの華奢（きゃしゃ）な身体から感じるぬくもりは心地よく、いつのまにか両手の震えは止まっていた。
「私は、いえ、私達は皆、アイオリア様のことが好きです。だから苦しい時は苦しいと言ってください。アイオリア様が一人で苦しんでいるのを、ただ見ているしかできないのはとても辛いです」
どのくらいの間そうしていただろうか。アイオリアが口を開いた。
「ヒルト、ありがとう。もう大丈夫だ」
ヒルトは微笑むとアイオリアの頭を優しく撫でた。

「早かったな。アイオリアの様子はどうだった？　ほっとくと思いつめる性質（たち）だから心配でな」
食器を抱えたヒルトにシャリアールが声を掛けた。
「大丈夫です、シャリアール様。明日にはいつものアイオリア様に戻っています」
断言したヒルトの目をシャリアールは見る。
いつも、表情の変化を隠そうとする（成功しているとは、いいがたいが）少女の目が「私は、アイオリア様を信じています」と雄弁に語っていた。
「わかった。信じよう」
シャリアールはヒルトに笑って見せた。

次回予告

敗残兵に襲われた村にたどり着いたのは一組の男女。
２人は村を救うために動き出した。
次回　内乱０４　蒼（あお）と白（しろ）
風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　FILE13：内乱03　ぬくもり（後書き）

設定的には、アイオリア17歳、ヒルト14歳です。
この世界では、15歳から成人として認められます。20前のルノアなど、もう2，3年したら立派なお局様です（笑

次回、陰の主役（笑）が登場です。
ぶっちゃけ、外伝の主人公のフェンリアさん。この人がサブタイの『蒼』です。（でもって、この人も行き遅れ）
では『白』は？　それは次回を読んでみてください。

多分、月曜日辺りまでには更新（土日は更新できそうにないので）すると思います。

第2章　FILE14：内乱04　蒼と白

村のあちらこちらから火の手が上がっている。粗末な皮鎧を着た兵士が村人を殺し略奪に興じている。その横では村娘の服を剥ぎ取り、その上に覆い被さっている男が下卑た笑みを浮かべる。
兵達昨日まで友軍であったのだが、今日の戦で敗残兵となり統率を失った彼等は村を襲った。
奪い、殺し、犯し、火を放つ、惨劇の宴は始まったばかりである。

「これはひどいわね」
蒼い神官服に身を包んだ女性が、村の入り口で事切れていた子供の瞳を閉じてやる。
女性は首からガイア教のホーリーシンボルを下げていた。ガイア教の神官である事は間違いない。
「そうか？　戦場では当たり前の事だ。弱いものから死ぬ」
女性神官の呟きに答えたのは、純白のロングコートに身を包んだ人物だ。
中性的な顔立ちで、男と言われればそう見えるし、女と言われても疑問には思わないだろう。少なくとも外見で性別を判断できない。白い肌に白い髪、全身白一色の中で、その双眸だけが深紅に染まっていた。
「ゼロ。敗残兵たちを撃退するわ」
女性神官が当然というように言った。
「追い返すのか？　殺す方が遥かに楽だぞ、フェンリア」
ゼロと呼ばれた人物は、銀色に光る三節棍（さんせつこん）を取り出しながら、表情を変えずに言い返した。
「駄目よ。殺さないで。あなたになら出来るでしょう？」

フェンリアと呼ばれた神官もソードブレイカーと呼ばれる1メートルほどある剣を引き抜いた。この剣はガイア教の神官戦士が好んで使用する剣だ。剣の背には大きなのこぎりのようなギザギザの刃(やいば)が並び、その部分を使って剣を絡め取ったり、細い剣ならその名のとおり折る（壊す）こともできる。

「ゼロ、逃げる奴は追わなくていいわ。村人を助ける事を最優先にして」

「敵は殺すな。村人は助けろ。いつも難しい事ばかり言う」

フェンリアは心外ね。という顔をする。

「あら、できない事は言っていないわよ。信じているからね、ゼロ」

その言葉を聞いて、ずっと無表情だったゼロの口の端が少しだけ綻んだ。

裸にした村娘に覆い被さっている兵士の後ろから、そ～と近づいたフェンリアは、狙いを定めると、鉄板を貼り付けたブーツで兵士の股間を蹴り上げた。兵士は形容しがたい悲鳴を上げ、泡を吹き悶絶する。

「何をする！　貴様何者だ！」

一緒に村娘を嬲(なぶ)っていた兵士が剣を構え威嚇(いかく)するが、下半身丸出しではいささか間が抜けていて迫力に欠ける。格好についてはさておき、その手に持つ剣には、まだ赤さを残す血液が付着している。人を斬ってからそれほど間がない。それを見たフェンリアの目が細くなる。

フェンリアは無造作に間合いを詰めると、手にしたソードブレイカーを起立したままの兵士の一物にピタッと当てた。その場所から鋼の冷たさが伝わる。

「降伏すればよし、でなければ、この場でちょん切るわよ」

フェンリアはニッコリと微笑を浮かべたまま、のたまうがその目

は笑ってはいなかった。
兵士はその目に射竦(いすく)められた。この目は本気だ……　少しでも抵抗すれば、本気で切り落とされる……
兵士は恐怖でしぼんだイチモツを、手で隠しながら剣を捨てた。
「お願いです。切り落とさないで……」

「死ねぇぇ！」
叫びながら剣を振り上げて襲ってきた兵士の喉元に、若干(じゃっかん)手加減した一撃を加えたゼロは、地面をのた打ち回る兵士の両膝を、三節棍を使い表情も変えずに砕いた。
「6人目」
ゼロはフェンリアとわかれてから、出会う兵士を叩きのめした上、逃げられないように両膝を砕いた。
このまま、村人達にくれてやってもいいかもしれない。おそらくなぶり殺しにされる事だろうが。
だが、フェンリアがそのような事を許すはずがないと考え直す。
また1人、物陰から兵士が襲ってきた。ひょいと、その攻撃を避け、手にした三節棍を兵士の両膝に叩き込む。骨の砕ける感触が手に残った。
フェンリアはやりすぎだと怒るかもしれないが、剣を向けてきたのだ、殺される覚悟ぐらいは出来ているだろう。命があるだけ感謝してもらいたいものだ。
ゼロは村のメインストリートを歩いているだけで、ゴキブリのように次々と湧いて出てくる兵士を叩きのめしながら、余りの手ごたえの無さにため息をついた。
結局、フェンリアとゼロは、半時を待たずして敗残兵達を制圧した。

次回予告

凶器を手にフェンリアの前に立つ村人。

フェンリアは冷笑で答えた。

次回　内乱０５　復讐の刃　前編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ１４：内乱０４　蒼と白（後書き）

仕事から帰ってきたら寝ちまいました（笑
というわけで深夜の更新です。

やはりフェンリアは書きやすいです。
小説を何本か書くとこういうキャラが出てきますねぇ。
欠点は、深刻なシーンなのに、ちょっと軽くなってしまうことでしょうか（笑

ゼロは外伝２の最終話のあとがきで書いた、外伝３で書くつもりのキャラでした。今のところ（外伝の反応がまったくないので）外伝３の執筆予定はありませんけど。

第2章　FILE15：内乱05　復讐の刃　前編

「ガイアよ、傷つきし者に、癒しの光を」
４歳くらいの女の子の額に当てたフェンリア手が光る。手をどけると傷一つ無い滑らかな肌が見えた。
「はい、もう大丈夫。傷跡一つ残っていないよ。女の子だから、顔に傷が残ったら大変だものね」
フェンリアは目線の高さを女の子に合わせて微笑んだ。すると女の子は、恥ずかしそうにして母親に抱きついた。フェンリアは、何度も頭を下げる母親に今日はゆっくりと休ませるように言い、部屋から送り出した。背伸びをすると骨がコキコキと鳴った。
１５０人ほど村人の内、２６人が死亡し、生き残った人間も、そのほとんどが怪我をしていた。なかでも村長と、この村、唯一の教会ファン教の神官が殺されてしまったのが痛かった。村の意思を代表する人間が居ないのだ。
仕方がないので、フェンリアは村の中では一番立派な村長の屋敷を借り受け、怪我人に治療を施していた。
重傷者も幾人かいたが、命にかかわるような者は今のところいない。だが敗残兵達に犯された娘のように心の傷を抱えたものも少なからずいる。魔法を使えば外傷は簡単に治せるが、こればかりは時間が必要だ。
「やっと片付いた……」
フェンリアは机の上に突っ伏した。
魔法の使い過ぎで動く気にもならない。しかし、現実はそれほど甘くは無かった。　すうっと意識が暗闇に吸い込まれようとした時、荒々しくドアが開かれた。
フェンリアはぴょんとバネ仕掛けの人形のように背筋を伸ばした。ドアの方に目を向けると村の若者が3人立っていた。それぞれの

手には鎌や鍬などの農機具が握られている。
「今から、野良仕事……　のわけないわね」
あと2時間もすれば日が落ちるし、雰囲気が尋常ではない。あきらかに殺気立っている。フェンリアはそっと懐のダガーを握る。
「あ、あいつらを、俺たちに渡してもらおうか！」
鍬を持った、如何にでも田舎の兄ちゃんといった感じの青年が叫ぶように言った。極度の緊張のためか声が裏返っている。
「あいつら？　誰の事よ？」
フェンリアはすっとぼけた。あいつらとは村を襲った兵士達のことだろう。今は丁寧に縛り上げ、教会の地下室に閉じ込めてある。地下に続く入り口でゼロが見張っているから、脱走はまず無理だ。
「む、村を襲った奴らだ」
3人の内で一番背の低い青年が答えた。手には鎌と何故か鍋の蓋を持っている。盾の代わりだろうか。
「それで。彼らを引き渡したら、あなたたちはどのようなショーを、見せてくれるのかしら？　詳しく聞かせてくれない？」
フェンリアの声は氷ように冷たい。先ほどまで、怪我人達に慈愛に満ちた声をかけていた女性と同一人物とは信じられない。
「う、うるさい！そんなのは、俺達の勝手だ！」
上ずった声で叫ぶ青年達にフェンリアは冷笑で答えた。その氷の刃は青年たちの心を抉るが要求を撤回させるまでにはいかない。殺気だけが高まっていく中先に口を開いたのはフェンリアだ。
「はっきりと、言ったらどう？　僕ちゃん達は縛られて無抵抗の人間を嬲り殺すのが好きですって、それとも村が襲われた時は怖くて隠れていたけど、縛られて抵抗できない奴らは怖くないぞー！　かしら？」
フェンリアは青年達に辛らつな言葉を浴びせる。事実、死者のほとんどが村を守ろうとして敗残兵に立ち向かった人達だ。
フェンリアとゼロが助けに入った時には、村人で抵抗している人間はいなかった。隠れていたか、村の外まで逃げ出したのであろう。

それが悪いと切り捨てるつもりはない、自分の身を守る為にしたことだ。だが、それなら、それらしくしていればいいものを、抵抗できなくなった加害者を嬲り殺しにしようとするのだから救われない。

もう少し自分のしようとしている事が、どんなに恥ずかしい行為か客観的に見て欲しい。と思う。

理不尽に平和な暮らしを壊された憤りは理解できる。ならばあの場で戦って、己の手で大事なものを守ればよかったのだ。己の命を懸けて。

自分は安全な場所に居て、復讐を遂げようとする。それがフェンリアには気に入らない。

「なんだと！　ガイア教の神官だと思って下手に出ていれば！」

何時、下手に出ていたのかはわからないが、激昂する青年達。手にした凶器を構える。

「痛い目にあわないと、わからないみたいね？　いいわ、その性根が真っ直ぐになるまで、たたき直してあげる」

フェンリアは、不敵に笑った。

次回予告

凶器を手にした村人たち。

斬り捨てるのは簡単だが、ゼロは困っていた。

次回　内乱０６　復讐の刃　後編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ１５：内乱０５　復讐の刃　前編（後書き）

なべの蓋（ふた）という盾（たて）があったのはドラクエだったかな？
今回もフェンリアが主役です。
しかし、本当に書きやすい娘です。もしかしたらルノアより書きやすいかも。
次回はゼロの出番です。

第2章　FILE16：内乱06　復讐の刃　後編

フェンリアは男が振り下ろした鎌を、左手で払った。
「遅い！」
フェンリアの拳が男の顎に突き刺さる。男の膝から力が抜け、カクンと崩れ落ちた。
「次！」
フェンリアの声に、鍬を持った青年が「はい！」と返事をして鍬を振り上げた。フェンリアの顔に苦笑が浮ぶ。普段は気の良い青年なのだろう。いちいち返事をして襲い掛かってくるとは……
フェンリアは男の攻撃をひょいと避けた。次の瞬間、フェンリアの右足は青年の頭上にあった。修道服がめくれ露出したその形良い脚をそのまま、垂直に振り下ろす。ゴスっと、鈍い音がして、青年は白目をむいて崩れ落ちる。
「もっと、鍛えなおしてらっしゃい。次！」
振り返ると誰もいなかった。いや、床を這うようにして、入り口に向かっている男の姿があった。
フェンリアはため息を一つ吐くと、ツカツカと近づき、首根っこを引っ掴む。
「た、助けてくれ。俺は無理矢理、連れてこられたんだ！」
フェンリアは泣き叫んで許しを請う、男の首に腕を回し耳元で囁いた。男の動きがピタリと止まった。
「ねぇ。教えてくれない。彼等に復讐しようとしているのはあなた達だけ？」
男は首を振った。
「そうなの。他の人達はどこにいるの？」
「……教会」
「そう。ありがと……」
フェンリアは腕に力を込めた。数秒後、頚動脈を締められオチた

男が、床に転がっていた。
「さて、急がないと。ゼロ、早まらないでよ」
フェンリアは服の埃を払うと教会に向かい走り出した。

ゼロは、困っていた。彼のまわりを村人が取り囲んでいる。若い男達が多いが小数、年配の男性や女性も居た。
手には鎌や鍬、棒きれ、中には古びた剣を持っている者もいる。彼らの要求は、「村を襲った兵士達を、引き渡せ！」だ。
個人的には引き渡してしまっても一向に構わないのだが、ここで彼らを引き渡すと……　後が怖い。怒ったフェンリアと対峙するよりは、千人斬りやって見せろと言われた方が遥かにマシだ。
かと言って、このままの状態を維持するのも難しい。その内に暴発するのは目に見えている。
「大人しく、渡せやゴラァ！」
如何にも短気そうな青年が、角材を振り上げて襲ってきた。
ゼロは三節棍で角材に鋭い一撃を加える。角材は乾いた音を立てて真っ二つに裂けた。それを見た青年が腰を抜かして床にへたり込む。
村人達の包囲の輪が少しだけ広がった。だが幾人かの青年が、鞘から剣を抜こうとしている。その様子を見たゼロは殺気のこもった声で言った。
「おい！　それを抜くと、命のやり取りになるぞ！」
青年達の動きが止まった。
さて、どれだけ時間が稼げるか？
純白の悪魔と呼ばれていた頃なら、悩む間もなく全員を斬り捨てていた。フェンリアと出会ってからはなるべく殺さないようにしていたが、このくらいの人数なら数分でカタが付くだろう。
昔の方が楽だったと思う。だが、「信じているからね」と言って

笑うフェンリアの笑顔が曇るのは不本意だった。

次回予告

村の近くまで進軍した正規軍。

無用な混乱を避けるため従軍神官を村に派遣する。

次回　内乱０７　法の神官

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ１６：内乱０６　復讐の刃　後編（後書き）

フェンリアのブーツには鉄片が貼り付けられていたはずですが……
それが脳天に、ゴスッと……　生きているか青年（笑

ゼロの三節棍は、棒状（棍）にすることも可能で、材質はミスリル銀。これはフェンリアからもらった物です。
フェンリアと出会う前はハルバードという、両手持ちの槍と斧を合わせたような武器を愛用していたと設定です。
外伝３で、この辺りを書こうかと思っていたのですけどね。

さて次回は、アイオリア達に一旦戻ります。

第2章　ＦＩＬＥ１７：内乱０７　法の神官

前方に村が見えた。記憶が確かなら、サラスという人口、１００人ほどの小さな村だ。
「全軍停止」
そう言ったアイオリアをリュエルが訝しげにみた。副官であるシャリアールが、改めて全軍に停止を命じる。
「リュエル、ミュラー殿はどこにいる？」
「従軍神官殿は、補給部隊に同行なされています」
「すまないが、呼んで来てくれ。ひと仕事してもらう」
リュエルが、馬を駆り後方に消えていく。
「シャリアール、村との交渉が終わるまでここで小休止だ。見張り以外は装備を解いても良いぞ」
アイオリはヒルトの方を見た。いつものごとく表情を隠してはいるが、最近は微妙な変化で感情を読めるようになった。
「ヒルト、どうかしたのか？」
「……交渉事を任せるのに、ミュラー殿で大丈夫でしょうか？　ミュラー殿は、フェン教徒以外には冷たすぎます」
アイオリは少し困った顔をする。
「我が軍団の従軍神官はミュラー殿だけだしな。それに、彼女もプロだよ。仕事に感情は持ち込むまい」
「ですが……　いえ、アイオリア様が、お決めになられた事です。口が過ぎました」
「いや、気になったことは進言してくれ。皆の進言を無視するようになったら、僕も終わりだろう」
アイオリアは、ヒルトにそう言って笑ったが、ヒルトは笑わなかった。

「ミュラー司祭様」
　リュエルが馬を降り女性の前に進み出た。ファン教の黒い神官服を着ている硬質の雰囲気の美人だ。雪のように白い肌とプラチナブロンドの髪が人目を引く。
「リュエル君、ご機嫌はいかが？」
「ええ、主の加護のおかげで良好です」
　リュエルの胸元で、本と剣を模したファン教のホーリーシンボルが揺れた。
「今日はどんな御用？」
　ミュラーがそう言って笑った。
「今日は仕事ですよ。アイオリア様が力を貸して欲しいそうです」
「やっと、初仕事ね。ここ一ヶ月、暇すぎて左遷（させん）されたかと思ったわよ」
「まだ新設されたばかりですから、それに勝戦が続いていますし、ミュラー様の仕事が少ないのも無理はありませんよ」
　だが、ミュラーはため息を吐いた。
「……ミュラー殿は、アイオリア様がお嫌いですか？」
　リュエルが不安げにミュラーに訪ねた。
「そうね。嫌いではないです。ただ、不本意なだけで……　他の神を信仰しておられるのなら我慢できますが、よりにもよって無神論者なんて」
　リュエルは慌てて頭を振った。
「それは違います。アイオリア様は、ファン神やガイア神、その他の神々にも敬意を払っています」
「当たり前です。でも、ご本人はどこの神も、信じていないではありませんか」
　そう言って頬を膨らませるミュラーを見て、リュエルは苦笑を浮かべた。意外と子供っぽい所のある女性だ。

「でも、アイオリア様だと、シューフ教辺りに入信しそうですが……　それでもよろしいのですか？」
リュエルはマイナーな神の名前を挙げた。
「風と自由の神……　不本意ではありますが、今の状態よりはいいです」
そう言って、憮然とした顔をするミュラーにリュエルは手を差し出した。
「そろそろ行きましょう。ミュラー様は、僕の馬に乗ってください」
リュエルはミュラーを自分の馬に乗せると、手綱（たづな）を取って歩き出した。

次回予告

微妙なバランスの中で均衡が保たれる教会内。

その中に均衡を破る一石が投じられた。

次回　内乱０８　狂戦士（バーサーカー）

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ１７：内乱０７　法の神官（後書き）

うきゃー　また新キャラ登場。
でも、ミュラーさんはほとんど脇役だろうなぁ。

次回はゼロが大暴走です。

第2章　FILE18：内乱08　狂戦士

じりじりと肌に殺気立った空気が刺さる。ゼロの顔には微笑が浮かんでいた。心が躍る。戦闘マシーンとして作られた。そう、魔道士達に作られた人造人間である自分の故郷は、戦場だという実感が気分を高揚させる。この場にいる全員を相手にしても一瞬の出来事だろうが、戦場には違いない。

遠回りにゼロを包囲した村人達は、それぞれの武器を手にしたまま動かない。いや、ゼロの発する殺気に動けないでいた。一流の戦士が発する、それだけで人を殺せそうな殺気。ピーンと張り詰めたロープの上に立っているような感覚。村人達は引くことも、進むことも出来ないでいた。

教会の中は、いつ崩れるかもしれない均衡を保っている。何か言葉を発しただけで、脆くも崩れ去ってしまいそうな均衡……　教会の中は、耳が痛くなるほどの静寂に包まれる。と、次の瞬間、教会の扉が開かれた。

「何をしているのです。双方、引きなさい！」

教会に響く女性の声。しかし、その声に微妙なバランスの上に立っていた均衡が崩れる。

「うおぉぉぉぉぉぉ！」

ゼロが、吼えた。三節棍の一振りで、村人をなぎ倒し、ゼロは教会の入り口に向かい駆ける。そこには、黒衣の女性。その顔に三節棍を振り下ろす。

ギン！　次の瞬間、金属が打ち合う音が響く、2本の剣が、三節棍を寸での所で受け止めている。

「ミュラー様は、下がってください」

ゼロの三節棍を止めた1人、亜麻色の髪の少年が、黒衣の女性に言った。

「この場は、私たちで止めます」

金髪の少女が、感情を消した抑揚のない声で言う。
その2人を見てゼロの顔に笑み、いや、おかしくてたまらないという喜びの表情が浮んだ。

ダン！　ヒルトは背中から壁に叩きつけられた。
「くっ」
衝撃で息を吐くことも吸うことも出来ない。剣から手が離れた。
目の前の白い髪の男、ゼロは強すぎた。
リュエルが、少し離れたところで倒れているのが、視界の端に写った。生死はここからでは確認できない。
手探りで剣を拾う。その動きに気がついたゼロが、ゆっくりと近づいてくる。
「やめなさい！」
黒衣の女性、ミュラーが叫んだ。男はその言葉を無視してヒルトに近づいてくる。
「……ミュラー司祭、逃げて」
ヒルトが壁を背を預けるように立ちあがりながら呟くように言った。
「そういうことは、自分で決めるわ」
ミュラーがヒルトとゼロの間に立ちゼロを睨み付ける。しかしゼロの顔には狂喜の笑みが張り付いたままだ。ミュラーはゼロを睨み付けたまま呪文を唱えた。
「断罪の刃　神の裁き　光の刃　ルールブック」
ゼロの四方に光の教典が現れ、光の刃がゼロを襲う。
だが、次の瞬間信じられないことが起こった。ゼロが光の刃をすべて叩き落し、あまつさえ光の教典を三節棍で破壊したのだ。
この魔法は内側からの破壊は不可能だとされている。ファン教団内部でもその試みがなされたが、幾人かの犠牲者を出した末、破壊

は不可能だと結論付けられた。
それを、ゼロはいとも簡単にやってのけたのだ。破壊された魔法の余波によって、ヒルトは再び吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた、意識こそ飛ばなかったが、再び立ち上がることはできない。
ミュラーも無事では済まず、やはり壁に叩きつけられ咳(せき)き込んでいる
「逃げてください。ミュラー司祭……」
ヒルトがミュラーに言うが、どう見てもヒルトの方が不利(ふり)な状況だ。
だが、ゼロはヒルトが無力化されたと判断したのか、深紅(しんく)に燃える瞳(ひとみ)をミュラーに向けた。

次回予告

絶体絶命のミュラー。

それを救ったのは蒼衣の女性だった。

次回　内乱０９　答えなさい！

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　FILE18：内乱08　狂戦士（後書き）

狂戦士（バーサーカー）化したゼロ。これを止めるのはあの女性（ひと）しかいません。
それにしても、フェンリアの本編登場シーンだけでえらいページ数を消費してしまいました（笑
登場キャラの中で、書いてて一番楽しい娘（こ）だからなぁ。

『ルールブック』の魔法は、ファン教の神官が使う魔法で、外伝2にて登場した魔法です。
そこでも破壊不可能な魔法として紹介してるのですが、何事にも例外はあるということで（笑

第2章　FILE19：内乱09　答えなさい！

ゼロがゆっくりと近づいてくる。その端整なその顔には、狂喜の笑みが浮んでいる。だがミュラーには邪悪な笑みにしか見えない。

ミュラーはゆっくりと後退るが、1メートルもいかないうちに部屋の角に追い詰められた。

「銀の矢　裁きの矢　ホーリーアロー」

呪文と共に、ミュラーの周りに出現した光の矢がゼロを襲う。しかし、先の『ルールブック』の魔法と同様に、光の矢はゼロの三節棍に当たった瞬間に霧散した。

「ホーリーアロー！　ホーリーアロー！」

ゼロはことごとく光の矢を打ち落とす。ミュラーの目の前まで歩を進め、三節棍を棒状に変化させ振り上げた。ミュラーも素早く呪文を詠唱する。

「彼の者に　安らかな眠りを　スリープミスト」

眠りの霧がゼロを包む。だが、ゼロは何事も無かったように三節棍を振り下ろした。ミュラーは目を閉じ、頭を両腕で庇い、身体を丸くした。

1秒、2秒、だが何も起こらない。ミュラーは、恐る恐る目を開いた。

ミュラーとゼロとの間に、蒼い神官服の女性が割り込んでいた。ガントレットに包まれた右手でゼロの武器、三節棍をがっちりと掴んでいる。

「はぁい、ゼロ。私のことがわかる？」

ゼロの顔には、笑みが張り付いたままだ。

「死人を出していないのは、たいした進歩ね」

女性は周囲を見回す。村人に怪我人は、見えない。革鎧を着た少年と少女が倒れているが、とりあえず命にかかわることは無さそうだ。

「でも……　今、彼女を本気で殺そうとしたでしょう？」
女性が空いている左手で、ゼロをぶん殴った。ゼロがたたらを踏む。さらに追撃の一撃、ガントレットをつけた手で殴られ、さすがのゼロも尻餅をつく。
「さっさと、目を覚ましなさい！」
一喝されても、ゼロは笑みを貼り付けたまま、腰のダガーを抜きつつ立ち上がる。
「あ、少し軽かったかな？」
常人なら一撃でノックアウトできるだけの威力がある拳撃を、軽かったと言ってのける。
「はっ、ハッハッハッハッハ」
笑いながらダガーを繰り出すゼロ、蒼衣の女性は、まるで踊るようなステップでその攻撃をさける。
何度か攻撃を避けられたゼロが、雄叫びを上げた。身体ごとぶつかるようにして飛び込んでくる。
「きゃっ」
ミュラーが小さく悲鳴を上げた。目の前、数センチの所で血に濡れたダガーの切っ先が止まっている。
ゼロのダガーが、ミュラーに当たると判断した女性が右手で止めたのだ。
「痛っ」
ゼロが間合いを取ろうと下がる所に、女性が追い討ちをかける。負傷した右手で思い切りぶん殴る。パッと血の紅い華が咲いた。
殴られたゼロの身体が、ピクンと震えた。
「ゼロ、答えなさい！　私の名前は？」
ゼロがダガーを落とし、頭を抱える。
「答えなさい！　ゼロ」
「ふぇ、フェン……」
「答えなさい！」
ゼロが顔を上げ、女性の顔を見た。

「フェ、フェンリア……　ヒルデガルド……」
ゼロはフェンリアの名を呼ぶと、スーと目を閉じた。そのまま、前のめりに崩れ落ちるゼロを、フェンリアが抱きとめる。
「おかえりなさい。ゼロ……」
フェンリアは、ゼロの耳元でやさしく呟いた。

次回予告

フェンリアは勇者と呼ばれるアイオリアと会う。
そこでアイオリアがフェンリアに要請したことは？

次回　内乱１０　勇者と伝道師

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ１９：内乱０９　答えなさい！（後書き）

フェンリア……　ガントレットした手で殴りますか普通？
怪我した手でもぶん殴っていますが（汗
それにしても、アクションが派手な娘だなぁ。

『ホーリーアロー』と『スリープミスト』は宗派に関係なく、神官たちがよく使う一般的な魔法です。
立て続けに魔法がこんなに出るのって初めてですねぇ（笑

第2章　FILE20：内乱10　勇者と伝道師

フェンリアはベッドで寝ているゼロの額に濡れた布を載せた。ゼロはあの後、気を失ったままいまだに目を覚まさない。

「ゼロ……　起きたら、もう一発かしらねぇ」

フェンリアはため息をついて右手を見た。ミュラー司祭が治癒魔法をかけてくれたが、ダガーが手の平から甲に貫けた跡が赤く残っている。

「こら、早く目を覚ましなさい」

声にいつもの覇気が無い。正規軍の従軍神官に攻撃したため、国家叛逆罪の容疑で軟禁されて、明るく振舞えるほど能天気ではない。特にこのような戦場での場合、現地司令官の判断が大きい。

しばらく、フェンリアがゼロの顔をボーっと見ていると、扉がノックされ少年と少女が入ってきた。ゼロに殴り倒された2人だ。たしか、リュエルとヒルトといったはずだ。手は剣の柄にかけられいつでも抜刀できる体勢だ

「そんなに、身構えなくても大丈夫よ。彼もまだ目覚めてないし、わたしもガイア神の名において、貴方達を傷つけるつもりはありません。外の方も中に入られたらいかがですか？」

フェンリアの声に扉の影から姿を現したのは、背の高いひょろっとした青年だった。全くもって戦場が似合わない。国立図書館か神殿の書庫で本をひっくり返している、うだつのあがらない若い学者のようだ。

「リュエル、ヒルト、さがってよい。神官殿失礼した。私はこの部隊の指揮官、アイオリア＝ロウというお見知りおきを」

「ガイア教伝道師、フェンリア＝ヒルデガルドです。あちらで、寝ているのがゼロと申します。傭兵です」

アイオリアは2人の名前に覚えがあったようだ。

「『天使の片翼』と呼ばれるあなたと、『純白の死神』……　おもしろい組み合わせですね」
「天使のふたつ名は、あの娘の……　ルノアのものよ。最近は『蒼い聖女』と呼ばれているみたいね。私は天使って柄じゃないわ」
フェンリアも最近は『剣の神官』と呼ばれることが多い。
「それに彼も、ガイア教に入信した者です。今は一緒に布教の旅をしております」
フェンリアの言葉に頷くとアイオリアは近くにあったイスに座る。フェンリアもイスに座った。
「村人から話を聞いてきました。事件の方は不問にします。悪く言う人もいましたが、ほとんどの人があなたに感謝していましたよ」
アイオリアは笑いながら言った。
「それに怪我人も出てないですし、理由が理由ですから」
「ありがとうございます。助かりました」
フェンリアの顔に笑みが戻る。
「それから、敗残兵達ですが、彼らの処遇は捕虜として軍で預かります。戦が終わったら、裁判にかけられることになりますが」
裁判にかけられるだけマシだろう。敗残兵が民間人を襲えば捕虜としての資格を失う。
正規軍は問答無用で処刑してしまってもかまわないし、必要とあれば民衆に引渡し私刑にしてしまってもかまわない。
「それは仕方ないでしょう。罪は償ってもらわなければなりません」
「そうですか。それからもうひとつ……　この戦が終わるまで、我々に同行してもらいます」
「同行ですか？」
「ええ、外に漏れる情報は少ない方がいいですし、ガイア教の神官も探していたのですよ。我が部隊もガイア教の信者が多いですから」
フェンリアは、ゼロを見た。
「よろしいのですか？」
アイオリアも、質問の意味に気づいたようだ。心身喪失状態にあ

ったといえ正規兵を傷つけたのだ。今の軟禁どころか逮捕されても文句は言えない。
「彼の事は、ミュラー司祭から聞いています。構いませんよ」
アイオリは、笑いながら言った。フェンリアはアイオリアに好感(こうかん)を抱(いだ)く。
「それでは、しばらく厄介になります」
フェンリアは頭を下げた。

次回予告

作戦会議で反乱軍の戦力が報告される。

思った以上の敵戦力にアイオリアは。

次回　内乱１１　決戦前　前編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２０：内乱１０　勇者と伝道師（後書き）

というわけで、正規軍に同行することになりました。
どうなりますことやら。

第2章　FILE21：内乱11　決戦前　前編

「密偵の情報によれば、総兵力約4，200です」
ヒルトが、報告書を読み上げる。
「当初の予測戦力の倍じゃないか」
シャリアールが声を上げる。
「先の戦闘の部隊も含めると4倍強の戦力ですね」
ヒルトは、いつものごとく淡々と返す。
「あれは、平民の寄せ集めだしなぁ」
シャリアールが苦笑した。
「ヒルト、増えた兵力の素性は分かるか？」
今まで、黙っていたアイオリアが訊ねる。
「半数は、徴兵したものらしいのですが、残り半分は国境警備に出していた兵です。兵士として、訓練された部隊と見ていいと思います」
「シャリアール。今、投入できる全兵力は？」
「ろくに訓練も終わっていない新兵も含めてか？」
アイオリアが頷く。
「特等席で、観戦させるわけにはいかないだろう？」
「4，000だ。先の戦闘で、こちらのために戦うと表明している投降兵も使うなら5，000弱……　それで、どうする？」
アイオリアは、テーブルの上にあったワインのボトルを手に取ると、自分のグラスにそそいだ。ヒルトが酌をしようとするのを手で制す。テーブルの上に戻されたボトルは、シャリアールの手に渡り、幾人かの手を経て、あっという間にテーブルの反対側まで行ってしまった。
一方、アイオリアは、せっかく注いだワインを飲むわけでもなく、手の中で弄（もてあそ）んでいる。何かを手の中で弄ぶのは、考え事をしている時のアイオリアのクセだ、周りも承知しているので、新たに意見を

発言する者もいない。
「ミュラー司祭」
不意にアイオリアがミュラーを呼んだ。
「は、はい」
ミュラーが慌てて立ち上がった。
「そんなに慌てなくても良い。無駄だとは思うが、降伏勧告を出してくれ。必要なら、フェンリア伝道師の同行を許可する。フーリレイ侯爵家は代々ガイア教徒だから、仕事はやりやすくなるだろう」
「わかりました」
ミュラーが恭しく頭を下げた。
「シャリアール、今ある兵力のうち2，000を4つに分けてくれ。直属部隊で使う。指揮官の人選も頼む」
「俺では駄目か？」
アイオリアは、苦笑しながら答えた。
「だめだな。お前には副官として苦労してもらう。現場指揮は、他の者に任せろ」
「では、リッヒッター、アルゴ、サカキ、ナレスでは？」
シャリアールが挙げた名前は、いずれも古株のベテラン騎士達だ。能力も信頼できる。
「わかった。では4人に命ずる。昼夜を問わず変則的に敵砦への攻撃を行なえ。だが戦うな。敵が出て来る前に逃げろ。半分は嫌がらせだが、作戦の要だ。分かったな」
4人の騎士が、踵を踏み鳴らし敬礼した。
「それから、シャリアールは残りの部隊を500ずつの部隊に分けてくれ。部隊の基幹には熟練兵を当てて命令系統を確保してくれ。何日かかる」
「3日あれば」
「2日でやれ」
シャリアールはため息をついた。
「俺の配下の騎士見習達を、過労死させるつもりか？　わかった、

どうにかやろう」
シャリアールの返事を聞いて、アイオリアはイスから立ち上がった。
「詳しい作戦は、部隊が編成された後おこなう。以上解散」
皆、それぞれの部署に散っていった。

次回予告

会議の後、疑問を述べるヒルト。

アイオリアはリュエルとヒルトに宿題を出す。

次回　内乱１１　決戦前　中編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２１：内乱１１　決戦前　前編（後書き）

いよいよ決戦も近いです。
また集団戦闘を書かないといけないなぁ。
集団戦闘のシーンは難しいです。

第2章　ＦＩＬＥ２２：内乱１２　決戦前　中編

「アイオリア様……」
「ヒルト？　前にもいったけど、言いたいことは、どんどんいって欲しい」
　遠慮がちにヒルトが口を開いた。
「あ、あの、５，０００の兵をそろえるなら、力押しの方がいいじゃないですか？」
「うん、ウチの部隊の練度が高ければ、それでもいいんだ。どんな奇策を駆けられても、整然と　対応できればいいのだからね。数の力は無視できないが、質が悪すぎては話にならない。先の戦闘で僕がやったとおり、ちょっとした奇襲で総崩れになる」
　アイオリアはリュエルとヒルトに、地形図の模型を動かして説明を続ける。
「練度の高い部隊相手に、むろん指揮官の資質も必要だけど、同じ作戦を取れば……　そうだな、僕なら左翼部隊の半数で壁を築き、残り半数で包囲殲滅する作戦を取る。奇襲をかける方が、圧倒的に兵力は少ないからね」
　アイオリアは奇襲を受けた部隊の模型を動かし正面の敵に当たる部隊と、奇襲をかけた敵を食い止める部隊に分け、地形図の上に配置しなおす。
「練度が高い部隊なら、相手より多い兵力をそろえての力押しでもいいんだ。だけど、相手の方の練度が高ければ、つけこまれるだけだし、今回は寝返った部隊もいるわけだしね」
「アイオリア様は、そこまで考えていたのですか？」
　横から、リュエルの声が上がった。
「リュエル、視野は大きく持て。小さい事に気がつく洞察力は必要だが、全体の動きを見て判断しないと、つけ込まれる隙を作ることになるぞ」

「はい、心にとめておきます」
ヒルトはアイオリアを見上げている。
「アイオリア様には、秘策があるのですか？」
今回の作戦のことだろう。出来るだけ被害を少なくしたいから立てた策だが、それほど複雑なものではない。
「秘策というほどではないよ。今、考えているのは単純な作戦だ。そうだ、今の状況から僕がどのような作戦を考えているか当ててみてくれ、宿題だ。期限は作戦が発動されるまで」
リュエルは、しまったという顔をしたが、ヒルトはいつものように無表情だ。
「そんな顔をするな。誰かの助けを借りてもいいぞ。人に助けてもらう事は恥ずかしい事ではない。助けてくれる人がいるということは幸せな事だよ。それに私の考えに近い答えを出した方に賞品を出そう」
「本当ですか？」
喜色を浮かべるリュエル。
「あ、あの、わたし、欲しいものがあるのですけど、それでも、よろしいでしょうか？」
ヒルトが自分からこのような事を言うのは珍しい。
「わかった。欲しいものを贈ろう」
アイオリアは2人に微笑みながら言った。

次回予告

嫌がらせのような攻撃。

その攻撃にコウレクト砦の反乱軍は苛立(いらだ)っていた。

次回　内乱１３　決戦前　後編

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２２：内乱１２　決戦前　中編（後書き）

次回はコウレクト砦、反乱軍側の描写になります。

おかげさまで１００００ＰＶ突破しました。

ありがとうございます。

第2章　FILE23：内乱13　決戦前　後編

コウレクト砦、現在はフーリレイ＝ロス侯爵の支配下にある。
「親父、出撃許可を」
フーリレイ＝ロス侯爵の前に、今にも噛み付きそうな勢いで現れたのは、次男のフーリレイ＝セルだ。貴族というより、蛮族といった感じの巨躯は、筋肉の鎧に覆われている。
「落ち着け、何事だ」
「貴族とは名ばかりの青二才の率いる部隊相手に、何故、篭城戦をやらねばならない。同数の兵を貰えてくれたら、一気にひねり潰してやる」
「そ、それは頼もしいな」
ロスは息子の剣幕に、汗をかきながら答えた。
「煩いぞ、猪武者」
柱の影から貴公子然とした長身の男が現れた。長男、フーリレイ＝ファルだ。均整のとれた体躯に甘いマスクは、さぞ女性に持てることだろう。実際、今も傍らにいる女性の腰を抱いている。
「お前が騒ぐと、彼女が怯える。私としては、腕力だけでなく品性を求めたいのだが」
「兄者は、こんな時にも色ボケか？」
「慎め！　レディーの前だ。余り下種な言動をするなら、その舌、切捨てるぞ」
「まあ、兄さん達も落ち着いて」
又、若い男が現れた。黒いローブを着ており、手には大きな杖を持っている。三男のフーリレイ＝ラスだ。
貧相な体つきで、顔色が悪い、まるで病人のような顔色だ。そして、いかにも魔術師という格好をしている。魔術師が忌み嫌われるこの世の中で、そのような格好をしているのは、外に出る必要のな

いせいか。もしくは他人の目を気にしないですむだ。
彼の場合は両方だろう。
「セル兄上、軍の司令官はファル兄上だ。ここは、ファル兄上に従うべきではないか」
「そんなことは分かっている。だが、敵は好き放題攻撃を仕掛けてきやがる。しかも、小規模な部隊で……　おかげで兵達の消耗は激しい、ここで叩かねば、士気が落ちる一方だ」
セルがファルをにらむ。
「だめだ、俺の命令があるまで動くな。命令違反は厳しく裁くぞ」
ファルはセルに念を押すと女性を伴(とも)なって部屋を出ていった。
「ちくしょう！」
セルが、壁を殴りつける。
「説明も無く、ただ命令を聞け、だと、ふざけるな！」
セルも今にも暴れ出しそうな勢いで部屋を出て行く。
「父上、大丈夫ですか？」
ラスが三人のやり取りを、柱の影に隠れて見ていた父親に声をかける。
「ああ、大丈夫だ」
「そうですか、それはよかった」
ラスは言葉とは裏腹に、蔑(さげす)んだ目で父親のロスを見た。
「まあ、セル兄上の言うこともわかります。援軍の当てもないのですから、どこかで敵に打って出なければ、破滅が待つだけです」
「そうか、お前はセルの意見を押すのか」
イスに座りながらロスは末の息子に言う。
「説明もない現状では、そうせざるを得ないでしょう。違いますか父上？」
それだけ言い残すとニヤリと笑い部屋を出て行く。我が息子ながら何を考えているか分からないやつだと、ロスはため息をはいた。

次回予告

いらだったセルは命令を無視して出撃する。

しかしそれは、砦攻略のための布石(ふせき)だった。

次回　内乱１４　命令違反

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ２３：内乱１３　決戦前　後編（後書き）

反乱軍の幹部たちの登場です。
色々と個性のある人たちです（笑

もう第1章の分量を超えてしまっていますが、第2章もやっと終盤です。このままラストまで突っ走れ。

第2章　FILE24：内乱14　命令違反

早朝、セルは物見の兵に起こされた。国王軍の奇襲、昨夜から5度目の攻撃だ。
５００騎ほどの少数部隊が、火矢を打ち込んでくるだけで実害は少ないのだが、放っておくわけにもいかない。
「騎兵の準備は？」
「はっ、７００準備できております」
「兄貴の命令など聞いてられるか。出るぞ！　俺の馬をもて！」

「アルゴ百騎長（ひゃくきちょう）。城門が開きます」
部下の報告を聞くまでもなく。アルゴの眼にも、その様子が見えた。
「とうとう、痺れを切らしたか。全軍、陣形を再編成！」
アルゴがよく通る声で命令を下した。陣形が敵を半包囲するように左右に伸びる。敵の騎馬　部隊は城門の前に固まっている。
アルゴは剣を持った右手を高々と掲げた。
「全軍！　……逃げろ！」
敵を半包囲していた陣形が、あっという間に崩れた。余りのことに一瞬遅れて敵軍が追撃に移るが、四方に散る敵軍を追撃するのは困難だ。そして、周りにある森は国王軍に味方した。

王国軍が我先（われさき）に逃げ出すのを見たセルは、部下の騎兵隊をまとめる。ここで深追いしてもあまり意味はない。

兵の士気を高めるために、王国軍を蹴散らしたという事実があればよい。
「ガハハハ。見ろ、たわいも無い。敵はただ攻めあぐねているだけであろうよ。兄貴は慎重になりすぎて、敵の陰に怯えているだけだ」
上機嫌で笑った後にセルは全軍に、退却命令を出す。
「よし、引き上げるぞ。俺は帰って寝る。誰も起こすなよ」
セルは部下たちに言い放った。

「アルゴ様、他に言いようがあると意見いたします」
集結した部隊をまとめていると、アルゴのところに来た副官に言われた。
「良いんだよ」
「良くありません。士気にかかわります」
アルゴも軍人だ。副官の言いたいことも分かるが、頭が固くなる歳でもあるまいにと思う。
「十騎長、良いんだよ。何故なら、アイオリア様が『逃げろ』と仰られた。フハハハ」
アルゴはひとしきり笑うと副官に聞いた。
「なぁ十騎長。アイオリア様をどう思う。いや、答えなくていい。俺はあのお方が好きになったぞ。軍隊で『逃げろ』等と平気で使う。あの方の元なら死神のカマから逃げおおせる事が出来そうだ」
副官はまだ不服だったが、後半の言葉には同意できたのでこれ以上、うるさい事を言うのをやめた。

「親父。いや父上、命令違反の厳罰なら謹んで受けましょう。だが、臆病な総司令官のよって処罰されるのは我慢なりません。処罰する

ならいっそのこと、父上の手で私の首を切捨ててください」
軍の士官、下士官、文官達が集った広間に芝居(しばい)がかった大声が響いた。
そのセリフに父親のロスはなにやら感銘(かんめい)を受けたらしい。
長男のファルは忌々しげに弟を睨(にら)むと髪をかきあげた。
そして、三男のラスは「とんだ茶番だ。猪(いのしし)が大根(だいこん)に化けやがった」と呟いた。
「知略の基礎も分からぬ猪が、何をぬかす！」
ファルが、一喝する。
「ファル、そう怒るな。セルが敵を撃退したことも事実……」
ロスが、ファルをなだめるように言う。
「セルの行動は、おごった愚か者達に正義の鉄槌を下したのだ。よって今回の命令違反の厳罰は無きものとする」
父のロスの言葉を聞き、ファルは怒り心頭(しんとう)といった感じで広間を出て行った。
ラスは父と次兄に冷笑を向ける。
「そうだ。このまま踊ってもらおう。兄上も運さえよければ、最後まで舞台の上にいられるかもしれませんなぁ」
ラスの呟きを聞いた者は居なかった。

次回予告

時は来た。両軍がとうとう激突する。

アイオリは２，０００の兵を率い戦場に立つ。

次回　内乱１５　コウレクト河畔の戦い

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　FILE24：内乱14　命令違反（後書き）

もうすぐ1ヶ月近く放置するところでした（汗
まあ、ともかく第2話もクライマックスです。

しかし、ラスさんはなにやら裏がありそうです。
そしてどこかで聞いたことのあるセリフと状況……（汗
分かる人は感想ででも指摘してやってください（笑
ヒント：ブラウンシュバイク候　ｗｗｗｗｗ

第2章　ＦＩＬＥ２５：内乱１５　コウレクト河畔の戦い

「敵軍が来ます。数およそ2，０００」
物見の兵が広間に、飛び込んできた。
「親父。敵は我が方の半分だ。今なら力でねじ伏せられる。出陣を！」
セルの意見に、ファルが反対意見を叫ぶ。
「バカな。敵はこちらが砦から出るのを待っている。それに踊らされるのはごめんだ」
そんなファルにラスはツッコミを入れる。
「まあ、長引かせても国王軍が、増強されるだけだけどな」
「ラス！」
ファルが咎めるように怒鳴る。
「事実を言ったまでのこと。戦わねば勝てない」
しかし、ラスは淡々と返す。
「分かっている。だが、敵の手の平で踊るのは不愉快だ」
「では、兄上に策はおありか？」
「うっ……」
言葉につまるファル。
「たとえ罠であっても、罠ごと食い破ればよいだけではないか。兄者は、危険ばかり見すぎて臆病になっているだけだ」
ラスの援護に交戦論が優勢と見たセルのセリフに対し、ファルが顔を真っ赤にした。
「何だと？　誰が臆病だ。わかった3，０００の兵をお前に預けてやる。結果を出せ」
そんなやり取りを今まで黙って見ていたロス公爵が、豪華なイスから立ち上がった。今までの流れから勝てる戦（いくさ）と確信したらしい。
「いや、全軍を出せ。ワシも戦場に立つ。ファルは残りの兵を率い

てワシを守れ。ラスはどうするか？」
ラスは頭を下げ恭しく言った。
「わたくしめには、ファル兄上のような知略もなければ、ラス兄上のような力もございません。守備兵たちと供に、砦を守りましょう」
「それでは、手柄は立てられぬがよいか？」
「ご心配なく。私の役目は、戦が終わってからありましょう」
ラスの顔には笑みが浮んでいた。

「敵軍、布陣しています」
見ればわかる事を、兵の一人が叫んだ。目視で約４，０００の兵力だ。
「アイオリア様、敵は乗ってきましたね」
リュエルが馬をアイオリアの側に寄せてきた。
「敵も、罠の存在は気が付いているはずなんだがな。こっちの方が数で劣っているように見えるからかな。さて宿題の回答だ、ちゃんと付いて来いよ」
アイオリアは剣を掲げた。
「全軍突撃！」
２，０００の軍が動き出した。

「がはは、来たぞ来たぞ。弓隊前へ出ろ」
セルの命令で騎馬隊の前に弓隊が配置された。弓を引き絞り狙いをつける。
「まだだ、ひきつけろ」
国王軍は騎馬隊を先頭に、突っ込んでくる。騎士たちが脇に抱えたランスの一撃は、重装歩兵ですら貫く威力がある。

「放て！」
騎馬隊に向け一斉に矢が放たれた。
後にコウレクト河畔戦いと呼ばれる戦いは、こうして幕を開けた。

次回予告

ぶつかり合う両軍。

アイオリの策が動き出す

次回　内乱１６　激突

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ２５：内乱１５　コウレクト河畔の戦い（後書き）

なんてセリフばかりの場面（笑

いや、笑い事じゃないのだけど……　まあ、いいか。

さて第2章もラストに向けてＧＯＧＯだ。

第2章　FILE26：内乱16　激突

両軍の兵がぶつかり合い、辺りに血の匂いが広がる。ランスに貫かれた兵士、弓や槍に貫かれた騎士、泥にまみれ、血にまみれた死体が休むことなく生産されていく。

「セル様、駄目です。中央前衛部隊が突破されます」

「役立たず共が……　本体を前進させろ」

「は、はい！」

セルは、愛馬に拍車を入れる。

「兄者にあれだけの大口を叩いたのだ、引くわけには行かぬ。こうなれば、直接相手をしてくれる」

セルは、2メートルはある戦斧を構え前線に出た。

アイオリアの一振りで、重装歩兵が首を飛ばされ崩れ落ちた。

「リュエル、ヒルト。指揮しやすいところまで下がる」

アイオリアはなれない馬上において奮戦している2人に声をかけ、馬首を返す。それに続き、アイオリアの直接指揮下にある騎士たちが続いた。

「リュエル、ヒルト。この戦況、どう思う？」

「このまま、押せそうですね」

と、リュエル。

「反乱軍の両翼が、まだ動いていません。用心が必要かと思います」

と、ヒルト。同じ戦場にいて、見えているものが違うというのは面白い。

「ヒルトの言うとおりだな。リュエル、指揮官はできるだけ広い視野で戦況を見ることだ。目先のことに惑わされると、足元をすくわれるぞ」

アイオリアは2人から目線をはずし、戦場を見つめる。
「よし、敵の後方部隊も動き出したようだし頃合だな。全軍に通達。部隊を2キロほど下げる。ただし、ゆっくり、整然と」

「敵部隊、下がります」
部下の報告に、セルが大声で指示を出す。
「今だ、押し戻せ。右翼、左翼の部隊も投入しろ！」
命令と同時に、伝令の兵が飛び込んできた。
「ファル様より伝令」
しかし、伝令の内容を聞いたセルは激昂した。
「深追いはするな。だと、兄者に伝えろ。戦いには機というものがある。それに乗れなければ勝てる戦も勝てないとな。全軍突撃だ」

アイオリアは、部隊を湿地と森に囲まれた地形にまで下げた。反乱軍がいくら数で勝っていていても、一度に攻撃を仕掛けられる部隊は限定される。
「さて、ここからが正念場だな。アルゴ百騎長に伝令。俺と共に残り殿を勤めろ。他の部隊は所定の位置まで撤退」
アイオリアは、リュエルとヒルトに向き直る。
「2人は他の部隊と共に下がれ」
「側に置いてください！」
「僕らも戦えます！」
2人の言葉にアイオリアはため息をついた。いつもは素直に言うことを効く2人だが、様子を見るにこれだけは譲ってくれそうもない。
「しかたないな……　離れずについて来いよ」

「敵軍、さらに後退します」
兵の報告にセルが忌々しげに答える
「ぬう。押さんか。一兵たりとも逃がすな！」
「無理です。湿地と森に阻まれ、兵を配置できません」
セルは側に立っていた木に、戦斧を突き立てた。
「ええい、騎馬兵を先頭に立て追え！　いや、お前らには任せられん！　俺が直接指揮する！」
セルは突き立てた戦斧を引き抜くと、直接指揮下にある部隊を前進させた。

次回予告

後退する王国軍。それを追う反乱軍。

そこに待っているものは。

次回　内乱１７　罠

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ２６：内乱１６　激突（後書き）

うむ。今回もセリフが多い６：４ぐらいか……
せめて逆の割合だったらもう少しマシなものになりそうなのですが
（汗

しかも今回は場面変化が激しい（汗汗
自身の描写力のなさが嫌になります（泣

合戦の描写として参考になるものってないだろうか……

追伸　２７日０３１６時
誤字の報告、ありがとうございました。メール返信できませんでしたのでこちらでお礼を申し上げます。

第2章　FILE27：内乱17　罠

撤退する王国軍に反乱軍の騎馬隊が襲い掛かるが、殿(しんがり)を勤めるアイオリアの直属部隊の抵抗に攻勢をかけられずにいる。
「アイオリア様、後は我々に任せてお引きください」
アルゴ百騎長が、馬上より弓を引くアイオリアに進言する。
「だが……」
「我々のことが信じられませぬか？　アイオリア殿」
そのグリーンの目を細め、立派なあご髭の上にある口元を楽しげに緩めながら、アイオリアに問うアルゴ。彼もアイオリアより軍歴の長い百戦錬磨の騎士だ。状況判断も統率力も問題はない。
「すまない。百騎長に任せる」
アイオリアは、残った矢を引き敵部隊に放った。

敵軍から放たれた矢が、セルの兜に当たり火花を散らす。
「ええい！何故あのような少数の兵を崩せぬ」
「恐れながら、森が深く、我が方も兵力を投入できませぬ。ここは、一度引いて部隊の再編成を行ったほうがよいと意見具申、申し上げます」
セルの怒声に、すかさず現状に不安を覚えた副官が進み出た。
「ふん、口は達者だな。まあよい……」
一旦、後退することを言いかけたとき、王国軍から放たれた矢が雨あられと降り注ぐ。いくつかの矢がセルの甲冑に当たり火花が散った。
「何をしていているか！　役立たず共！　蹴散らせ！」
怒声を発すると同時に、目の前の副官が崩れ落ちた。矢が後ろから喉(のど)を貫ぬいている。即死だ。

セルは、一瞥をくれただけで先ほどの副官の進言など忘れた。
「全軍突撃！　最後の一兵になるまで前進しろ！」

「わが軍は、圧倒的ではないか」
ロスの顔に喜色が浮かぶ。
「ファル、前線の様子が見たい。本体を前進させろ」
「なりませぬ。これは罠です。我が軍の攻勢が限界に達した時、敵の反撃がきます」
ロスは、鼻白んだ表情をファルに向けた。
「ファル、お前を指揮官から解任する。失せろ！　臆病な指揮官はいらん。全軍、前進だ。敵部隊を追撃する」
「父上、な、何を！？」
いきなりのことに呆然とするファル。しかしロスが次の瞬間に放った言葉は、ファルにこの戦の敗北を確信させた。
「うるさい！　砦に戻っておれ！　お前の処罰は追って知らせる」
ファルは下を向き、唇を噛締めた。

「ファル兄上、一体何が？」
砦に帰還したファルをラスが出迎える。
「俺は指揮官を解任されたよ、この戦は負ける。お前も覚悟して置け、父上もセルのやつも、暴走している」
ラスは薄笑いを浮かべた。
「そうですか。クックックッ」
「何がおかしい」
ファルはラスの胸ぐらをつかむ。その瞬間、ファルの腹部にナイフの刃が根元まで埋まった。ラスはそのナイフをひねるようにして

引き抜き、再度、埋め込んだ。ファルが、胸倉を掴んだままラスにもたれかかる。
「なっ、なにを？」
自分を刺した弟の顔に浮かぶのは、哀れみの表情。
「先代のニスと父上を恨むのだな。しかし、思ったように踊ってくれた２人と違って、貴方には苦労しましたよ。兄上？　もう聞いていないか」
ラスは血に濡れたナイフを投げ捨てる。
「すぐに、２人も送って差し上げますよ。先に待っていてください兄上」
ラスは薄笑いを張り付かせたまま、すでに物言わぬ兄の身体を突き飛ばした。

次回予告

フェンリアはコウレクト砦に馬を走らせる

その頃、王国軍は反乱軍に対して反撃に転じた。

次回　内乱１８　反撃

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２７：内乱１７　罠（後書き）

セリフの多さは少しは改善できたかな？
まだまだ、ダメダメですが。

ラスが動き出しましたねぇ。
彼の目的は何でしょうね（笑

追記　２７日０３１６時
誤字の報告、ありがとうございました。メール返信できませんでしたのでこちらでお礼を申し上げます。

追記　２７日２２４７時
王国軍と国王軍の表記を王国軍に統一しました。
ご指摘ありがとうございました。

第2章　FILE28：内乱18　反撃

「ミュラー司祭、今、ラスといいましたか？　カレル＝ラス」
後方の野戦病院で、フェンリアはミュラーからフーリレイ公爵家のことを聞いた。
「フーリレイ＝ラス。公爵家の三男です。フェンリアさん」
「ああ、カレルは、母方の姓だったはずです。彼がロス公爵に味方するなんて……　ミュラー司祭、馬を借ります」
言うが早いか、フェンリアは繋いである馬に飛び乗る。
「何処へ行くつもりですか？」
「コウレクト砦へ」
そう答えてフェンリアは馬にムチを入れる。しばらく走り、コウレクト砦が見えてきたところで、ゼロが追いついてきた。
「ゼロ、危険よ」
「相棒を置いていく理由にはならない。俺はついて行く」
ここまで追ってきたのだ、大人しく帰るわけがないと悟ったフェンリアはただ一言、「好きにしなさい」とだけ言った。

セルは、先頭に立って逃げる王国軍を追撃する。
「ふはは、敵を殲滅しろ！　突撃！」
この時、反乱軍は大軍を配置する事のできない地形と、迅速に後退する国王軍の追撃のため、アイオリアの思惑通りに細長い陣形になっていた。
戦斧を振り回し、王国軍を追撃するセルの視界が開けた、森を抜けた開けた場所で彼ら反乱軍を迎えたのは、剣山（けんざん）のような槍衾（やりぶすま）と無数に降り注ぐ弓矢のシャワーだった。
半数以上の騎馬兵が馬上より叩き落されたところで、弓矢のシャ

ワーが止む。そして、長槍を構えた歩兵が前進してくる。セルは敗北を悟ったが、勝機の残された唯一の手を打つことにした。
「俺はフーリレイ公爵家次男、フーリレイ＝セルだ！　王国軍総大将、アイオリア＝ロウ殿に一騎討ちを申し込む！」

「公爵家の三男と知り合いなのか？」
馬を走らせながらゼロがフェンリアに訪ねる。
「孤児院で神学校へ行くまでの2年ほど一緒だったの。自分は公爵家の血を引いていると言っていたけど」
フェンリアは当時を思い出す。公爵家の血を引いていると語ったときのラスの目には憎悪しかなかった。母親を失い一人行き倒れていたところを保護されてことと、何か関係があるはずだが、結局、詳しい事情を知ることはできなかった。
「認知されたと言う事か？」
フェンリアは首を傾げた。
「だとは思うのだけど……」
フェンリアには、ロスがあれだけ憎んでいたフーリレイ公爵家に協力するとは考えられない。そこで思い当たるのが復讐という言葉。
「おかしな点でもあるのか？」
「うん、それを確かめたいの。そして、場合によっては全力で止めるわ」
フェンリアはこの反乱自体、ロスが復讐のために仕組んだのでないかと考えていた。

「いかがなさいますか？　アイオリア様」
セルの口上を聞いたヒルトがアイオリアに訪ねる。

「ほぼ勝ちかけた戦だ。それを捨てる事はない」
１０年ほど前なら一騎打ちを断るのは恥とされていた時代だった。決闘ならまだしも今の時代、一騎打ちを断ったからと言って蔑まれることもない。無理に一騎打ちに応じ勝利を逃がすことの方が物笑いの種になるだろう。
アイオリアは抜剣し高々と剣を掲げる。
「全軍突撃！」
王国軍による反撃が始まる。

次回予告

総崩れとなる反乱軍。

リヒッター百騎長はセルを討つ。

次回　内乱１９　セルの最後

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２８：内乱１８　反撃（後書き）

一騎打ちというのは、日本の武士によって行われたものらしいです。
元寇以降は、日本も集団戦闘がメインになり廃れました。
本作では集団戦に移行した状態ですね。

西洋の騎士が行う一騎打ちはほとんどが試合（決闘とは別物）です。
集団戦がメインで日本のように、戦場では行われなかったようです。

と言うことで、一騎打ち云々やアイオリアが馬上で弓（馬上で弓を使うのは日本の武士とモンゴル辺りの騎馬民族）を使っているところは、日本の武士がモデルです（笑

ではまた。

追記　３０日　０３３９時
誤字の修正。報告ありがとうございました。

第2章　FILE29：内乱19　セルの最後

戦場は血の匂いであふれていた。先ほどまで肩を並べていた戦友が、物言わぬ骸となって地に伏す。仲間を助けるどころか斬り捨てて我先に逃げ惑う。狂気と混乱が流血に拍車をかける。

反乱軍の指揮系統は完全に崩壊していた。

敗走する反乱軍に、王国軍の部隊が容赦ない追撃をかける。矢を放ち、騎士がランスを押し立てて追い詰めていく。

地形を利用した縦深陣に誘い込まれ指揮系統を失い、烏合の衆と化した反乱軍と、少数の部隊に分散しているとはいえ、敗走ルートの要所要所に配置された王国軍の執拗な攻撃。

それは既に戦闘と呼べるものではなくなっている。

「もう一度言う！　武器を捨て、投降の意志を示す者は殺すな。兵達に徹底させろ。破るものは、武勲のある無しに関係なく犯罪者として裁く！　忘れるな！」

王国軍の指揮官達は、勢いに乗る兵達をコントロールすることに必死だった。

戦闘が一方的になると、血に酔った兵士たちが暴走することが少なからずあるからだ。

無抵抗な投降兵を皆殺しにし、近隣の村になだれ込み、焼き、奪い、犯し、殺す。古今東西、何処の戦場でも見ることのできる光景だ。

「ええい、こうなれば誰でもよい！　この中に誇りある騎士は居ないのか！」

3メートルはある長槍を持った歩兵が十重二十重に取り囲む中、セルが吼えた。

「ふん、勝敗の決まってからの一騎打ちに何の意味があるというのだ？」
リヒッター百騎長は鼻で笑った。
「第1部隊、構え！　突け！」
リヒッターの号令に、セルを取り囲んだ兵達が一斉に長槍で突く。
「うぐっ…うがぁぁ」
セルが己の身に突き刺さった槍を戦斧でなぎ払う。それと同時に前方に居た兵と、後ろに居た兵が入れ替わる。
「第2部隊、構え！　突け！」
セルの身体に、さらに十数本の槍が突き刺さる。
「ぐっわっわぁぁぁっ」
セルは雄叫びと共に槍をへし折りながら、斧を振るう。運の悪い兵士の頭が、柘榴（ざくろ）のようにカチ割られ、絶命する。
「第3部隊、構え！　突け！」
突かれると同時に、セルがリヒッターに向けて戦斧を投げた。リヒッターはその斧をかろうじてよけたが、バランスを崩し愛馬から転げ落ちる。
「何をしている。討ち取れ！」
しかし歩兵達は槍を突き出しまま固まったように動かない。しばらくして、歩兵達がリヒッターとセルの間を開けた。
セルは十数本の槍で身体を突かれたまま斧を投げた体勢で立っていた。リヒッターは己の剣を抜く。動かないセルにおそるおそる近づくとセルは絶命していた。
「一人でここまでやるとは敵ながら……　よいか！　遺体は、敬意を払い丁寧に扱え」
リヒッターは副官にそう命令した。

次回予告

砦に逃げ帰るロス公爵。そこでロスが見たものは。

ラスの刃がロスに迫る。

次回　内乱２０　目的

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ２９：内乱１９　セルの最後（後書き）

ここのところ誤字が多くて……
ご指摘してくださり、ありがたく思っています。
今回も推敲はしたつもりですが……

さて、セルさんがフルボッコにされて戦死です。
一騎打ちの無視については、リヒッター百騎長のセリフの通りです。
勝敗がすでに決していることと、時代が集団戦闘重視に移り変わっており一騎打ちが重要視されていないことが理由ですね。
でも、開戦前の一騎打ちは現在でもありえると言う設定です。

追記　１日０２２４時
下手こいたー
ｏｒｚ　まだ誤字がありました。
ご指摘ありがとうございました。
『そんなおかんけいねぇ！』とは開き直れませんしね。

第2章　ＦＩＬＥ３０：内乱２０　目的

「通しなさい。ラスに用があるといっているでしょう」
しかし、門番は譲らなかった。
「そう言うわけにはいかない。ラス様は作戦中だ」
フェンリアには珍しく、感情を抑えるように門番に言い返す。
「なら、問合せだけでもしなさい。ガイア教の伝道師、フェンリア＝ヒルデガルドが王国軍従軍神官として面会を求めている。と伝えなさい」
「ガイア教の伝道師？　その伝道師様が暗殺にでも来たのか？　後ろの兄ちゃんは、純白の死神だろ」
どうやら、ゼロの素性を知っているらしい。フェンリアもゼロが有名な傭兵（ようへい）であることは知っていたが、門番がひと目でわかるほど有名人だったとは思わなかった。
「ゼロ、なかなか有名人だったのね。彼は、３ヶ月前から私の従者よ。簡易でとはいえ、ちゃんと洗礼も受けているわ」
門番にゼロとの関係を説明したところに、物見台から報告が入る。
「味方が敗走してくる。門を開けろ！　部隊を編成、ロス公爵様をお助けするのだ」
門が開き、騎馬隊が出て行く。フェンリアが周りを見回す。先ほどの門番の姿は見えない、物見の兵達の視線も敗走してくる自軍に釘付けだ。
「ゼロ、行くわよ」
「いいのか？」
いつものように無表情に問い返すゼロ。
「こんな所で押し問答している時間ないもの。ここは、忍び込みましょう」
「露払（つゆはら）いは、俺がやろう」

ゼロはフェンリアの手を引いて走り出した。

「ファル、ラス、どこにいる！」

息を切らせながら広間に入ってきたロスは、息子達を呼んだ。セル亡き今、頼れるのは彼らだけなのだ。

「何処だ。返事をせんか」

視界の片隅に、金髪の青年がイスに座っているのが見えた。あの後姿はファルだ。

「ファル、返事をせんか？」

いささか乱暴に肩を揺さぶる。すると、ファルは力なく床に倒れた。今まで気が付かなかったが、床はファル自身の流した血液で血の海だ。

「ひぃ～」

ロスはへなへなと床に座り込み、必死に後退る。腰が抜けたらしい。

「父上」

「ひぃ！」

突然の呼びかけに悲鳴をあげ、逃げ回ろうとするロス。

「父上、どうなされたのです？」

声の方向を向くと、ロスを見下ろすラスが立っていた。

「ラ、ラ、ラス。ファ、ファルが……」

「兄上が、どうかしましたか？」

そう言って、無表情に兄の姿を一瞥（いちべつ）する。

「ああ、見たのですね。兄上は先に行って待っているそうですよ。私が送って差し上げました」

ロスにそう告げると、左手に持ったショートソードを引き抜く。

「な、な、何故だ？　どうして？」

「いいですよ。教えて差し上げます。説明する義理はないのでしょ

うが、自分の死ぬ理由ぐらい知りたいでしょう？　父上。いや、兄上というべきですかな。ロス公爵」
ロスは自虐めいた笑みを浮かべ、ショートソードの切っ先をロスの喉元に突きつけた。

次回予告

ロスに明かされる真実。

その場に飛び込んだフェンリアは……

次回　内乱２１　終結

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ３０：内乱２０　目的（後書き）

門番。仕事しろ（笑

なんかラスが最後に気になることを……

では、次のページへ。

第2章　FILE31：内乱21　終結

「あ、兄だと……」
「ええ、あなたは気がついていなかったでしょうけど、私の本当の父は先代のニスです。驚きましたか？」
自嘲的な笑みを浮かべるラス。
「私があなたの息子だと名乗り出た時にあっさりと認めたときには笑いましたよ。そうですよね、あなたには思い当たる事があったのですから。動くな！」
少しずつ逃げようと身体を動かすロスの首筋に、ラスが持つショートソードが浅く刺さり血玉が浮く。
「どこへ行くのです？　せっかく、あなたが死ぬ理由を説明して差し上げているのです。大人しく聞いたらどうです」
「い、命だけはた、たすけて」
ラスは軽蔑しきった視線を向けながら再び口を開く。
「あなたにとっては、只の遊びだったのでしょうね。私の母を監禁し、1週間に渡り犯し続けたことなど……」
ロスが首を横に振る。
「ち、違う！　ワシは、ただソニヤを……」
「喋るな！　その口で母の名を言うな！　……そして、その事を知ったニスは、母を捨てたのですよ。母が自分の子を身ごもっている事を知りながらね」
ラスが今までロスに隠し続けた憎しみが目に宿る。
「ワシは本当に……」
「黙れといっている！」
ラスの剣幕にロスは黙り込む。
「あなた方、貴族のやり口はわかっている。欲しいものがあれば力ずくでも手に入れ、それに少しでも他人の手がつけば、あっさりと捨て去る。捨てるだけでは飽き足らず壊そうとしましたね。おかげ

で母は私の目の前で殺された」
　ラスはそこまで言って、気持ちを落ち着けるためか深呼吸をする。
「母が息を引き取る前にすべてを語ってくれましたよ。そのとき私は、母に誓ったのです。フーリレイ公爵家の血筋を根絶やしにするとね。そう、私も含めてね」
　ラスがショートソードを振り上げる。次の瞬間、金属同士がぶつかり合う甲高い金属音とともに、ラスの手からショートソードが弾き飛ばされ床に転がる。
「カレル＝ラス！」
　ラスは自分の名を呼ぶ人物の方に顔を向けた。
「リア……　フェンリア＝ヒルデガルド」
　蒼い神官服にダークブラウンの髪と瞳をした女性と、全身白づくめの男性が立っていた。
「次からは突く事だな。振りかぶると隙ができる」
「ゼロ！　ちょっと黙っていて！」
　神官服の女性が白づくめの人物を一喝する。
「リア、君をここに招待した覚えは無いのだがな」
「忘れたの？　私はこうと決めたらやり遂げる女よ。それに、幼馴染に会いに来ただけだけよ。復讐なんてものに現（うつつ）を抜かすおばかさんは止めないとね」
　フェンリアの答えにラスが冷笑をもらすが、何故か楽しそうだ。
「それでどうするつもりだ？　どのみち王国軍に捕まれば、ロスも私も王家に対する反逆罪で死刑だ。その意味では私の復讐は完了している」
「そうね、でも幼馴染として私の願いを聞いてくれないかしら。今すぐ降伏してちょうだい。これ以上、あなたの復讐の犠牲者を増やさないで」
　フェンリアは真っ直ぐラスの瞳を見据える、ラスも視線を外さなかった。
　どれくらいそうしていただろうか、ラスが瞳を閉じた。

「昔から、君にはかなわないな」
突然、狂ったような大声が響き渡る。
「終ってたまるか！　こんな所で死んでたまるかぁぁぁぁ！」
ロスがラスのショートソードを拾い、叫びながらラスの腹に突き立てる。
「ぐはっ」
ラスは腹にショートソードが刺さったまま床に座り込む。床には血液が滴り落ち血溜まりを作る。
「ゼロ！」
フェンリアが叫ぶよりも早く、ゼロがロスを取押えるが、もはや正気を保っているとは思えない。顔を歪めたまま笑い、唇の端からは涎が糸を引いている。
「ラス。今、傷口を塞ぐから」
「無駄だ、ショートソードには毒が塗ってある。ここまで深く刺されたら致死量を超えているし解毒剤はない。ここで生き延びても処刑されるだけだ。ここで死ねるならいっそ幸せだろう」
フェンリアは答えずに治癒の呪文（スペル）を唱える。傷口から焼けるような痛みが引いていくのがわかる。
「私を軽蔑（けいべつ）してくれていいわ。今、ここであなたを死なせるわけには行かない。ここであなたまで死んだらフーリレイ一族の首だけではすまない」
傷口がふさがったのを確認して、今度は毒消しの呪文（スペル）を唱えるフェンリア。
そう、王国の威信を保つために首謀者（しゅぼうしゃ）の死刑は動かしようはない。だが首謀者達が死んでいれば、その指揮下にあった者が生贄（スケープゴート）の山羊として処刑台に上げられる。それを防ぐためにフェンリアはラスの命を助けると言っているのだ。
魔法が発動した後も、俯いたままフェンリアが言葉を紡ぐ。
「あなたの命令に従っただけの者たちへ累（るい）を及ぼさないために、あなたとロス公爵の命は国王の元まで持っていく」

その言葉を聞いてラスが笑う。今までの冷笑ではなく愉快そうに。
「俺の首一つで、そこまで出来るのか？」
寂しそうに笑いながらフェンリアは頷く。
「私ではもうあなたは救えないけれど、助けられる人は助けたい」
まだ力のはいらない身体に鞭打ち、ラスが立ち上がる。
「肩を貸してくれないか？　バルコニーに行きたい」
フェンリアは黙って肩を貸し、バルコニーに向かう。バルコニーに出るとラスは砦を守ろうと準備を始めている部下達を見る。
「全軍に告ぐ。白旗を揚げろ。武器を捨て城門を開け！」
「ラス。ありがとう」
「あいつらを頼む。言えた義理ではないが守ってやってくれ」
「ええ、必ず」
「まあ、君と再会できて良かったよ」
と、ラスは憑き物が落ちたような表情で笑った。
こうして、フーリレイ公爵家の起こした反乱は幕を閉じた。

次回予告

勝利した王国軍。

しかし町の住人との間にはいざこざが増え始め。

次回　つかの間の平穏　そして帰還

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第2章　ＦＩＬＥ３１：内乱２１　終結（後書き）

衝撃の事実（笑

このエピソードを入れる必要があったのかと言うのは、私が後に生かせるかどうかでしょうね。

王国の腐敗がわかる場面を入れておきたかったのですよ。外伝1にも多少入っていますけどね。

さて内戦も終わり2章もまとめを残すのみです。

第2章　FILE32：内乱22　つかの間の平穏　そして帰還

「フェンリア、大丈夫か？」
ゼロが窓の外をボーと眺めているフェンリアに声を掛けた。戦闘が終結して4日になるが、フェンリアはずっとこんな感じだ。
「フェンリア？」
「…ゼロ…変よね。私は今でも間違ったことはしていないと思っているけど、やるせないわね」
ゼロは、何も答えなかった。いや、答えられなかったというのが事実か。ゼロは生まれてからずっと戦場にいたのだから、死は絶えず彼のそばにあった、自分の死を覚悟した事も1度や2度ではない。人の生き死に近すぎる場所にいた。人の生死について深く考えたこともない。
「よおーし」
フェンリアは突然大声をあげると、ゼロに向き直る。
「ゼロ、病院に手伝いに行きましょう」
「いいのか？」
「何いっているの。いつまでも、空を眺めていたってしょうがないじゃない」
フェンリアがゼロに向けた笑顔は明らかに作ったものだったが、ゼロは何も言わずに頷いて、フェンリアの後をゆっくりと歩き出した。

「くそったれ、どうしてこんなに忙しいんだ」
シャリアールが頭を掻きなら、大声をあげる。
「しかたないですよ。戦死者のリストだけでも大変な量ですし、食料などは日々消費されていますからね。誰かが管理しないと」
リュエルが、笑いながら答える。

「アイオリアとヒルトはどうした？」
「見回りに行っています。住人と兵士達との諍いも増えていますからね。衛兵の皆さんも大変みたいです」
「そうか。治安維持の部隊だけ残して、早いところ引き上げた方がいいかもしれないな」
シャリアールはため息をつく。
「シャリアール様、アイオリア様が戻られるまでに、書類をまとめてしまわないと…」
言葉とは裏腹にニコニコとしているリュエル。そんなリュエルにシャリアールは呆れ顔を向ける。
「楽しそうだね。お前」
「武術よりは、こっちの方が向いているみたいです、僕」
そう言って笑顔を向けるリュエルに対して、シャリールは肩をすくめた。

場末の酒場では、非番の兵士たちが騒いでいる。
「あの、そろそろお勘定の方を……」
「おい親父、本気か？　俺達は貴様らを解放してやったのだぞ。その俺たちから金を取るのか？　ああ？」
兵士は腰の剣に、手をかける。
「私どもは、商売人です。売り物を無料で出せと、と言われるのは死ねと言われるのと同じ事」
店主は震えながらも引かない。
「いい根性だ。そこに直れ」
兵士が剣を抜くと、周りから歓声が上がった。
「いいぞ！　ばっと斬ってしまえ！」
「さっさと斬らぬか！」
酔った周りの兵士達が煽る。

「やめぬか！」
酒場にいた全員の視線が酒場の入り口に集まる。そこには、きっちりと王国軍の制服を着込んだ若い騎士が立っていた。
「剣をしまい、勘定を払って原隊に戻れ！」
「ああ？　お偉い騎士様がこんなところに何のようですか？」
おどけた様子で兵士は言うが、剣は抜いたままだ。
「今ならば、不問にすると言っている」
「うるせー」
兵士が剣を振るう。次の瞬間、ガキンと金属同士がぶつかる音が響いた。
「アイオリア様！」
男の剣を弾いたのは、騎士見習いの少女だ。彼女の叫びとともに衛兵が酒場になだれ込んでくる。
「全員、拘束しろ」
衛兵長が叫ぶ。
「ヒルトすまない。助かったよ」
「アイオリア様、無茶なマネは止めてください。お願いします」
ヒルトの瞳には涙が浮かんでいる。アイオリアは、ヒルトを抱き寄せて落ち着くようにと、背中をポンポンと軽くたたく。
「衛兵長、非番の兵士達を原隊に戻らせろ。それからシャリアールに連絡して残党狩りも打ち切らせ、部隊を集結させろ」
「アイオリア様……」
アイオリアはヒルトに笑顔を向ける。
「あまりここにいては、ああいう連中が出てくるからな。ヒルト、王都に帰ろう。主人、勘定だ」
アイオリアは、自分の財布を店主に渡す。
「足りなければ、俺を訪ねてこい」
「いえ、多すぎます」
「そうか、ならば残りは迷惑料だ。すまなかった」
「いいえ、こちらこそありがとうございました。アイオリア様、こ

れをお持ちください。ウチの酒蔵にある一番上等の酒です」
　そのボトルは、幻の酒といわれるほどレアな名酒だった。アイオリアは店主の心遣いをありがたく受け取ることにした。
「ありがとう、主人。今度ここにくることがあれば、ゆっくりと寄らせてもらうよ」
　しかし、この言葉は果たされることはなかった。

次回予告

帰還したアイオリア達

しかし、待っていたのは新たなる戦いだった。

次回　新たなる戦いの序曲

風は貴方にどんな物語を残しましたか？

第２章　ＦＩＬＥ３２：内乱２２　つかの間の平穏　そして帰還（後書き）

今回も読んでいただいた方には感謝。

さて第２章も次回で終了です。で、最終章の３章に移動して、とうとう魔王軍ＶＳ王国軍の戦いが始まります。というか始まるといいなぁ（笑

で、２章のラスト１話ですが、個人的には明日中に更新したいと考えています。

遅くとも今週中に……

第2章　ＦＩＬＥ３３：内乱２３　新たなる戦いの序曲

「よく無事で戻った」
宮廷の前でアイオリアを待っていたのは、カーライン公爵だ。
「只今、帰りました。申し訳ありません」
「なにを謝るのだ。よく我が軍の犠牲を最小限に抑えてくれた」
「いえ、たくさんの血が流れました」
「……」
カーラインは黙って、アイオリアの肩を叩いた。確かに自軍の被害は最小限に抑えられたが、戦闘途中や敗残兵による略奪等で全滅した村も、ひとつやふたつではすまない。
「兵達はしばらく隊舎で待機させておいてくれ」
カーラインの言葉を受けて、シャリアール達は隊舎に引き上げていく。
「王との謁見だ。疲れているだろうが、付き合ってくれ」
「はい。わかりました」
宮仕えの辛さだ、断るわけにもいかない。アイオリアは諦めを含んだ笑みをこぼした。

「リア姉さん」
カーラインの屋敷を訪れたフェンリアとゼロは、杖を持った女性に声をかけられた。
「ミ、ミシェイル？」
聞き覚えのある声に、フェンリアは思わず聞き返した。
「やっぱり、リア姉さんだ」
ミシェイルは、そう言って微笑んだ。
「ミシェイルは変わったわね。一瞬わからなかったわ、こんな美人

さんになるなんて…」
目の前にいるミシェイルに何か違和感を覚えた。手に持った杖とフェンリアを見る視線の焦点がずれている。
「ミシェイル…あなた、目が…」
言葉が出ないフェンリアに、ミシェイルは意識して明るい声で答える。
「あっ、わかっちゃった？　もう、ほとんど見えないの。明るさとか人影くらいなら何とかわかるのだけどね。カインには、王位まで放棄させてしまって申し訳なくおもうのだけど、そばにいてくれるだけで良いと言ってくれるのよ。ちょっ、ちょっとリア姉さん」
フェンリアは、ミシェイルを抱きしめていた。ミシェイルの明るく告白する姿、しぐさから、目の事はそれほど重荷になっていないことがわかる、嘘も言っていない。それでも、フェンリアは聞かずにはいられなかった。
「ミシェイル。今、幸せ？」
ミシェイルは、静かに目を閉じ、はっきりと答えた。
「うん、とっても」

「なぁ、いいのかよ」
従卒とはいえ謁見の間まで付いていくわけにも行かず、控えの間に残るように言われたリュエルがいつもの丁寧な口調でなく、年相応の物言いで少し離れた場所に座る同僚に話しかけた。
「なんのこと？」
話しかけられた同僚、ヒルトはいつものように他人事のように答える。
「次は多分、魔族征伐だ。同族なんだろ」
「珍しいわね。心配してくれるの？」
「そうじゃない。途中で裏切られると迷惑だ」

リュエルにしては珍しく、イラついているらしい。
「私はアイオリア様に剣と忠誠を捧げたの。アイオリア様の側にいる限り、敵が誰だろうと関係ない。アイオリア様の敵は、私の敵」
「信じてもいいんだよな」
ヒルトは答えなかった。リュエルも答えを期待したわけじゃない、いや、答えは既に聞いている。
リュエルにしてもヒルトにしても、アイオリアが戻ってくるまでのわずかな時間が、こんなにも長く感じたのは初めてだった。

「そう、ルノアは魔王軍の従軍神官をしているのね」
「ええ、とってもお元気そうでした。あの…リア姉さまは、今後どうなされるの？」
ミシェイルの問い掛けに、フェンリアは考え込んだ。
「そうね。ルノアにも会いたいけど、結婚祝代わりにミシェイルの願いを聞いても良いわよ」
側で紅茶を飲んでいたゼロがフェンリアのほうをちらっと見たが、声に出しては何も言わなかった。
「言ってみなさいな。迷惑だなんて思わないから」
「リア姉さん」
ミシェイルが目線を手元のカップに落す。そして数分の時間が流れたがフェンリアも何も言わずに待ち続ける。
「リア姉さん、カインに力を貸して、私たちの前では平気な顔をしているけど、微妙な立場にいるの」
フェンリアはにっこりと微笑み即答する。
「いいわよ。どれほど力になれるかわからないけどね。ゼロもいい？」
ゼロはいつもと変わらず無表情のままで、手に持っていたカップをテーブルに戻す。

「俺はお前についていく。それだけだ」

高さが3メートル程ある扉をくぐると、そこには赤い絨毯が真っ直ぐと王座に続いていた。絨毯の右手には武官が、左手には文官が並んでいる。その中をカーラインは平然と進み、その後をアイオリアがついていく。王座前まできたカーラインが片膝をつき頭を垂れる。アイオリアもそれに習った。

「カーライン公爵、叛乱の鎮圧ご苦労であった。面を上げよ」

カーライル王の力強い声が、広間に響いた。

「はっ、ありがたきお言葉。しかしながら、功績のほとんどはここにいるアイオリア千騎長と現場の兵士達です。私より彼等に声をかけていただきたいと存じます」

広間が一瞬ざわめいた、謁見の間で王に意見するなど前代未聞の出来事だ。

「公のいう事も、もっともであるな。アイオリア千騎長ご苦労であった。他の者達には声をかけることはできぬが、心ばかりではあるが兵士達に褒美を取らす」

「はっ、兵達も喜びます」

「ふむ、アイオリア千騎長、そなた達の働きには期待させてもらうぞ。千騎長、私の前へ」

アイオリアが玉座の前へ進み出ると、カーライル王は一振りの剣を手渡す。

「将軍達の列に加わる事を許す。その忠誠、王国の為に使え」

「謹んでお受けいたします」

アイオリアは剣を受け取ると、アイオリアの為に開けられた場所に着く。

「カーライン公爵。そなたには、まだ領地がなかったな。フーリレイ家の領地をすべて与える。つつがなく統治せよ」

あまりの事に言葉が出ないカーライン。
「どうしたのだ？　不服か？」
「いえ、そんな事は、身に余る事に言葉が出ませんでした。粉骨砕身、王国の為につくしましょう」
「それでよい。さて、アイオリア将軍。今一度、公爵の側にこられよ」
アイオリアがカーラインの側で膝をつく。
「両名に、２０日間の休暇の後、魔族討伐を命じる」

フィロス砦、会議室。
金眼の魔王、レイバが会議室の中央に立つ。
「ミレイ＝アルスご苦労であった。そなたの労には充分報いよう。これからもよろしく頼む」
「はい。ありがたきお言葉」
レイバは、ミレイから視線を外し会議室に集まった部下たちを見回す。
「我が軍は、これよりリューム王国の５つの拠点を攻略する。非戦闘員に対する保護は続けるが、今回の目的は５つの拠点の完全破壊である。パンドラ、後の説明を頼む」
パンドラの声を聞きながら、レイバは自分の席に座る。側に座っているルノアがレイバの顔を覗き込んでいる。
「司祭、私の顔に何かついているか？」
「はい、少しお疲れのようです」
「案ずるな。今回の作戦はすべて部下達に任せる」
ルノアは、何も言わなかった。
「すまぬな。また血が流れる」
「レイバ様が御決断なされた事です。わたくしごときを気になさいますな。いえ、自信をもって胸を張っていてください。微力ながら

力をお貸しします」
「そう言ってもらうと、助かる」
季節は夏から秋に変わる。しかし、戦乱の風はまだ収まる事を知らなかった。
勇者と魔王、両者の運命が回り始めた……

第2章　完

第２章　ＦＩＬＥ３３：内乱２３　新たなる戦いの序曲（後書き）

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。
第２章も終了です。
第３章は開始まで１ヶ月ほど空くと思いますので、予告編を来週辺り更新したいと思います。

三章予告（前書き）

一章、二章の本編は終了しましたが、予告だけを残して半年以上放置してしまいました（汗

三章予告

老人は、ハープを奏でる手を止める。
「聖魔戦記　前奏曲　第2章。これにて幕じゃ。続きはまた明日じゃ」
周囲にいた者たちが、吟遊詩人の帽子に銀貨を投げ込む。
「なぁ、吟遊詩人さん。まだ日も高いし、もう少しやってくれよ」
そう言って老人の帽子の中に金貨を投げ入れたのは、銀髪の青年だった。引き込まれそうな空の青と闇のような黒いオッドアイが印象深い上に、女性と見間違えてもおかしくないほどの容姿をしている。
「金貨を入れてくれたあんたには悪いが、わしは、ひとつの物語を奏でている間は、他の物語は奏でないようにしておるのじゃ」
「それじゃ、3章の予告という感じではどうかな？」
「即興になるがよろしいかな」
周りから、拍手があがった。

【ルノア＝ティア】
ルノアは、血液があふれ出ている傷口に、白い手を当てる。
「ガイアよ。傷つき倒れし者に癒しの奇跡を」
しかし何も、起こらない。何度も何度も呪文を唱えるが結果は同じだ。
「ガイア様、力をお貸しください。お願いです。ガイアさまぁぁぁ」

【パンドラ＝フィス】
「よろしいのですか？」

「何のことかしら？」
パンドラは、膝の上であくびをする子犬の頭を撫でながら部下に答える。
「レイバ様は、このところルノア殿の部屋に通っておられるご様子」
「何を心配しておられるのかはわかりませんが、別にかまいませんわ。それどころか、世継ぎでも作ってもらえると助かります」
パンドラはそう言って笑った。

【ジェニス＝ハス】
ジェニスの目の前に、大槍を構えた黒衣の騎士が立ちふさがる。
「兄さん！」
「ジェニス……　覚悟はいいか？」
兄の声は、予想に反して穏やかなものだった。
「俺は、今度こそ兄さんを越える」
ジェニスは愛用の大剣を兄に向かい構えた。
「守るべきものでもできたのか？　良い目をするようになった。しかし！」
ジェニスは、突然襲ってきた兄の一撃を、大剣の腹で受け止めた。

【ディーヴァ】
「全軍、手を出すな！　一騎打ちである！」
よく通る。ディーヴァの声に一瞬にして周りが静寂に包まれる。
敵も味方も、驚くほどその動きを止めた。ディーヴァは満足げに笑う。
「では、始めようか？」
ディーヴァは拳撃用に改良されたガントレットを、開始の合図のごとく打ち合わせた。

【ダストレス＝ヒューガー】
「ルノア殿は、レイバ様をどのように思われていますか？」
ヒューガーの問いに、ルノアの顔が朱に染まった。だがその口は、はっきりと答えた。
「とても大切な方です。普通の恋人同士のような関係ではないかもしれませんが、私はレイバ様を愛しています」
ヒューガーは満足したように頷いた。
「レイバ様を頼みます」

【フレイア＝セレイ】
「何故、そんなことを言うのですか。私は、私は、指揮官です。部下を失ったことも初めてではありません。私達は戦争をしているのです。レイバ様がおっしゃるとおり、勝敗は兵家の常、こんなことで落ち込んでいたら……　落ち込んでいたら」
ヒューガーは何も言わずに、フレイアを抱き寄せた。
「ヒューガー様、駄目です。お召し物が汚れます」
「かまわぬ。それにこの部屋には俺とお前しかいない。それに、こんなことしかしてやれないからな」
「皆・・ごめんなさい・・・ごめん・なさい・・・・ごめん・・な・・さ・・・・い・・・・」
死なせてしまった部下達に、詫びながら泣くフレイアを抱きしめたまま、ヒューガーはフレイアの髪をただ撫でていた。

【ハット＝レプスリー】
「ルノア様、お願いがあります。ヴァネッサを国に帰してはもらえませんか」
ハットが地に伏してルノアに訴える。

「そのことは……」
「無理は承知で言っております。どうかレイバ様に口添えを」
ルノアは困った表情を浮かべる。
「聞き入れてもらえますなら、私はここに残ります。私のすべてをレイバ様の為に使います。どうか口添えを」

【ヴァネッサ＝クロウリー】
「何故だ？　何故、私だけ戻れと言うのだ。答えろ！　ハット」
ヴァネッサの言葉には激しい怒りが含まれている。
「あなただけではありません。他の人たちも一緒ですよ。帰れば武将として復帰できます。貴女であれば、クロウリー家の再興も可能でしょう」
ヴァネッサの怒気を受け流し、ハットはいつもの、のほほんとした口調で答える。
ヴァネッサはハットの胸に飛び込んだ。ほとんど、タックルに近いものだったが、ハットは倒される事なくヴァネッサを抱きとめる。
「嫌だ。嫌だ……　お前が残るのに、ど、どうして私が帰れる。どうして、私の気持ちに気づいてくれぬ。お前は残酷な男だ。私は、初めてお前に会ったときから、こんなにも、お前を……」
ヴァネッサの涙が、ハットの胸を濡らした。

【グロウ】
「ルノア行く。ここは、お、俺が守る」
「グロウ」
ルノアはまだ躊躇していた。
「戦、止めたい。グロウも、お、同じ。ルノア行く」
「ごめんなさい。グロウ、ありがとう」
グロウは、ニコリと笑った。

【ミレイ＝アレス】
ミレイは、ジェニスの手を取ると自分の腹部に当てた。
「この子の為にも、生きて帰ってきて下さい。戦死なんて私が許しませんからね」
ジェニスは、驚きの余り言葉も出ない。それでも、数瞬のあとミレイをその隻腕で抱きしめた。
「ちょっ、ちょっと、そんなに力をこめられると、苦しいです」
ジェニスは腕の力を緩める。
「すまなかった。必ず帰ってくる。君と子供を抱く為に。絶対に。約束だ」

【ルナ＝ハーフムーン】
癒しの光、回復魔法の輝きがいつもより暗いことに、ルナは気が付いた。
「ルノア様？」
「気が付いちゃった？　後１０日もしないうちに、魔法がつかえなくなります」
「そうですか」
ルナは微笑みながら言った。原因はわかっている。どうやら、自分がやきもきする必要はなかったようだ。

【リュエル＝セレス】
「ヒルト。僕は君が嫌いだ！」
リュエルは、言い放った。
「だが、君がこれを、アイオリア様に届けてくれ。僕ではあの激戦区を走り抜けるのは無理だから」

ヒルトはリュエルから本国から送られてきた命令書を受け取る。
「アイオリア様を頼む！」

【ゼロ】
「……」
「なにしているのよ？」
星空を見上げているゼロに，フェンリアが声をかける。
「星を見ていた」
ぶっきらぼうに答えるゼロ。
「それは、分かるけど」
「星が、落ちる」
「えっ？」
「大きな星が、ふたつ落ちる」

【フェンリア＝ヒルデガルド】
「ルノア……」
フェンリアは、ルノアを見た。そして、その腕の中にいるのは……
「姉さん、ごめんなさい……　今、余裕なんてないの」
「ルノア」
「ごめん、一人にして」
フェンリアは、なすすべもなく最愛の義妹（いもうと）から離れた。何もしてやれないことが何よりも辛い。
「フェンリア」
「ゼロ。私は何もして上げられなかった。私はどうしたらいいの？
あの娘に何をしてあげられるの？　何を言ってあげられるの？
わからないよ、わからない。教えてよ、ゼロ」
ゼロに、彼の強さに甘えている。それが、わかっていても言わずにはいられなかった。

「君が、君が思ったことを言ってあげればいい。してやればいい。きっと通じる」

【カーライン＝ライア＝リュティア】
「今回は、僕も戦場に出る。よろしく頼むアイオリア」
「本気ですか？」
「こんなこと、冗談では言わないよ。ミシェイルを泣かしてしまうからね」
　さらっと、のろけるカイン。
「あぶなくなったら、逃げるよ。それに、僕はアイオリアを信頼している」

【ミシェイル＝アントネッリ＝リュティア】
「アイオリア様の言うことを聞いて、怪我しないで。それから無茶もだめ。それから、それから」
「ちょっ、ちょっとストップ。心配してくれるのはありがたいが、僕は初めてのお使いに出る子供じゃないよ」
　カーラインは、苦笑を浮かべる。彼の大切な新妻のこういうところは、出会った頃から変わらない。
「で、でも、貴方は無茶ばかりするから」
「大丈夫。ちゃんと帰ってくるからさ。帰ってきたら、子供作ろうか？」
　耳元で呟いたカーラインの言葉に、ミシェイルの顔が紅く染まった。
「な、な、な、なにを人前で言うのよ」
　少しはなれたところに控えているメイド達には聞こえていないはずだが、慌てる妻の姿に声を上げて笑う。
「あはは、それじゃあ、行って来るよ」

「ガイア様、あの人を、カインをお守りください」
ミシェイルには、祈ることしか出来なかった。

【ウッド＝ハス】
「ウッド様お呼びでしょうか」
ミュラーは、黒衣の聖騎士の前に出る。
「今度の魔族征伐。我が聖騎士団からも１０００騎派遣する」
「１０００も、ですか？」
１０００騎、聖騎士団の約半数に当たる。
「そうだ。そこでその旨、アイオリア殿に伝えてほしい」
「王国軍の下にはいるのですか」
「いや、いつもどおりだよ。だがスジは通さなければなるまい」
そう言い放ち、酷薄に笑う。

【シャリアール＝ライ】
「ほら、リュエル飲め！」
リュエルの杯にシャリアールが酒を注ぐ。
「あ、明日は、魔王軍との決戦・・」
「馬鹿野郎、だから飲むんじゃねえか」
シャリアールは、酒瓶から直接酒を煽る。
「この戦が終れば、おめぇも嬢ちゃんも騎士に叙勲されるかもな」
「僕とヒルトがですか？」
一瞬、顔をしかめるリュエル。その一瞬の表情をシャリアールは見逃さなかった。
「なんでぇ、まだ嬢ちゃんが、アイオリアの命を狙っていると思っているのか？」
「いえ、そんなことは」
「アレはな、命を狙っているヤツの目じゃねえよ。本当の恋をして

いるヤツの目だ。お前さんにもそんなヤツが現われるといいのだがなぁ」

【ミュラー＝ミュウ】
「ルノア殿。従軍神官ミュラー＝ミュウと申します」
ルノアからの返事はないが、ミュラーは構わずに続ける。
「こちらには、停戦交渉の準備があります。我が軍も終戦を望んでいます」
「ディーヴァ殿」
ルノアは、獅子の頭をした将軍を呼んだ。この場にいる者の中で彼が、一番地位が高い。
「はっ」
「よろしいでしょうか？」
「ルノア殿のお考えのままに」
「停戦交渉……　受けましょう。ただし、詳細は明日」
「分かりました。では、明日こちらから使者を送ります」

【アイオリア＝ロウ】
「ヒ、ヒルト」
アイオリアの目の前には、一糸纏わぬ少女の姿があった。
はじめてあった時の、やせて細い少年みたいな裸身ではなく、やわらかな丸みをおび。蛹が蝶へと羽化するように、急速に大人の身体に変化を始めていた。
「私は、アイオリア様が好きです。今日は、抱いて欲しくて来たのです」
それだけ言うと、俯いてしまった。よく見ると肩が小刻みに震えている。まだ、寒いという季節ではない。
アイオリアは、ヒルトの裸身に自分の着ていた上着をかけると、

ヒルトを抱きしめた。

【レイバ＝レスト】
「でや！」
裂帛の気合と共に、両手に持った剣を振り下ろす。
ガキン！　と金属同士が、ぶつかり合う音が響いた。
「やるな！」
レイバが嬉しそうに言う。
「僕はこんなところでは死ねない」
「それは、同感だ！　だが、お互いに剣を引くという選択肢は？」
「悲しい事に、宮仕えだ」
アイオリアが剣を構え直しながら自嘲ぎみに答える。
「行く所まで行くしかないか？」
「そうだな」
両者ともに動きが止まる。息が詰まりそうなほどの静寂が辺りを包む。ここが戦場であることを忘れてしまいそうだ。

聖魔戦記前奏曲第３章
連載開始予定は未定（年内（２００８年）は多分無理）です（笑

三章予告（後書き）

第三章の開始時期は未定です。
転職やら引越しやらの予定がありまして（笑
年内の復帰は厳しいです。

まことに勝手ながら、もし聖魔戦記第三章を、見つけていただいたときはお付き合いしてもらえるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0422d/

聖魔戦記　前奏曲

2010年10月8日12時54分発行